

シカゴ大学時代のジョン・デューイの書簡について (6)
——シカゴ大学教育学部の改組をめぐるデューイと教員団との対立について：
1903年～1904年——

小 柳 正 司

(2007年10月23日 受理)

Some Inspections of the Correspondence of John Dewey during His Chicago Years (6)
—Details of the Antagonism between Dewey and the Faculty of the University of
Chicago School of Education: 1903-1904—

KOYANAGI Masashi

Abstract

The purpose of this paper is to examine John Dewey's correspondence during his Chicago years, especially from May 1903 to January 1904.

The University of Chicago School of Education was reconstituted under Dewey's second year of directorship. Until then, the School had been practically a two-year normal school only for elementary school teacher training, but in July 1903 it restarted as a four-year professional school of education, which included secondary school teacher training courses besides elementary ones. However, there arose a great many conflicts between Dewey and the Faculty of the School, because most of the Faculty members were the former Cook County Normal School teachers, who were put into deeply unease position under the new framework of the School of Education.

Robert McCaul analyzed the course of the conflicts and he concluded that these conflicts were mostly due to Dewey's deficiencies as a school manager. His analysis was on the supposition that while Dewey was a gentle philosopher of sincerity, he could not adequately exercise his leadership as a director and consequently lost the support of the Faculty. However, we can see from his correspondence with Faculty members that Dewey was an aggressive rather than gentle person as the Director. The real cause of the conflicts between Dewey and the Faculty was that they could never understand the significances of his plan for the new framework of the School of Education as a professional school under the regime of the research university.

1. デューイと教育学部教員団との対立

シカゴ大学教育学部は、デューイが学部長となった1902-1903年度以降、それまでのジュニア・カレッジ相当の2年制の初等教員養成機関から、シニア・カレッジ相当の4年制の初等・中等教員養成機関へと脱皮していく。こうした組織改革を進めるうえで、最大の危機となったのは、教育学部長のデューイと教育学部の教員団 (faculty) との対立である。教育学部教員団といっても実質は旧シカゴ学院の教員団であり、彼らは教育学部の教員養成部 (College of Education) および附属小学校 (University Elementary School) の大部分の教員からなっていた。

1902年3月にパーカーが死去したとき、後任の教育学部長にデューイを選んだのは他ならぬ旧シカゴ学院の教員団であった¹。旧クック郡師範学校時代以来、パーカーというカリスマ的指導者のもとで、外部からの批判や妨害に抗して、初等教育の革新に取り組んできた彼らは、パーカーに代わる強力な指導者はデューイをおいて他にないと考えたのである。しかしながら、1902年5月にデューイが教育学部長に就任してから、両者の間にいくつかの点で行き違いが生ずるようになり、ついに1903年4月になって両者の対立は決定的なものになってしまった。この期におよんで、旧シカゴ学院理事会を代表してブレイン夫人が調停に乗り出し、ハーパー学長の裁定をえて、何とか危機を解決したのであった。

デューイと教育学部教員団との対立は、その間の細かな経緯の中身を見ると、どこの大学や学校にもありがちな組織運営上の対立であることがわかる。これについては既にロバート・マッコールによる1次資料を用いた分析があるが²、マッコールの分析はどちらかというとデューイ側の立場に配慮する傾向が見られる。つまり、教育学部長として、あるいは管理職者として、デューイには不慣れで精彩を欠くところが多々あり、教員団との間に対立を招いたけれども、それでも彼は彼なりに誠実な対応に終始したという評価がくだされている。そこでは温厚でリベラルな哲学者というデューイのイメージが基本になっていると言ってよい。

しかし、この間の経緯を示す1次資料を丹念に読み返すと、温厚でリベラルな哲学者というデューイのイメージは修正を余儀なくされる。むしろ、デューイは意外に攻撃的な性格の人物だったというイメージが浮かびあがってくる。そして、彼の攻撃性の背後には、彼の幼い頃からの性格として言われている「内気」「内向的」ということと無関係ではないこともわかってくる。デューイは、思想的にはリベラルでも、大学の一教授として、あるいは管理職者としてはあまりリベラルではなく、党派的な行動が目立ち、特に対人関係においては選り好み³がはっきりしていたように見える。

以下では、1903年4月から5月にかけて生じたデューイと教育学部教員団との対立と、ブレイン夫

1 デューイが教育学部長に選出されるいきさつについての詳細は、拙稿「シカゴ時代のジョン・デューイの書簡について (4) ——シカゴ学院の併合からデューイの教育学部長就任まで：1901～1902年——」 鹿児島大学教育学部研究紀要：教育科学編 第54巻、2003年3月、pp. 170 - 176、参照。

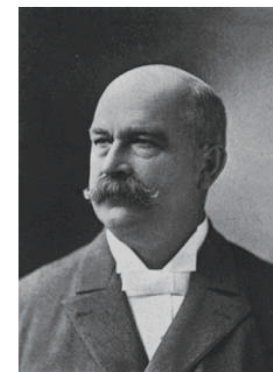
2 Robert L. McCaul, "Dewey and the University of Chicago," *School and Society*, March 25, 1961, pp. 152-157, April 8, 1961, pp. 179-193, April 22, 1961, pp. 202-206.

人の調停、さらにはハーパー学長による裁定という一連の経緯を1次資料によりたどりながら、シカゴ大学教育学部の組織改革をめぐる生々しい内部対立の様子と、教育学部長としての、つまり管理職者としてのデューイの実像にせまってみよう。

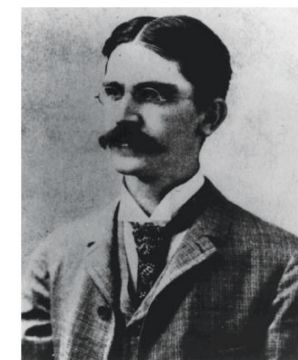
二つの小学校の統合問題

教育学部教員団とデューイの対立が表面化した直接のきっかけは、教育学部の二つの小学校 (すなわち、大学附属小学校と大学附属実験学校) の統合問題である。

両小学校の統合は、旧シカゴ学院がシカゴ大学に併合されることになったとき以来、ずっと尾を引いてきた問題である。旧シカゴ学院がシカゴ大学に併合されてシカゴ大学教育学部となったとき、パーカーは初等教員養成をおこなう教育学部と附属小学校を監督することとし、デューイは中等教員養成を担うシカゴ大学教育学科と大学附属中等学校 (旧サウスサイド・アカデミーとシカゴ工学校) を監督することとし、教育学科の実験学校は当面はパーカーの附属小学校と同じ建物に入って継続するが、2年以内にパーカーの附属小学校に統合されるという取り決めが、ハーパー学長とパーカーとデューイの3者の間で合意されていた。その後、ハーパー学長が両小学校の統合は1901-1902年度 (1901年10月開始) から直ちに実施されるとしたことから、実験学校の父母会が猛烈な統合反対運動を展開し、実験学校の運営経費の赤字分を父母会が自ら負担することを条件に実験学校の存続が認められたといういきさつがある³。



F. W. パーカー



ジョン・デューイ



W. R. ハーパー

ところが、それから1年もたない1902年3月にパーカーが死去し、デューイが後任の教育学部長になるにおよんで、両小学校の統合は今度は実験学校の側から積極的に求められるようになった。パーカーが死去した翌日には、早くも実験学校の父母会役員³の一人が、両校をデューイの指導のもとに統合できるよう運動を開始したいとデューイ宛に手紙を書いている。それに対してデューイは、

3 拙稿「シカゴ時代のジョン・デューイの書簡について (4) ——シカゴ学院の併合からデューイの教育学部長就任まで：1901～1902年——」 鹿児島大学教育学部研究紀要：教育科学編 第54巻、2003年3月、pp. 148-162、参照。

もう少し時期を待つように返事をしている⁴。そして、デューイがパーカーの後任の教育学部長に就任し、教育学科とともに実験学校が教育部に編入されることになり、パーカーの側近だった教育学部主幹のジャックマンが両小学校の合併を秋学期（1902年10月開始）から実施することを提案した際には、デューイは両小学校の秋学期からの統合は見送り、両小学校の教員組織は同じ教育学部に所属しながら当分の間別々の組織のままとする方針をジャックマンに伝えている⁵。

ところが、両小学校の統合に消極的だったデューイが1903年3月頃から両小学校の統合に積極的に動き始めた。当初、教育学部の教員団はジャックマンを含めておおむね統合を歓迎していた。しかし、デューイの統合計画には附属小学校の教員の一部の解雇と、教員給与の引き下げ、そして統合後の附属小学校長に実験学校長のデューイ夫人を充てることが含まれていることを知って、教育学部教員団は態度を硬化させ、デューイが計画を強行した場合には全員辞職をもってこれに抗議すると表明するに至った。以下、その間の経緯を順を追って詳細に見ていくことにする。

実験室の方法による教員養成

ハーパー学長はシカゴ大学創立10周年にあたっての学長報告の中で「結局のところ、実験室の方法（laboratory method）は教育問題の解決に新局面をもたらすばかりでなく、同時に教員養成のすぐれた方法でもあることを証明するであろう。……まさにこのゆえに、両小学校の統合はきつとまくいくことだろう」と述べた⁶。ハーパー学長のこの報告は1901-1902年度の終了後、ということつまり1902年5月にデューイが教育学部長に就任してからしばらくたった後になされたものである。それは事実上、デューイが新教育学部長として、デューイ流の実験室の方法を新たに初等教員養成の分野にまで押し広げることを、いわばシカゴ大学の基本方針として学長自らが支持していることを示していた。

それまでの教育学部ではモデル・スクールの方法、つまり附属小学校での教育実習を中心に据えた範例教示による初等教員養成がおこなわれていた。それは、パーカーというカリスマ的な指導者の薫陶を直接受けた有能な教師たちによる徒弟訓練に近い教員養成のやり方であった。デューイは、そうしたいわば師範学校型の初等教員養成ではなくて、大学の実験室の方法を教員養成の分野に導入し、それによって実験的な研究者の態度をもって日々の教育実践上の諸課題に取り組む教員の養成を考えていた。それは、今日「反省的実践家」（reflective practitioner）と呼ばれるタイプの教師の養成をめざすものであったと言ってよいだろう⁷。そのために、デューイは一方で教員養成におい

4 同上, p. 170, 参照.

5 本稿, p. 参照.

6 William Rainey Harper, “The President’s Report,” *The President Report, July 1892 - July 1902*, The University of Chicago, 1903, p. lxxxvii.

7 「反省的実践家」については、Donald A. Schon, *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action* (Basic Books, 1983); 邦訳 (抄訳), ドナルド・ショーン「専門家の知恵」佐藤学、秋田喜代美訳、ゆるみ出版、2001年、参照.

て徒弟訓練型の教育実習の時間を減らして大学レベルに相当する専門教育の充実を図るとともに、他方で附属小学校を教員養成のためのモデル・スクールから教育の実験的研究をおこなう実験室に変えようとしたわけである。それは、教職を経験や勘がものをいう職人芸（craftsmanship）の世界から、教育心理学や教育社会学をはじめとする教育諸科学の成果に裏打ちされた専門職（profession）へと引き上げることを意図するものであった⁸。

実際、デューイは教育学部の組織改革を進めることにおいて、教育学部をジュニア・カレッジ相当の2年制の教員養成機関から、シニア・カレッジ相当の4年制の教員養成機関へと切り替え、教員志望学生の学業達成水準を学士号（bachelor）のレベルにまで高め、さらにはEd.D.（教育学博士号）という教育専門職博士号の新設までも提案するなど、高度な教育専門職養成に向けた改革を矢継ぎ早に打ち出した。そうした中で、デューイは教育学部の二つの小学校、すなわち教員養成のためのモデル・スクールとしての附属小学校と教育理論の実験的研究をおこなうための実験学校とを一つに統合して、ここに実験室の方法による初等教員養成という新たな試みに挑戦する実習校をつくり出そうとしたわけである。こうしたデューイの附属小学校構想に対して、ハーパー学長も上記のように支持を表明していたのである。

ところが、デューイの教員養成改革の理念とそれにもとづいた附属小学校および実験学校の統合の構想は、旧シカゴ学院系の教育学部教員団には十分に理解されていなかったようであり、デューイの改革構想はむしろ彼らが故パーカーとともに長年にわたって築き上げてきた初等教員養成の実践とそのモデル・スクールをないがしろにする不当な措置と受けとめられたのである。

ブレイン夫人とデューイの会見：1903年4月17日

デューイと教育学部教員団との対立が抜き差しならなくなった1903年4月に、旧シカゴ学院理事会を代表してブレイン夫人が調停に乗り出した。ブレイン夫人は1903年4月17日にデューイおよび教育学部教員のライス、ベイパー両女史とあいついで会見し、双方の言い分を聴取している。というのも、両小学校の統合計画をデューイは主幹のジャックマンにまったく相談することなく、最初にライス女史に話し、それに次いでベイパー女史に話したからである。ベイパー女史はデューイの指名を受けて1902年8月から附属小学校の暫定校長をしていた⁹。ちなみに、ライス女史は教育学部の歴史・文学教育助教授であり、ベイパー女史は地理・地質学教育助教授であり、ともにブレイン夫人からシカゴ学院時代以来ずっと相談役として厚い信任を得ていて、それでデューイもしばしば

8 デューイの教職論については、拙稿「デューイにおける教育実践と教職の専門性」『日本デューイ学会紀要』第36号、1995年、pp. 134-139, 参照.

9 William Rainey Harper, July 5, 1902. この文書でハーパー学長は「デューイの進言によりベイパー女史を次年度の附属小学校長にする」と書いている。また、デューイはジャックマンに「次年度の附属小学校長にベイパー女史が任命されることについて、彼女と話し合った。彼女はこの任命が一時的なものであることを十分承知しており、それに満足している。この任命が永続的なものになることを彼女は望まないだろう」と書き送っている。John Dewey to Wilbur S. Jackman, July 22, 1902.

彼女たちを相談役として重用していた¹⁰。そのことが、内気で内向的なデューイの性格ともあいまって、結果としてジャックマンをはじめとする教育学部教員団との意思疎通を欠くこととなり、相互不信を招くことになるのである。



ブレイン夫人

4月17日におこなったデューイとの会見について、ブレイン夫人は次のように報告している¹¹。

(1) 教育実習の改革

まず初めに、ブレイン夫人はデューイから教育実習の改革についての所信を聞き出している。おそらく、教育実習の改革は教育学部の教員養成課程全般の改革と連動しており、同時に附属小学校の位置づけの変更とも関わる問題で、教育学部教員団にとってはゆるがせにできない問題だっと思われる。

ブレイン夫人は、デューイから教育実習の改革方針について説明を受ける中で、「デューイ氏は全科にわたる教育実習 (Practice Work in general) に反対で、それをなくそうとしており、学年単位の全科実習 (general Grade Work) をやめて、実習を教育学部の各科長 (Departmental Heads) の責任のもとに分散させる体制をとろうとしている」という印象を受けたと報告している¹²。そのうえで、デューイから次のような説明を受けたと報告している。すなわち、実習生 (practice teacher) は全教科を担当するのではなく、3教科ないし4教科に集中することで、教育実習の効果をあげることができる。これにより、実習生の負担は軽減され、彼らの過密な履修時間割が解消されるだろう。現在の教育実習の体制は学部と実習校との間で中途半端になっているので、実習を学部の各科

10 McCaul, op. cit., p. 182.

11 Anita McCormick Blain to whom it may concern, 17 April, 1903, "Report of Mrs. Blain's Talk with Mr. John Dewey," Wisconsin State Historical Society, McCormick Collections, p. 12. この報告は12頁におよぶ速記録で残されている。

12 Ibid., p. 1.

長の責任のもとに置き、実習校の担任教師 (Grade Teacher) を実習指導 (supervision) から解放して、実習指導は各科の教員 (Departmental Teacher) がおこなうようにし、実習校の担任教師は実習指導の補助をおこなうこととする¹³。

デューイはブレイン夫人から教育学部教員団の中に反対意見があることを聞かされて、「だが、この方針は教員団の投票で承認されたものです。それは望むところではなかったというのなら、彼らは賛成票を入れるべきではなかった」と答えた。そして、「今度の冬学期 [1904年1月開始] に実施してみれば、現在の体制を変えてよかったということになるでしょう。もしうまくいかなければ、また変えればいい」と付け加えた¹⁴。教育学部教員団の反対意見を考慮するよう再考を求めるブレイン夫人の意見に対して、デューイは教育実習の改革を既定方針通り実施すると突っばねているわけである。デューイは、これは教員会議の投票で決めた方針だと言っているが、おそらく教員団側にしてみれば、長い間パーカーというカリスマ的指導者につき従ってきた彼らには投票で決めるというやり方自体に戸惑いがあったであろうし、彼らのヘッドであるデューイの提案に正面切って反対票を投じるということには躊躇があったのであろう。

しかし、こうした教育実習の改革方針は、デューイがハーバー学長の協力のもとに進めようとした教育学部全体の組織改革の一部をなすものであった。それは、教育学部をパーカー存命中のような師範学校そのままの2年制の初等教員養成機関から、大学 (ユニバーシティ) の専門学部 (プロフェッショナル・スクール) にふさわしい4年制の初等・中等教員養成機関へと改革していくものである。

ハーバー学長は、先に紹介した大学創立10周年にあたっての学長報告の中で、「当初の教育学部の教育は限定的なもので、おそらくは元来師範学校でおこなわれていたようなものに従っているけれども、大学という新しい環境のもとでは必然的にもっと高度で広範囲な教育が要請される」と述べている¹⁵。そして、大学における教員養成のあり方について触れ、これからの教員養成においては教育学部と大学の各専門学科 (Departments of the University) との連携を強化し、教育学部の学生が可能な限り多くの機会に大学の専門学科で履修できるよう教育学部のカリキュラムを改変することを訴えている。そこには、大学の教員養成は師範学校でおこなわれているような通常の教員養成ではなく、教育現場の各分野のスペシャリストの養成、つまり教育専門職養成をめざすべきであり、そのようなグレードの高い教員を養成するためには、いかに教えるかという方法・技術 (method) に重点を置くよりも、教師自身の実践的知力 (actual knowledge) の教育に重点を置くべきだという「大学における教員養成」についてのハーバーの考えが投影されていた。そして彼は、シカゴ大学教育学部が各地の師範学校と提携関係を結び、師範学校の卒業生を教育学部に編入学させる仕組

13 Ibid., p. 2.

14 Ibid., p. 3.

15 William Rainey Harper, "The President's Report," *The President Report, July 1892 - July 1902*, The University of Chicago, 1903, p. lxxxiv.

みを構築することを訴えている¹⁶。

こうしたハーバー学長の考えはデューイの考えでもあった。デューイが教育実習を師範学校でおこなわれているような範例教示による徒弟訓練型の実習ではなく、実験室の方法にもとづいた「反省的实践家」の養成をめざすものに改めようとしたのも、要は、研究大学（ユニバーシティ）の中の専門学部（プロフェッショナル・スクール）としての教育学部は、師範学校のようなハイスクール卒業者を対象にした初歩的な教員養成ではなく、4年制大学で学士号を取得する学生を対象にした「大学における教員養成」をおこなうべきであり、通常の教員の養成ではなく、校長や教育長をはじめとする教育現場の指導的な教員の養成、つまり教育専門職養成を中心にすべきだと考えたからである。

しかし、クック郡師範学校時代以来、長年初等教員養成に取り組んできた教育学部教員団にはそのようなことは容易に理解されなかったし、むしろ受け入れがたいものとさえ感じられたようである。

教育実習の改革については、デューイが教育学部長に就任した直後、主幹のジャックマンが現行のやり方の利点と問題点を整理して改善策をデューイに示していた。ジャックマンの改善策は、あくまでも現行の初等教員養成の枠組みの中での改善策であったが、これに対してデューイは大筋で同意している¹⁷。そして、新たに作成された1902-1903年度の教育学部のカリキュラムを見ると、学生たちは1年次でA、B、Cの3グループに分かれて実習校に配属され、クォーターごとにローテーションで低学年、中学年、高学年を担当しながら、学部でも全教科について専門科目を履修するようになっている。つまり、全科主義の教育実習を中心に据えた初等教員養成をおこなうことになっている。

しかし、それから約10ヵ月後、デューイは上述したような教育実習の抜本的な改革を提案したのである。その内容は全教科について満遍なく実習をおこなうことをやめて、3ないし4教科に集中して実習をおこない、一つ一つの授業の準備にじっくり時間をかけ、教材研究をしっかりとこなえるようにして、実習の効果を高めるというものである。そして、実習指導の主体を附属小学校の担任教員（Grade Teacher）から学部（教員養成部 Professional Department）の教科教育専門教員（Departmental Teacher）に移し、附属小学校の担任教員は実習指導の補助を務めることにする。こうした措置は、基本的には、これまでのモデル・スクール（附属小学校）での実習を中心にすえた徒弟訓練型の教員養成を、学部における専門教育を中心にすえた教員養成へと切り替え、教育実習はそうした専門教育の一環としての授業研究という形に位置づけなおすことを意味していた。だが、これまで教育実習の指導にあたって中心的な役割を果たしてきた附属小学校の教員たちにしてみれば、自分たちがこのように脇役に位置づけられることにはおそらく相当強い抵抗があったであろうし、パーカーの指導のもとで初等教育の革新を進めてきたモデル・スクールの教師としての彼

16 Ibid., pp. lxxxvi-lxxxvii, 参照.

17 本稿 p. 参照.

らのプライドも相当傷つけられることになったであろう。

(2) 二つの小学校の統合問題

先に見たように、当初デューイは二つの小学校の統合については消極的な態度を取っていたが、4月初めになって態度を変え、統合を提案することになった。そのことをブレイン夫人は報告の中で次のように書いている。「デューイ氏が言うには、二つの小学校を一つの建物に収容することについて、今春私たちと話し合ったけれども、それは賢明でないと考えるに至り、学長と理事会に両校は実態上でも建物でも別個のままにしておくべきだと進言した。これが彼の結論だったけれども、いくつかの事情で彼の考えは変わった。¹⁸」

デューイの突如ともいえる態度変更の事情を、ブレイン夫人は次のように記している。デューイが教育学部長となり、附属小学校の指導も彼の管轄になった結果、実験学校と附属小学校のいっただちが彼の学校なのか、また両校の違いはどこにあるのかという多くの問い合わせに苦慮するようになったこと、そして両方の学校に時間と注意を公平に向けることは不可能で、それが早晩トラブルの原因になると理解したことである¹⁹。実際、デューイは学部長になってからも附属小学校にはほとんど顔を出さず、附属小学校に関心を示さなかったため、そのことが教員団の間で大きな不満になっていた²⁰。そこで、この際、学長や理事会の要請を受け入れて、実験学校を附属小学校と一緒にブレイン・ホールに収容して附属小学校と統合し、それを自らの監督下におけば問題は解決するとデューイは考えたのである。附属小学校の教員をはじめ、教育学部の教員団は、両校が統合されればデューイが附属小学校の指導に積極的に関わってくれるようになるだろうと期待して、両校の統合をいったんは歓迎した。ところが、デューイの統合案は、統合にあたって附属小学校の一部教員を解雇することと、統合後の附属小学校長に実験学校の校長を務めていたデューイ夫人を充てるという内容を含んでいて、これでは栄えあるパーカー・スクールとしての附属小学校の独自性は失われてしまい、実質的には実験学校主体の統合になるという懸念から、附属小学校の教員たちはデューイの提案に猛烈に反発するのである。

18 Anita McCormick Blain to whom it may concern, 17 April, 1903, "Report of Mrs. Blain's Talk with Mr. John Dewey," p. 4.

19 Ibid., p. 4.

20 1903年4月17日付のブレイン夫人とライス、ベイパー両女史との会見の記録によれば、ベイパー女史はデューイと直接会見した折、デューイが附属小学校に関わりをもととしないことに教員の間で批判が出ていることをデューイに伝えている。その際、彼女がせめて朝礼（Morning Exercises）くらいには来てほしいという声があると言うと、デューイは、自分は大学の強制チャペル礼拝（obligatory chapel exercises）をなくすことに手を貸しているため、いまさら後へは引けないと答え、これにはベイパー女史もデューイが附属小学校をそのようなものとし理解していなかったことにショックを受けている。Anita McCormick Blain to To whom it may concern, 17 April, 1903, "Report of Conversation between Miss Rice, Miss Baber, and Mrs. Blain," in the McCormick Collection, Wisconsin State Historical Society, p. 2.

(3) 教員解雇の提案

ブレイン夫人の報告によれば、デューイが両小学校の統合を決意する直接のきっかけとなったのは、附属小学校の教師のスティルウェル女史 (Miss Stillwell) とアッシュルマン女史 (Miss Ashleman) の二人が配置転換をデューイに求めたことであった。前者のスティルウェルは附属小学校のラテン語教師であり、第8学年などの高学年の担任教師を務めていたが、ラテン語教師として附属ハイスクールで年長の生徒を教えることを希望していた。後者のアッシュルマンも附属小学校のフランス語教師であったが、やはりもっと年長の生徒にフランス語を教えたいとデューイに申し出ていた。たまたまこの二人の申し出と同時期に、デューイは実験学校の教師のうち仕事ぶりに満足できない2、3人の教師の解雇を決定した。そして、同様に仕事ぶりに満足できない附属小学校の二人の教師、ミッチェル女史 (Clara I. Mitchell) とヴァン・ホーゼン女史 (Gertlud Van Hoesen) もこの際同時に解雇することにした²¹。

ブレイン夫人の報告によれば、デューイは両小学校の統合を決意する以前からミッチェルにはできるだけ早い時期に辞職を勧告するつもりだったらしい。ミッチェルといえば、パーカーの推薦を受けて1896年1月にデューイの実験学校の最初の教師となった人物である。しかし、彼女は実験学校には1年余ほどしかおらず、その後ペンシルベニア応用技術専門学校 (Pennsylvania School of Applied Arts) で教鞭をとった後、1901年からパーカーのもとでシカゴ大学附属小学校の教員となった。その彼女についてのデューイの評価は手厳しい。ブレイン夫人の報告によれば、デューイは彼女のことを「幼い子どもには良い教師とはいえない」と感じていた。デューイのこの評価は、教育学部の各科長 (Heads of the School of Education) の間で彼女の仕事ぶりについて周知となっていた事実にもとづいていた。すなわち、彼女はドラマ仕立てで堅実さがなく、子どもたちの興味を引き立てはするが持続的な努力を喚起しないなど。これ自体はブレイン夫人も耳にしていたことらしいが、とにかくデューイは断固として彼女を解雇するとブレイン夫人に告げた²²。

ヴァン・ホーゼンは附属小学校の算数の教師であるが、彼女に対するデューイの評価についてブレイン夫人は次のように報告している。「デューイ氏が言うには、学校での彼女の教え方に今のところ異論はないけれども、時間の問題だろう。彼女は成長する教師ではない。いくつかの点で能力はあるが粗野 (crude) だ。遅かれ早かれ辞めてもらわなければならない。」²³

さらにデューイは、附属ハイスクールでラテン語を教えたいと言っていたスティルウェルについても、彼女は頭が固くて自分の流儀を子どもたちに押し付ける教師だと感じていて、そのうち辞めてもらうことになるかとブレイン夫人に述べた²⁴。

この他、附属小学校の手工科の教員のバトラー女史 (Annette Butler) と教員養成部の芸術・粘土模型・絵画担当教員 (Associate in Art, Clay Modeling, Painting) のホリスター女史

21 Ibid., pp. 4-5.

22 Ibid., pp. 5-6.

23 Ibid., p. 6.

24 Ibid., p. 6.

(Antoinette B. Hollister) の解雇も予定されていた。バトラー女史については、彼女の代わりに男性教員を得ることが望ましいとライス女史も同意していたらしい。ホリスター女史については、デューイは解雇の必要を感じていなかったが、有力な戦力とも考えていなかった²⁵。

以上、合計5人の教員をデューイは両小学校の統合に合わせて解雇することを予定していた。1902-1903年度の附属小学校の担任教員 (Grade Teacher) は9人で、そのうちの4人が解雇の対象になっていたわけである。デューイは教員解雇の提案をライス女史とベイパー女史の二人に話し、二人がそれに同意したので、解雇はすんなりと実行できるだろうと思っていた²⁶。彼はライス女史とベイパー女史の二人を教育学部教員団の影響力ある代表者と見なし、二人の好意的返答を教員団全体の意向と受けとめていたが、実際はそうではなかったことは、後にブレイン夫人とライス、ベイパー両女史との会見で明らかとなる。

(4) 教員給与の引き下げ

上記の教員解雇の提案とともに、附属小学校の教員給与を引き下げるとのデューイの提案も、教育学部教員団の強い不信をかかった。もともと旧シカゴ学院の教員給与は一般の公立学校や師範学校の教員給与に比べてかなり高額であった²⁷。シカゴ大学への編入後も、彼らの給与は高額のまま維持されたが、デューイは教育学部の財政状況改善のため、附属小学校の教員給与を一律1,000ドルに減額するという提案をした。これは、統合相手の実験学校の教員給与に比べればまだ高額であったが、この附属小学校教員給与減額の提案に対してはライス、ベイパー両女史が強く反対したので、デューイはただちに提案を撤回した。ブレイン夫人によれば、デューイはこの提案が附属小学校の教師たちに一種の脅しと受けとめられたことを心外に思うと述べた²⁸。しかし、教師たちからそのように受けとめられる状況をつくり出したのは、デューイ自身であったことは後に見るとおりである。

(5) 校長問題

附属小学校の校長職は1902年8月にデューイの指名を受けてベイパー女史が暫定的な形で務めていた。デューイは1902年7月22日付のジャックマン宛の手紙で「次年度 [1902-1903年度] の附属小学校長にベイパー女史が任命されることについて、彼女と話し合った。彼女はこの任命が一時的なものであることを十分承知しており、それに満足している。この任命が永続的なものになることを彼女は望まないだろう」と書いている²⁹。そして、1902年7月26日付のジャックマン宛の手紙で「主幹 (Dean) の職務を侵害することがないように校長の職務をはっきりさせることが重要だと

25 Ibid., pp. 6-7.

26 Ibid., p. 7.

27

28 Anita McCormick Blain to whom it may concern, 17 April, 1903, "Report of Mrs. Blain's Talk with Mr. John Dewey," p. 8.

29 John Dewey to Wilbur S. Jackman, July 22, 1902.

いうことで彼女と意見が一致した」と書いている³⁰。それまでは附属小学校に校長職はなく、おそらくは教育学部主幹のジャックマンが実質的に校長に代わる仕事をしていたのであろう。

1903年4月17日におこなわれたデューイとの会見についてのブレイン夫人の報告によれば、デューイは「ペイパー女史は校長職が一時的なものであることを理解していたはずだと思っていたけれども、校長問題では彼女を困惑させたかもしれない」とブレイン夫人に述べた³¹。ここでいう校長問題とは、附属小学校と実験学校の統合後の新校長に実験学校長をしている妻のアリスを任命するとデューイが提案したことに対して、ペイパー女史をはじめ附属小学校の教員たちがこぞって反対している問題である。会見でデューイはブレイン夫人に「ペイパー女史を校長にしたとき、一部に強い反対があった。だから、附属校長と学部の科長とどちらを選ぶかとなったら、彼女は当然、学部の科長の方を選ぶだろうと思っていた」と述べた³²。どうやらデューイは当初、校長問題はペイパー女史個人の問題であり、彼女が校長職に固執していることによるものだと理解していたようである。だが、ブレイン夫人がこの校長問題で事前にペイパー女史とライス女史に相談したのかと尋ねると、彼は相談しなかったと答えた³³。さらに彼は、そういえばということで、ライス女史は最初に聞いたときほどこの問題で肯定的ではなかったとヤング夫人が言っていたことを思い出したと述べた。つまり、デューイは校長問題についてヤング夫人を介してライス女史の意見を聞き、彼女は最初は肯定的な態度を示していたが、やがてはつきりと反対に転じたということである。そして、ヤング夫人が彼女の真意をハーバー学長やデューイに伝えてもよいか尋ねると、彼女はそうしないでほしいとヤング夫人に言ったらしい。デューイが校長職をペイパー女史からデューイ夫人に代えることを直接ペイパー女史には言わず、ヤング夫人を介してライス女史に相談したことが、当のペイパー女史には相当なショックだったわけで、そのことを会見でブレイン夫人から指摘されて、先に引用したデューイ自身の「校長問題では彼女を困惑させたかもしれない」という反省の言葉を引き出したのである。

(6) とるべき方策

ブレイン夫人の報告によれば、会見でデューイは、教育学部の運営に限界を感じていると表明し、附属小学校の教員を一掃するつもりはないし、少なくともライス女史とペイパー女史の同意なしには改革を進めるつもりはないと何度も述べた³⁴。ブレイン夫人の報告によれば、会見の最後にデューイはとるべき方策として次の3つが考えられると述べた³⁵。

30 John Dewey to Wilbur S. Jackman, July 26, 1902.

31 Anita McCormick Blain to To whom it may concern, 17 April, 1903, "Report of Mrs. Blain's Talk with Mr. John Dewey," p. 10.

32 Ibid., p. 10.

33 Ibid., p. 10.

34 Ibid., pp. 8-9.

35 Ibid., p. 11.

①計画どおりに両小学校を統合する。

②統合を見送り、実験学校を別個に維持するための財政基盤と存立理由を確立する。

③デューイ自身が教育学部長を辞任する。

デューイは、実験学校と附属小学校とどちらをとるかと聞かれれば、当然、実験学校をとると答えた。そうなった場合でも、教育学部はこの1年彼が学部長を務めたことによって害を受けたとは思わないと述べた。そして、やり残した課題はいくつかあるが、辞めても後悔はしないと述べた³⁶。

実際には、上の3つの方策のうち①の計画どおりに両小学校を統合することが、デューイと教育学部教員団との妥協によって進められることになるが、結局は1年後に③のデューイの辞職という最悪の結末をむかえることになる。

上述のブレイン夫人とデューイの会見で、デューイはブレイン夫人にライス、ペイパー両女史と早急に会ってくれるよう依頼した。そして、ブレイン夫人は教育学部理事会（旧シカゴ学院理事会）をできるだけ早い時期に召集すると約束した³⁷。

ブレイン夫人とライス、ペイパー両女史との会見：1903年4月17日

ブレイン夫人は、デューイと会見したその同じ日にライス、ペイパー両女史と会見をおこなった。ブレイン夫人の報告によれば、デューイは二つの小学校の統合計画をライス女史とペイパー女史に2週間以上前に話した。ということは、4月初めである。その直前まで、彼は二つの小学校の統合に消極的だったことは、上で見たブレイン夫人とデューイとの会見の報告に記されているとおりである³⁸。

ブレイン夫人との会見で、デューイは統合計画を最初にライス、ペイパー両女史に話した理由について次のように説明していた。本来は教育学部理事会の議長であるブレイン夫人に最初に話すべきであったが、アポイントがとれなかったので、大学理事会の折に学長に話をすることになり、その日に学長から一部の大学理事も話を聞くことになった。そして、その後、ライス、ペイパー両女史に統合の具体的な話をした。デューイは統合問題を教育学部の全体教員会議 (the whole faculty meeting) で取り上げることはしなかったけれども、彼は両女史を教育学部教員団の影響のある代表者と思っていたので、彼女たちの好意的な反応をそのまま教育学部教員団の態度と見なしてしまったようである³⁹。教育学部の組織改革につながる重要な問題であるにもかかわらず、ブレイン夫人や教育学部教員団に自ら直接話をすることなく、ライス、ペイパー両女史に自分の考えを伝えるだけというデューイのやり方は粗略であり、教育学部教員団から不信や反感をかうことになったのも当然であると言わざるをえないだろう。

ライス女史とペイパー女史は、ブレイン夫人との会見で、デューイから両小学校の統合について

36 Ibid., pp. 11-12.

37 Ibid., p. 12.

38 Anita McCormick Blain to To whom it may concern, 17 April, 1903, "Report of Mrs. Blain's Talk with Mr. John Dewey," in the McCormick Collections, Wisconsin Historical Institute, p. 4.

39 Ibid., pp. 3-4.

話を聞いたとき、それを「きわめて望ましい」と考えたのは事実だと述べている。しかし、彼女たちがそのとき統合に好意的な態度を示したのは、実は、デューイが「この冬学期全体、事実上一度も附属小学校に来なかった」という事情があり、両小学校が統合されることになれば、そういうことはなくなるだろうと期待したからであった。つまり、自分たち旧シカゴ学院の小学校の指導をデューイは実験学校と同じくらい熱心に取り組んでくれるようになるだろうと期待したからであった⁴⁰。

両女史は、教育学部の深刻な状況についてかねてからブレイン夫人に相談したいと思っていたが、デューイが問題を取り上げるまでは勝手に相談できないと感じていたし、実際彼はそうしないように求めていると述べた⁴¹。そのうえで、ブレイン夫人にこの間の事情について以下のように述べた。

(1) 2つの小学校の統合にあたっての3つの条件

両小学校の統合についてデューイが最初に話をした相手はベイパー女史であった。そのとき彼は両小学校の現在の関係に不満を述べ、教育学部は彼の実験学校を侵食しているとまで言った。そして、そうしたことが生じた大きな原因は、彼が実験学校を明確に定義づけなかったことにあると述べた。そこで、ベイパー女史が二つの小学校の違いはどこにあるのか問うと、「実験学校は子どもにとっての理想的条件を創り出すための学校であり、附属小学校は教師のために計画された学校だ」とデューイが言うので、彼女は驚くとともにいくらか憤慨して、「子どもの理想的条件をまったく考えないで、学校をもつばら教師のためだけに計画するというようなことができると考えていらっしゃるのですか」と問い返した。これにはさすがのデューイも答えられなかったらしい。代わりに彼は、両校の合併が可能かどうか尋ね、彼女は「とても望ましい」と答えた⁴²。このベイパー女史の話が本当だとすれば、「教育学部は実験学校を侵食している」という思いから、それまでデューイは附属小学校と実験学校の統合に慎重だったけれども、1903年4月初めになって態度を変え、統合を彼の方から積極的に働きかけることになったということになる。おそらく、デューイには実験学校が附属小学校に吸収されてしまうような形での統合を避ける見通しができて、それで彼の方から統合計画をもち出すことになったのであろう。その見通しができる直接の契機となったのは、上述のブレイン夫人の報告にあったスティルウェル女史とアッシュルマン女史の二人による配置転換要求であったと思われる。つまり、二人の配置転換に合わせて附属小学校の古参教員を解雇することで、実験学校が附属小学校に吸収されてしまうような形での統合を避けられると考えたのであろう。

これに続いてライス女史が4月初めにデューイに面会したとき、その場にベイパー女史も呼ばれ、次年度に向け両小学校の統合を計画していることを告げられた。二人は「彼 [デューイ] が附属小

40 Anita McCormick Blain to To whom it may concern, 17 April, 1903, "Report of Conversation between Miss Rice, Miss Baber, and Mrs. Blain," in the McCormick Collection, Wisconsin State Historical Society, p. 2. この報告は15頁におよぶ速記録で残されている。

41 Ibid., p. 1.

42 Ibid., pp. 2-3.

学校にもっと積極的に関わってくれるなら、どんな犠牲もいとわない」と統合に賛成した。そして、二人がデューイに合併のための条件を尋ねると、「ミッチェル女史の辞職が第1だ」とデューイは述べた⁴³。

先述のように、ミッチェル女史はデューイの実験学校の最初の教師となった人だが、彼はよほど彼女のことが気に入らなかつたらしい。ライス、ベイパー両女史は、デューイのミッチェルに対する批判を部分的に認めながらも、彼女は歴史の教師として附属小学校には不可欠だと主張した。さらにデューイは、スティルウェル女史とバン・ホーゼン女史についても解雇の意向を示した。ライス、ベイパー両女史は、ミッチェル女史の場合と同様、この二人の教師もいくつか欠点はあるが、彼女らはこれまで教育学部と附属小学校の教育に多大な貢献をしてきたことを強調した。しかし、学部長のデューイがこれらの教師を解雇するというのなら、何が何でもそれに反対する立場にはないと考え、デューイの前で面と向かって強く反対の意志を示すことはしなかつたらしい⁴⁴。デューイはそのことをもって彼女らが解雇に同意したものと受けとめたことは、先のブレイン夫人とデューイとの会見の報告にあったとおりである。

デューイが両小学校の統合の第2の条件としてあげたのは、実験学校の生徒の父母たちに、教育実習が彼らの子どもたちの教育の妨げにならないことを保障することであった。2年前、シカゴ学院がシカゴ大学教育学部として大学に編入されることになり、実験学校が附属小学校（つまり旧シカゴ学院の実習校）と統合されることが提案されたとき、実験学校の父母たちが統合に強く反対した理由の一つは、まさに彼らの子どもたちが教育実習のための練習台にされるのではないかという不安であった⁴⁵。そうした不安の解消を図ることをデューイは附属小学校側に要求したのである。これに対してライス、ベイパー両女史は、そうした保障はただちに可能だとそのときは感じたらしい。もちろん、それはあくまで彼女ら二人の判断であった。

デューイが両小学校の統合の第3の条件としてあげたのは、教育学部の教員養成課程のカリキュラムの中で附属小学校での教育実習の割合を減らし、学部での専門科目の履修 (departmental work) を増やすことであった。多分それは、先のデューイとブレイン夫人との会見でデューイが教育実習改革としてブレイン夫人に説明した内容と同じであっただろう。ライス、ベイパー両女史は、この実習改革の話はデューイから聞いたとき、賛成できると感じたらしい。もちろん、これもあくまで彼女ら二人の判断であった⁴⁶。

43 Ibid., p. 3.

44 Ibid., pp. 3, 4.

45 Ida B. DePender, *The History of Laboratory Schools, the University of Chicago, 1896-1965* (Chicago: Quadrangle Books, 1967) p. 44. 拙稿「シカゴ大学時代のジョン・デューイの所管について(4)——シカゴ学院の併合からデューイの教育学部長就任まで：1901年～1902年——」鹿児島大学教育学部研究紀要—教育科学編—第54巻, 2003年3月, 157-158頁参照。

46 Anita McCormick Blain to To whom it may concern, 17 April, 1903, "Report of Conversation between Miss Rice, Miss Baber, and Mrs. Blain," p. 4.

(2) 教員給与の引き下げ

デューイが教育学部の財政逼迫を理由に教員給与の引き下げについて話したとき、ライス女史はそれに反対した。彼女は、給与引き下げの対象が附属小学校の教員だけであることをデューイから確認し、その上で再度強くこの措置に反対した⁴⁷。

(3) 校長問題

ライス、ベイパー両女史がデューイから二つの小学校の統合について話された内容は以上のとおりであったらしい。つまり、統合そのものの提案、教育実習の改革、一部教員の解雇、それに教員給与の引き下げである。デューイは統合に関係したもう一つの重要な、おそらく最も重要な問題を彼女らには直接話をしなかった。その問題とは、統合後の附属小学校の校長にデューイ夫人を充てることである。

ブレイン夫人がライス、ベイパー両女史から話を聞いた印象では、彼女らは2つの小学校の統合についてのデューイの提案に一般論としては同意できたが、各論部分ではただちに同意できない内容があった。しかし、彼女らはデューイの提案にその場で反対したり疑問を呈したりする十分な準備がなかったため、教員給与の引き下げについてだけはライス女史がはっきりと反対の意思表示をしたけれども、それ以外の教育実習の改革と一部教員の解雇については態度をはっきりさせることができず、その結果、デューイは彼女らの同意を得たつもりで一方的に統合の話を進めることになったのであろう。そのうえ、デューイは「彼女らが最終的に最も危険と感じた条件」、つまり統合後の校長にデューイ夫人を充てるという条件にまったく触れていなかったことが事態をいっそう困難なものにしたと、ブレイン夫人は報告の中で述べている⁴⁸。

統合後の校長にデューイ夫人を充てるという話をライス、ベイパー両女史が知ったのは、彼女らがデューイから話を聞いた翌日、ヤング夫人 (Ella Flag Young、教育学部の教育学准教授) からであった。ヤング夫人は、前日デューイが彼女らにすべてを説明していないことを知り、彼女らが両小学校の統合をすんなり受け入れられないのも無理はないと感じた⁴⁹。ヤング夫人との会見でライス女史は、ベイパー女史が昨年シカゴ学院理事会の要請を受けて附属小学校の校長になったこと、デューイ夫人は有能で校長にふさわしい人だと思うけれども、校長の交代は理事会の承認なしにはおこなえないだろうということをヤング夫人に述べた。ベイパー女史は、自分が当事者であるため、この問題について意見を言う立場にはないと考え、なにも意見を言わなかった⁵⁰。しかし、彼女たちが校長の交代に否定的であることは、ライス女史の遠まわしな言い方から明らかであった。

実は、附属小学校と実験学校の統合について相談するためにデューイがハーバー学長のところに出向いたとき、ヤング夫人も同行していた。彼女はそのときのことをライス、ベイパー両女史にこ

47 Ibid., pp. 4-5.

48 Ibid., p. 5.

49 Ibid., p. 5.

50 Ibid., p. 6.

う話したそうだ。話がデューイ夫人を統合後の附属小学校長に充てることに及んだとき、デューイはヤング夫人に「このことについて附属小学校側はどう思うだろうか」と尋ねたそうだ。それにどう返事をしたかヤング夫人は直接には言わず、その代わりにライス、ベイパー両女史に「それ [ヤング夫人の返答] がデューイ氏にとってとても屈辱的なものだったことはおわかりになるでしょう」とだけ述べたそうだ⁵¹。察するに、デューイは妻が附属小学校の教師たちからよく思われていないことをヤング夫人から知らされて、かなりショックを受けたようである。



E.F.ヤング

(4) 教員給与の引き下げと教員の解雇

ヤング夫人はライス、ベイパー両女史との会見で、附属小学校の教員給与の引き下げについて話した。ライス、ベイパー両女史は、これは附属小学校の教員たちに辞めろということを意味していると理解してよいかどうか尋ねた。ヤング夫人はそうだと答えた。彼女の正確な言い方はこうだった。「彼ら [たぶん、デューイとデューイ夫人のことであろう] はそうは言わないだろうけれども、私ならそうするだろうということです。それが私の性格です。私はそういう意味だと考えます。」⁵²

ライス、ベイパー両女史は、附属小学校の教師たちが辞職したとして、彼らよりも有能な代替りの教師がすぐに見つかると思えないと述べた。ヤング夫人も、彼らに代わる教師が見つかるとは思わないと言った。そして、彼女はデューイ夫人が実験学校の校長として、教師たちをあまりにも簡単に解雇していることを批判し、デューイ夫人は有能な教師を獲得することがどんなに難しいことかまったくわかっていないと述べた⁵³。これは、長年シカゴ市で学区教育長を務めてきたヤング夫人

51 Ibid., p. 14.

52 Ibid., pp. 6-7.

53 Ibid., p. 7.

の率直な意見であったろう。

ヤング夫人はここで専門教科をもたない教員についての批判を述べたが、その際、彼女はデューイ夫人の言葉をしばしば引用した。批判の多くはデューイがスティルウェル女史とミッチェル女史とバン・ホーゼン女史について問題視していたことと同じであった⁵⁴。これは、ライス、ベイパー両女史がヤング夫人との会見についてブレイン夫人に語ったことであるが、デューイ夫人に対するヤング夫人の先の批判と合わせて推測するに、どうやらスティルウェル女史、ミッチェル女史、バン・ホーゼン女史など附属小学校の一部教員に対する否定的評価と彼女らの解雇は、デューイが新しい附属小学校長に予定していたデューイ夫人の考えであったらしいことがわかる。

ヤング夫人は、スティルウェル女史、ミッチェル女史、バン・ホーゼン女史の3人が有能な教師であることを認めた。しかし、彼女は、デューイがこの冬学期（1～3月）に一度も附属小学校に来なかったことをワイガント女史（Wygant）が批判したことについて問題にした。ライス女史は、この批判がデューイにとっては忘れがたいものだったろうと述べた。そこでヤング夫人は「いったい附属小学校の教師たちは、デューイ氏が、自分の思い通りに事が進まないのに、一年間黙ってオフィスに座り事務仕事に専念するとでも思っていたのだろうか」と声を荒げた。ライス女史とベイパー女史はこれに驚き、上記の3人の教員の問題がこれほどまでに深刻な事態を引き起こしていたとは知らなかったと述べた⁵⁵。要するにここでは、デューイがこの冬学期になって附属小学校にまったく来なくなったことをワイガント女史が批判したことが問題なのではなく、問題はデューイの教育学部改革構想に附属小学校の教師たちがまったく理解を示さず、むしろ改革の妨げにすらなっていたこと、それでデューイが附属小学校から距離をおいていたということを、ライス女史とベイパー女史はここで初めて認識したわけである。

ライス女史はブレイン夫人の前でこれまでのいきさつをふり返り、次のように説明した。デューイが学部長を引き受けたとき、教育学部教員団は彼が従来どおり彼らのやり方を保全し、改変（change）ではなく成長（grow）をめざしてくれるものと受けとめていた。しかし、デューイは自分の構想にしたがって教育学部を全面改革しようとし、教員団は彼の提案を理解することができなかった。附属小学校の個々の教員の入れ替えは認められても、ヤング夫人が言うように附属小学校教員の総入れ替えとなれば、パーカーとともに築き上げてきた附属小学校の実践そのものが葬り去られることになると教育学部教員団は受けとめた⁵⁶。

ヤング夫人との会見の翌日、デューイはライス女史に面会を求め、附属小学校教員の給与引き下げを撤回すると言った⁵⁷。これは、前々日にデューイとの面会でライス女史が附属小学校教員の給与引き下げに強く反対したことを考慮しての判断であった。この日の会見でライス女史がデューイに、

54 Ibid., p. 7.

55 Ibid., pp. 7-8.

56 Ibid., p. 8.

57 Ibid., p. 8.

きない、しかし附属小学校教員の全面入れ替えはしないと述べた。そして、附属小学校の教育に今でも共感をもっており、そうでなければ辞任していると述べた⁵⁸。

さらに同日かその翌日に、ヤング夫人がライス女史に会い、「すべてはかたづいた」と満足を表明した。つまり、附属小学校教員の給与引き下げは撤回され、教員の全面入れ替えもしないとデューイが約束したのだから、これで両小学校の統合問題は解決されたと言ったのである。しかし、ライス女史はそうは思わないと述べた⁵⁹。

他方、ベイパー女史も、同日か翌日にデューイに会い、俸給引き下げのことで附属小学校の教員たちが感情を害していると伝えた。また、もう一つの要因が附属小学校教員の間に不安を引き起こしかねないと懸念を表明した。その際、彼女は「もう一つの要因」というのが附属小学校長にデューイ夫人を充てる問題であるとはっきり言葉で伝えず、それとなくほのめかすにとどめた。ベイパー女史にしてみれば、自分がいま校長をしているわけなので、デューイ夫人が校長になることに教員たちが不安を感じているとデューイに面と向かって言えなかったのは当然であろう。そして、ベイパー女史は、もし教育学部教員団が組織改革の障害になっているのであれば、全員辞職も一つの解決策だと言った。事実上の最後通告である。これに対して、デューイは、両小学校の統合案が教育学部教員団への批判として受けとめられては困ると述べた⁶⁰。

ベイパー女史はこの場でデューイに、現状について4点ほどの指摘をした。①今の状況では今年度中に統合案に共感を得ることは不可能だ。②学部の各料の長も附属小学校教員の給与引き下げと入れ替えには反対だ。③強行すれば彼らは全員辞職するだろう。④あるいは、デューイが辞職することになるだろう⁶¹。

さらにライス女史も再度デューイに面会し、デューイは実験学校や大学中等学校に対するほどには附属小学校に責任を果たしていないと教員団は感じていると伝えた。そして、附属小学校教員の給与引き下げは附属小学校教員の全員更迭を意味しているというヤング夫人の言葉をデューイに伝えた。デューイはそれを完全に否定した。その後、ヤング夫人も自分の言ったことを事実上撤回した⁶²。附属小学校教員の給与引き下げ案は、附属小学校教員の全員更迭を意図したのではなく、それはヤング夫人の思い込みであり、純粋に財政上の理由からの提案だったということである。

ライス女史はデューイ夫人を附属小学校長にする問題についてもデューイに問いただそうとしたが、面と向かってなかなか言い出せず、とにかく何と言ったか自分でも思い出せないくらい遠まわしな言い方でこの問題に触れたらしい。しかし、彼女はブレイン夫人には、デューイ夫人を校長にすることは間違っており、そんなことをすれば教育学部全体が混乱に陥るとはっきり述べた。彼女は、純粋に知的に判断すれば、デューイ夫人が校長になることで附属小学校は改善され、興味深い

58 Ibid., pp. 8-9.

59 Ibid., p. 9.

60 Ibid., pp. 9-10.

61 Ibid., p. 10.

62 Ibid., p. 11.

実践をおこなうことができるようになるだろうが、それでは附属小学校は自分たちの学校ではなくなるだろうと述べた。つまり、パーカーの実践を踏襲する学校ではなくなり、デューイとデューイ夫人の学校になるだろうと。ブレイン夫人は、もしデューイ夫人が一人の教師も更迭しないと誓約書にサインすれば、デューイ夫人が校長になることに同意するかとライス女史に尋ねたが、彼女はこれを否定した⁶³。

以上のやり取りから、どうやら問題の核心はこのあたりにあったことがわかる。つまり、デューイ夫人が校長になることで、附属小学校が事実上デューイ夫妻の学校になってしまうのではないかという教育学部教員団の危惧が、両小学校の統合の最大の障害になっていたのである。デューイの側からすれば、教育学部を2年制の師範学校同然の組織から、名実ともにシカゴ大学の一翼を担う専門学部（プロフェッショナル・スクール）へと改組するうえで、附属小学校をクック郡師範学校以来のパーカーの実践を試みる初等教員養成のモデル・スクールから、パーカーという個人のカリスマ性に依拠しない、教育理論の科学的・実験的な研究をとおして教育専門職を養成するためのラボラトリー・スクールに変えることは避けて通れない課題だったのである。そして、そのために、こうした方針にそぐわない教員の更迭、つまりパーカーの実践に執着する教員の更迭と、デューイ夫人を附属小学校長に充てることとがどうしても必要だとデューイは判断していたのである。だが、教育学部教員団にしてみれば、両小学校が統合されることで、デューイが附属小学校に積極的に関わってくれるようになることを期待しながらも、しかしそれはあくまでもデューイが附属小学校のこれまでのやり方を尊重し、自分たちのリーダーとして指導にあたってくれての話であって、附属小学校が事実上デューイ夫妻の実験学校になってしまうようでは元も子もないことになってしまう。こうして問題の焦点は、教育学部の組織改革からデューイ夫人の処遇へと移っていったのである。

(5) デューイ夫人問題

ブレイン夫人はライス、ベイパー両女史との会見の最後に、もしデューイ夫人の問題さえなければ両小学校の統合に関するデューイの提案は受け入れられると思うかと尋ねた。彼女たちは、そう思うと答えた。しかし、彼女たちは、附属小学校側がデューイ夫人を拒否する理由をデューイに話していなかった。そこで、ブレイン夫人は、デューイ夫人を校長にしてもよいと思うくらい附属小学校側はデューイを必要としているのかどうか尋ねた。これに対して、ライス、ベイパー両女史は「もしデューイ夫人が校長になれば遅かれ早かれすべての教師が更迭されることになるだろうから、附属小学校はデューイ夫妻の学校になってしまうだろう」と述べた。そして、そうなった場合、新しい教師たちにこれまでのやり方を教え訓練すること、つまりパーカーの実践を受け継ぐことはできなくなるだろうし、現在の教師の中で附属小学校に残り、新しい方針に協力する教師がいるかどうか疑問だと述べた⁶⁴。間接的ながら、デューイ夫人を校長にすれば、附属小学校側は全員辞職をも

63 Ibid., pp. 11-12.

64 Ibid., pp. 13-14.

ってこれに応えるだろうと彼女らはブレイン夫人に述べたのである。

ブレイン夫人とライス、ベイパー両女史は事態に対処するために、以下の4つの方策について話し合った。

- ①デューイ夫人を校長にすることを含めて、デューイの提案に従う。
- ②デューイ夫人を校長にすることについて、もう少しデューイと話し合う。つまり、デューイ夫人を校長にすることを取り下げるようデューイと話し合いを続ける。
- ③辞職してでも統合案に反対する。
- ④ハーバー学長とともに統合案を再検討する。

ライス女史は最後の④案を支持した。そして、もしデューイ夫人が校長になれば、デューイにとって将来的に仕事を進めるうえで不幸なことになり、取り返しのつかない破局をたらすことになると思うと述べた⁶⁵。

(6) 教育実習改革

ブレイン夫人はライス、ベイパー両女史との会見で、デューイの教育実習改革案について彼女たちの意見を聞いた。二人は多少困惑した様子を見せ、ライス女史が「それなら私たちが今やっていることです」と言った⁶⁶。ここで「私たち」とは、ライス、ベイパー両女史のように学部で教科教育を担当している“Departmental Teachers”のことを指している。教育実習において実習指導を中心的に担うのは附属小学校の“Grade Teachers”ではなくて学部の“Departmental Teachers”にすべきだというデューイの提案は、既にやっていることだと二人はブレイン夫人に答えたのである。しかし、デューイの教育実習改革の趣旨は、教育実習を旧来の範例教示による徒弟訓練の場から「実験室の方法」にもとづく教育実践研究の場に変えることにあったから、ただ単に“Departmental Teachers”が教育実習でいままで以上に積極的な役割を果たすようにすればそれで済むという問題ではなかった。おそらく彼女らにはそうしたデューイの教育実習改革の趣旨はほとんど理解されていなかったのであろう。

ブレイン夫人による調停の継続

1903年4月17日におこなわれたブレイン夫人とデューイとの会見、およびブレイン夫人とライス、ベイパー両女史との会見により、4月当初からの両小学校の統合をめぐる事態のいきさつについて、デューイとライス、ベイパー両女史の双方の言い分がかなり詳細に明らかにされた。デューイはライス、ベイパー両女史に統合案を話し、彼女らが統合に好意的な反応を示したと理解して、統合計画を進めようとした。デューイの示した統合計画の中には、附属小学校教員の給与引き下げと、附属小学校の一部教員の解雇、それに統合後の附属小学校長にデューイ夫人を充てることが含まれて

65 Ibid., p. 14.

66 Ibid., p. 15.

いた。これらの条件のうち、給与引き下げについてはライス、ベイパー両女史の反対意見をいれて撤回された。教員の解雇について両女史は消極意見を述べたけれども、明確に反対はしなかった。そして、統合後の附属小学校長にデューイ夫人を充てることについては、デューイは直接彼女たちに話をしなかった。代わりにヤング夫人がそのことを彼女らに話したが、そのとき彼女たちはそれに明確に反対したわけではなかった。しかし、その後、彼女たちは統合後の附属小学校長にデューイ夫人を充てるのであれば、両小学校の統合には賛成できないと言いはじめたのである。

おそらくライス、ベイパー両女史にしてみれば、デューイから両小学校の統合計画について相談を受けたとき、彼女たちはそれに明確な態度を示すだけの余裕はなかったに違いない。両小学校が統合されれば、デューイが附属小学校の指導に積極的に関わってくれるようになるだろうという期待があって、彼女らは総論としては統合に賛成したのだった。デューイはそれをもって自分の統合計画が彼女らに受け入れられたものと受けとめたのである。しかし、教員給与引き下げや教員の解雇、統合後の附属小学校長にデューイ夫人を充てる問題など、各論部分では彼女らに異存があったのである。そのうちの教員給与引き下げについては彼女たちははっきりと反対意見を述べ、デューイは教員給与引き下げを撤回した。しかし、教員の解雇、統合後の附属小学校長にデューイ夫人を充てる問題などについては、彼女らはデューイに対してはっきりした態度を示さなかった。というよりも、彼女らは教育学部の一教員という立場にあり、学部長のデューイの提案に正面から反対することには立場上躊躇があったのである。特にベイパー女史は附属小学校の暫定校長をしていたために、なお一層異論を述べることに躊躇が強かったに違いない。

結果として、ライス女史とベイパー女史は表と裏を使い分けたとデューイに受けとめられることになり、両女史とデューイの間の信頼関係も損なわれることになった。デューイにしてみれば、統合計画は彼女らを通じて附属小学校側に伝えられ、彼女らから教員給与引き下げ以外に特に強い反対意見が出なかったので、統合計画は附属小学校側の了解のもとに進められるものと思っていた。しかし、特に統合後の附属小学校長にデューイ夫人を充てる問題を中心に、附属小学校側が統合に強く反対しており、強行すれば全員辞職も辞さない態度であることを知るにおよんで、デューイは統合計画そのものが頓挫したことを思い知るのである。統合計画を白紙撤回すれば学部長としての彼の立場はなくなるであろうし、このまま計画を強行すれば、附属小学校の教員組織が崩壊し、ひいては教育学部の運営そのものが行き詰まることになる。いずれの場合にしても、デューイは教育学部長を辞することになるであろう。

こうした事態を受けて、ブレイン夫人による事態打開のための調停作業が精力的に続けられた。具体的には、1903年4月26日に彼女はハーパー学長と話し合い、翌4月27日にはデューイとライス女史のそれぞれと個別に会見し、さらに翌4月28日には旧シカゴ学院の理事会を開いて対応を協議している。そして、デューイおよびハーパー学長と連絡を取りながら、5月3日にベイパー女史と会見をして妥協策を協議し、ハーパー学長の了解も取りつけて、その妥協策にもとづき5月5日の旧シカゴ学院理事会で最終的に両小学校の統合に向けた具体的な対応策を決定している。

以下、ブレイン夫人による調停作業の経緯を見てみることにする。

(1) 校長問題

1903年4月27日午前、ブレイン夫人はデューイと会見した。この場で、ブレイン夫人は、旧シカゴ学院理事会の立場として、学長が裁定を下すまでは教育学部教員団が両小学校の統合計画に反対であることをデューイに伝えるわけにはいかなかったけれども、4月26日のハーパー学長との会見で学長からデューイにそのことを知らせよう求められたので、ブレイン夫人はデューイに教育学部教員団が統合計画に反対していることを伝えた⁶⁷。ただし、教育学部教員団が全員辞職も辞さないでいることは、学長の意見をいれて、デューイには伏せられた⁶⁸。デューイはここではじめて、デューイ夫人が附属小学校長になることに教育学部教員団が反対していることを知った。これには彼は非常に落胆した様子だったとブレイン夫人はハーパー学長に報告している。そして、もしデューイが事前にこのことを知ったならば、彼はデューイ夫人を校長にする案を学長に提出することはなかっただろうし、デューイの内心では、これによって両小学校の統合計画そのものが不可能になったと受けとめたようだったとブレイン夫人はハーパー学長に報告している⁶⁹。

さらにブレイン夫人の報告によれば、デューイはライス、ベイパー両女史までもが統合計画に反対していることを知って驚愕し、デューイ夫人を校長にすることについて彼女らが自分にはっきりと反対の態度を表明してくれなかったのは不当 (injustice) であると訴えた。そして、両小学校の統合計画を教育学部の各科長 (heads) によって了承されたものとして学長と大学理事会に提案した自分は、結果的にきわめて不誠実な立場に立たされることになったとデューイは受けとめた⁷⁰。

こうしたデューイの反応に対して、ブレイン夫人はライス、ベイパー両女史の立場を擁護して、デューイに次のような事実を説明した。統合後の附属小学校の校長にデューイ夫人を充てることについて、彼女らは事前に何の相談も受けなかったこと、そして彼女らはその件について知った後も、彼女らとしては反対意見を表明することに躊躇があったこと、特にベイパー女史の場合は自分が校長職にいて意見表明がさらに難しかったこと⁷¹。

これに対してデューイは、躊躇があったということでは誤解を与えたことの釈明にならないし、ヤング夫人から校長任命の件について話しがあったとき彼女らは異議を唱えなかったと述べた。そして、ブレイン夫人の報告によれば、「デューイ氏は、この異議は必然的に計画遂行をやめさせるた

67 Anita McCormick Blaine to To whom it may concern, "Report of a Conversation between Mr. Dewey and Mrs. Blaine, Monday, April 27, 1903," Nettie Fowler McCormick Papers 1904, Box 34, Wisconsin State Historical Society, p. 1.

68 Anita McCormick Blaine to William Rainey Harper, April 30, 1903, President's Paper, 1889-1925, 8/23, ICU, p. 1.

69 Ibid., pp. 1-2.

70 Anita McCormick Blaine to To whom it may concern, "Report of a Conversation between Mr. Dewey and Mrs. Blaine, Monday, April 27, 1903," p. 1

71 Ibid., pp. 1-2.

めのものだと受けとめているように見えた。彼は、計画を早々と示さなければよかったと後悔していた。」⁷² つまり、デューイとしては、統合後の附属小学校長にデューイ夫人を任命することへの異議は、両小学校の統合そのものへの抵抗であると受けとめたのであり、だから校長任命の件は最後の最後まで明かさなければよかったと後悔したのである。彼がライス、ベイパー両女史に両小学校の統合計画を話したとき、校長任命の件を話さなかった理由もおそらくはそういうことだったのであろう。

ブレイン夫人はデューイに、統合計画を多少とも変更するつもりはないかと尋ねたが、彼は変更の可能性を示さなかった。つまり、デューイ夫人を校長に指名することに変更はないということである。ブレイン夫人の報告によれば、「彼は、実験学校のこれまでの仕事を理解できる校長が得られないならば、実験学校を附属小学校に併合することはできないと感じていた。」そして、デューイの言い方によれば「それ以外なら、彼は自分で詳細を決めて一からやり始めるだろう」とブレイン夫人は報告している⁷³。

実験学校に対するデューイの思い入れがいかに強いものであったかがうかがわれる。彼は、パーカーから引き継いだ附属小学校の徹底的な改革をめざしていたのである。それは、彼自身が考える新しい教員養成と教育学部構想を実現するために、どうしても避けて通れない課題だったのである。附属小学校の教員たちには、それは附属小学校を事実上デューイ夫妻の学校にしてしまうことだと映ったし、一面でそれはその通りであったろう。しかし、もう一面で、デューイは教育学部の組織改革を通して、師範学校ではなく総合大学における教員養成の実験的な創出を試みようとしていたのであり、そのためにはパーカーの実践を引き継ぐ附属小学校ではなく、デューイ自身の構想に完全に従う附属小学校でなければならなかったのであり、そのためには「実験学校のこれまでの仕事を理解できる校長」がどうしても必要だったのである。この点でデューイに妥協の余地はなかった。なぜなら、両小学校の統合計画は、単に2つの小学校を合併させるという問題だけにとどまらず、実験学校の開設以来デューイがずっと抱き続けてきた総合大学における教育学研究と教員養成の結合に向けた教育学部の組織改革構想の中の最も重要な要素であったからである。もしデューイ夫人を校長にすることがかなわなければ、彼は統合計画を白紙に戻し、「自分で詳細を決めて一からやり始めるだろう」というブレイン夫人の報告は、両小学校の統合計画に寄せるデューイの並々ならぬ決意の固さを物語っている。

(2) 校長問題に対するブレイン夫人の態度

ブレイン夫人が4月27日午後デューイと会見する前、ライス女史はブレイン夫人に電話で会見を申し入れ、会見の席上でブレイン夫人に「もしデューイ夫人が校長になるとしたら、両小学校の統合に反対しますか」と尋ねた。これに対して、ブレイン夫人は「もしデューイ夫人を校長に指名

72 Ibid., p. 2.

73 Ibid., p. 2.

することが教育学部教員団に受け入れられないのであれば、そしてデューイ夫人を校長に指名することが両小学校の合併に不可欠な条件だということであれば、合併は適当でないといわざるをえないと思う」と答えた⁷⁴。非常に慎重な言い回しながら、事実上、デューイの統合案に反対の意思表示をしたわけである。

これを受けて、ライス女史はデューイに、ブレイン夫人が両小学校の統合に断固反対していると伝えたい。そのことを4月27日の夜にデューイから電話で問いただされたブレイン夫人は、それは自分の本意ではなく、むしろ今の状況のもとでは「両小学校の統合はきわめて望ましいことだと思っている」とデューイに答えた。その上で、ブレイン夫人は「もし統合計画が校長職の指名と一体のものであり、それが教育学部教員団にとって完全に受け入れがたいものである場合、統合は正しい方策とはならないだろうし、それ以上議論されることにはならないだろうと思う」と自分の考えを伝えた⁷⁵。

さらにブレイン夫人は翌日(4月28日)のシカゴ学院理事会の席上で、ライス女史に、ブレイン夫人が両小学校の統合に反対していると彼女がデューイに告げたことについて問いただした。そして、彼女との間で相互に誤解があったことを4月28日付の手紙でデューイに次のように説明した。ライス女史はデューイに「私 [ブレイン夫人] が完全に合併に反対している」と言っただけだが、「私は逆に、合併はきわめて望ましいと思っていた。ただし、教員団が受け入れることのできない校長の指名を伴うような統合計画は適当ではないだろうと思う⁷⁶。」つまり、両小学校の統合自体には積極的に賛成するが、デューイ夫人の校長指名だけはなんとか回避してもらえないかというのが、この問題に対するブレイン夫人の態度だったのである。

(3) デューイの権限について

4月27日夜のブレイン夫人への電話で、デューイは教育学部長としての彼の権限にライス女史が全面的な疑問を投げかけたこととブレイン夫人に述べた。ブレイン夫人は、どうしてデューイの権限が問題視されるのかわからないとデューイに答えた。デューイは、教育学部長としての彼の権限についてシカゴ学院理事会がどのように理解しているのかを文書で示してほしいとブレイン夫人に要求した⁷⁷。

ブレイン夫人は4月28日にシカゴ学院理事会を開催し、校長問題およびデューイの権限について協議した。理事会にはライス女史も出席し、前日(4月27日)の彼女とデューイおよびヤング夫人との会見について彼女から説明を聞いた。それによれば、ライス女史はデューイ夫人を校長に指名

74 Anita McCormick Blaine to John Dewey, April 28, 1903, President's Papers, 1889-1925, 30/25, ICU.

75 Anita McCormick Blaine to To whom it may concern, April 27, 1903, "Report of A Telephone Message from Mr. Dewey, Monday April 27, in the Afternoon," Nettie Fowler McCormick Papers 1904, Box 34, Wisconsin State Historical Society, p. 1.

76 Anita McCormick Blaine to John Dewey, April 28, 1903.

77 Anita McCormick Blaine to To whom it may concern, April 27, 1903, "Report of A Telephone Message from Mr. Dewey, Monday April 27," pp. 1-2.

する問題について、デューイとヤング夫人に自分の反対意見を率直に述べたらしい。しかし、そうした反対意見をこれまでデューイにはっきりと表明してこなかったことについて、ライス女史は理事会で次のように釈明した。デューイが両小学校の統合計画を彼女とペイパー女史に最初に話したとき、学長とシカゴ学院理事会に諮る前に計画を実行に移すことはないと言ったので、最終的に統合計画が決定される前に自分たちの意見を表明する機会が与えられるものと思っていたが、ついにその機会はなかった。また、この理事会以前にもデューイとの何回かの会見で、デューイ夫人が校長になることには賛成できないと表明してきた⁷⁸。しかし、実際には彼女らがデューイ夫人を校長にすることに反対であることはデューイ本人には伝わっていなかったわけであり、ライス女史のこの釈明にはいまひとつ釈然としないところがある。

他方、ライス女史は、自分がデューイの「オーソリティ」に対して疑問を呈したことについては、それは法的な意味での彼のオーソリティ（権限）について言ったものではなく、彼の道徳的オーソリティ（権威）について言ったものだという釈明をおこなった。これも釈明としてはあまり説得的でない⁷⁹。

ブレイン夫人は1903年4月28日付のデューイ宛の手紙で、デューイの権限についてのシカゴ学院理事会の見解を書き送った。これは前日のデューイの求めに応じたもので、見解自体は他の理事者たちの承認のもとに作成された。それによれば、シカゴ学院理事会は純粋に諮問機関であって、なんらの権限ももたない。つまり、理事会は教育学部の運営について意見は言うけれども、決定権は学部長であるデューイにあるということである。そして、デューイの権限が大学当局のコントロールにどの程度従属するものであるかについても、理事会は関知しない。つまり、シカゴ学院理事会としては、デューイが大学当局の方針に従って教育学部の組織改革を進めることについて、それはデューイの権限であって、理事会としては意見は言うけれども、最終的な決定権はデューイにあると言っているわけである⁸⁰。

ブレイン夫人は、デューイの権限についてシカゴ学院理事会としての公式見解を以上のように表明しながら、しかし「教育学部の運営が権限に依存するものと貴殿に思われているとしたら、私たちとしては非常に残念です」と付け加えている。そして、教育学部に対するデューイの道義的責任 (moral responsibility) について述べ、「教育学部は明確な目的のもとに貴殿に信託されているのであり、その信託が裏切られるような事態が生じることは最大限避けていただきたいと私たちは願うばかりです」と書いている⁸¹。つまり、学部長としてのデューイの権限は確かに組織運営上の権限として認めるけれども、しかし、なんでもかんでも権限として押し通すのではなく、できるかぎり教育学部教員団の立場や意向を汲みいれ、あるいはブレイン夫人をはじめとするシカゴ学院理事会の

78 Chicago Institute to To whom it may concern, April 28, 1903, "Minutes of A Meeting of the Trustees of the Chicago Institute, at Kinsley's Restaurant, Tuesday, April 28th, [1903] at 1 P.M.," pp. 1-2.

79

80 Anita McCormick Blaine to John Dewey, April 28, 1903, Blaine Papers, Wisconsin State Historical Society.

81 Ibid.

意見に耳を傾けるなど、融和的で妥協的な学部運営をおこなうよう、ブレイン夫人はデューイに要望しているのである。これは、先のライス女史によるデューイの道徳的権威に対する訴えを受けた要望であったと見てよいだろう。

デューイは1903年4月30日付でブレイン夫人に手紙を書き、自分があたかも教育学部長の権限を一方的に振りかざして事を進めようとしているかのように受けとめられていることに反論している。手紙の中で彼は、両小学校の統合計画を学長に提出する前に、ライス、ペイパー両女史の意見を聞くために「私 [デューイ] の知力と誠意のあらんかぎり努力した」という事実を無視してほしくないと述べている。そして、今のような混乱が生じたのは、まさに「私 [デューイ] が彼女らから得た情報にもとづいて事を進めたためだ」と述べ、この間のいきさつを次のように説明している。ライス、ペイパー両女史は、デューイとヤング夫人の前で両小学校の統合に好意的な態度を取り、彼女らも是認した具体的方針にもとづいて事を進めることを、彼女らはデューイに促した。また、ライス女史は、統合後の附属小学校長の問題で、ヤング夫人とデューイの相談役 (adviser) となることを引き受けた。つまり、デューイ夫人を校長に任命することは、デューイが一方的に決めたことではなく、ライス女史も相談にあずかっていたということである。しかるに、ライス女史は、この校長問題について「複雑な感情のせいで私たち [デューイとヤング夫人] に自由に意見を言えなかったと今になって言っている。」デューイはこう述べた後、ライス女史を次のように弾劾している。「彼女は、表向きの意見と彼女の本当の立場の隠蔽とによって、私たち [デューイとヤング夫人] を欺むいておきながら、今度は貴女 [ブレイン夫人] に隠してきた論点を取り上げて、今問題になっている校長問題について彼女が積極的におこなってきた好意的発言をあからさまに無視ないし否定ないし論点のすり替えをおこなっています。これは、彼女が私たちに促してきた行動を取り消すために、貴女に『介入』を促すためです。私は当然の自尊心を守るために、あえて私のこれまでの行動が誠実なものであったことを明らかにしたいと思います。……少なくとも彼女は、私が権限を恣意的に行使したとか、あるいは道義を無視したとかいう印象を人々に与えようとしていることは確かです。」⁸²

デューイは、教育学部長の権限を楯に一方的に事を進めようとしたというライス女史の訴えに、よほど自尊心を傷つけられたのであろう。感情的にもかなり激しい調子でライス女史を非難している。そして、彼女とペイパー女史には両小学校の統合計画について最初から話をし、デューイ夫人を校長にすることも含めて、彼女らから事前に意見を聞き、彼女らの意向を踏まえて誠実に事を進めてきたと主張している。おそらく、これに対してはライス女史とペイパー女史からいろいろと反論が出てくるであろう。デューイは、彼女らが彼とヤング夫人の前で「複雑な感情」のために自由に意見を言えなかったというのは理由にならないと断じた。しかし、この間のデューイ、ヤング夫人とライス、ペイパー両女史との一連のやりとりの経過を見るかぎり、デューイは彼女らが両小学

82 John Dewey to Anita McCormick Blaine, April 30, 1903, Blaine Papers, Wisconsin State Historical Society, p. 1.

校の統合計画を最初に総論として賛成したことを受けて、おそらく附属小学校側から異論が出てくるであろうと予想される各論を後から一つ一つもち出したきらいがある。もしそうだとすれば、ライス、ベイパー両女史は、最初に総論として統合計画に賛成した関係上、各論で異を唱えて統合計画の撤回を求めることは難しかったであろう。それにしても、附属小学校教員の給与引き下げは彼女らの断固とした反対で撤回されており、教員の解雇についても彼女らが同意した形跡はなく、むしろ非常に遠まわしな言い方ながら不賛成の意思表示をしていたのであり、彼女らが積極的に同意したと受け取れるのは教育実習改革に関する提案だけである。そして、最も厄介な問題である附属小学校長にデューイ夫人を充てる問題では、ベイパー女史は現校長としての立場を考慮して発言を控え（これ自体、この問題に対する彼女の「複雑な感情」を表わしているが、デューイはそれも単なる言い訳にしかならないと断ずるのであろうか?）、ライス女史はこの問題でのアドバイザーを引き受けたというが、少なくともデューイ本人の前ではデューイ夫人が校長に就くことに反対だとは言えなかったであろう。彼女は、ヤング夫人の前では校長をベイパー女史からデューイ夫人に代えることに非常に遠まわしな言い方で慎重な姿勢を示した。こうしたライス女史の微妙であいまいな態度をもって、デューイは自分に対する裏表の使い分けであり、裏切りであると受けとめた。確かに、デューイ夫人が附属小学校の教員たちから拒絶されていることをデューイにはつきり伝えず、その結果、デューイはなにも問題ないものとして事を進めることになってしまった責任の一端はライス女史に、そしてベイパー女史にもあると言えるだろう。しかし、そもそもデューイが当の附属小学校の教員たちと一度も話し合いの場をもたず、彼女ら二人を介して附属小学校側の意向は十分踏まえたとするにも無理がある。デューイと附属小学校側の双方の間に立って、ライス、ベイパー両女史は非常に苦しい立場に追い込まれたわけで、彼女らは最後にシカゴ学院理事会のブレイン夫人に助けを求めたのである。

問題解決に向けて

1903年5月3日、ブレイン夫人はベイパー女史と会見して、彼女がデューイとハーバー学長のそれぞれと話し合った結果の報告を聞いた。

まず、デューイとの話し合いについて、ベイパー女史はブレイン夫人に次のように報告した。デューイは、ベイパー女史が両小学校の統合計画について「心を偽った」と彼女を非難した。これに対して、彼女は「状況の許すかぎり率直に話したつもりだ」と答えた。そこで、デューイは彼女に、統合計画についてこれまで彼女が述べた意見内容を文書にするように求めた。ただし、附属小学校教員の給与引き下げの件については省くように求めた。ベイパー女史は求めに応じて、思い出せる範囲で論点を書き出し、文書に署名した。校長職問題について、彼女は「一度デューイと話し合ったが（彼は十分に理解してくれなかったので）あいまいになった」と書いた。デューイは文書を見

83 Anita McCormick Blaine, "Report of a Conversation Between Miss Rice and Mrs. Blaine, Sunday, May 3, 03," Blaine Papers, Wisconsin State Historical Society, p. 1.

て、彼が理解している事実と同じであると言った⁸³。ベイパー女史は、デューイ夫人のことでデューイに強く自分の意見を言わなかったことは「大きな失敗」だったと感じているとブレイン夫人に述べた。そして、そうなった理由をブレイン夫人とともにあれこれ考えた中で、デューイ夫人を校長にすることはすぐには決定されまいだろうと思っていたことを思い出した⁸⁴。つまり、デューイから最初に校長職の件について聞いたとき、「心を偽った」というのは言い過ぎだとしても、やはり態度をあいまいにしたのは確かであり、それは自分とライス女史が直接反対しなくても、他の人たちからも懸念や反対意見が出てきて、デューイも夫人を校長にすることについては多くの反対があることを知って、考え直すだろうという期待がベイパー女史とライス女史にはあったということである。しかし、それは結果的に「大きな失敗」になった。

ベイパー女史は、デューイが今回で2回、彼女のことを「陰険なやり方で彼〔デューイ〕をだました」と非難したと述べ、それについて説明を求めた。1回目は教育実習改革の件で、そのとき彼女はベイパー女史が「改革案をねじまげた」と非難した。彼女がこれについて、深く傷ついた自分の思いを述べると、デューイは謝罪した⁸⁵。

デューイはベイパー女史に、デューイ夫人を附属小学校長にすることについて彼女の気持ち(feeling)を尋ねた。ベイパー女史はデューイ夫人が附属小学校と教員団のことをいろいろ批判していることをデューイに告げた。デューイは、それは夫人がごく親しい友人に一度だけ批判を口にしたことであり、附属小学校の教員たちは事の真相を確かめるべきだと述べた。これに対して、ベイパー女史は、そのような一度かぎりの話を確かめても本質的ではない、教員たちのデューイ夫人に対する不信感は一回やそらの出来事によって生じたものではなく、多くの出来事の積み重ねによって生じたものだと述べた。ベイパー女史は、ブレイン夫人にデューイとはうまくやっていると述べてしたが、デューイ夫人の問題でブレイン夫人にそれ以上の説明はしなかった⁸⁶。

次に、ベイパー女史はライス女史と二人でハーバー学長に会見したときのことをブレイン夫人に報告した。それによれば、デューイはハーバー学長に統合計画の撤回を申し入れたが、その後、ハーバー学長宛の手紙で「彼の威信と自尊心のために」統合を計画どおり進めたいと申し入れた。その手紙でデューイは「教育学部教員団の中の二人〔ベイパー、ライス両女史〕の反対によって統合計画が覆るようでは、教育学部の秩序と権威は維持できなくなる」と書いているとハーバー学長はベイパー、ライス両女子に述べた。そして、学長は彼女らについてデューイが書いてきた「不快な事柄」についても述べたが、ベイパー女子は正確に思い出せないと言ったとブレイン夫人に報告した。さらに、学長は彼女らがデューイ夫人についてデューイにどう言ったのか正確に述べるように求め、彼女らの話を書きとめながら、「デューイ教授に彼の妻の仕事ぶりについて話すのは難しい」と述べた⁸⁷。

84 Ibid., p. 4.

85 Ibid., p. 1.

86 Ibid., p. 2.

87 Ibid., pp. 2-3. ここで論及されているハーバー学長宛のデューイの手紙については不明である。

ハーバー学長による3つの選択肢

ハーバー学長は、ベイパー、ライス両女子との会見で次のような3つの選択肢を提示し、いずれかに同意するようにベイパー女史に求めた。

- ①デューイが統合計画を提案どおり進めることを認める。
- ②デューイが統合計画を提案どおり進めることを認めるが、デューイ夫人に代えてヤング夫人を校長にする。
- ③デューイが統合計画を提案どおり進めることを認めるが、6ヶ月または1年後にデューイ夫人は辞任し、新校長をたてる。

いずれもデューイが統合計画を提案どおり進めることを認めるものであるが、ただし附属小学校の校長職について、いずれか教育学部教員団にとって受け入れ可能なものか選択をせまるものであった。ベイパー女史は判断に窮し、ブレイン夫人に相談することになった。ブレイン夫人との協議の中でベイパー女史は、「デューイ夫人は附属小学校に来るべきではない」という点だけはっきりしていると述べた。しかし、デューイ夫人を校長にすることができずに、デューイ自身が教育学部長を辞任してしまうようなことになれば、それは教育学部にとってとても不都合なことだと彼女は感じていた。一方、ライス女史は、デューイおよびヤング夫人と話し合っただけで以降、デューイが教育学部長を辞任すれば好都合だと考えるに至っており、デューイ夫人の代わりにヤング夫人を校長にしても事態は変わらないという強硬な意見をもっている。ベイパー女史はブレイン夫人に伝えた。ベイパー女史は、長い目で見ればハーバー学長が示したような妥協策を受け入れることがベストなのかどうか、そして将来の校長は双方が同意できる人物であるべきだという対抗条件をつけるべきかどうか、あるいはもしデューイ夫人が校長に任命された場合には、附属小学校教員全員の地位が保全されるよう保障を取るべきであるかどうかなどについてブレイン夫人に論じた⁸⁸。

妥協策による問題解決：1903年5月5日

1903年5月5日、ハーバー学長はブレイン夫人に電話をかけて、事態の打開策を見出したと述べ、次のような提案を伝えた。すなわち、ライス、ベイパー両女史の最大の懸念は、デューイの提案にしたがってミッチェル、スティルウェル、バン・ホーゼンの3人の教員を解雇すれば、附属小学校の他の教師たちも抗議の辞職をすることになり、そうなれば現在の附属小学校の教員組織が崩壊してしまうと考えている点にある。彼女らにとって附属小学校教員団の崩壊は、クック郡師範学校時代以来のパーカーの理論にもとづく教育実践と教員養成そのものが拠点を失ってしまうことを意味していたからである。ハーバー学長はそう述べて、この3人の教員に大学が3年契約で現在の地位を保障し、そのほかの教員については終身雇用を与えるという提案をおこなった。ブレイン夫人によれば、ハーバー学長はこれで問題の90%は解決できるだろうし、この提案にはデューイも同意するだ

88 Ibid., p. 4.

ろうと考えていた⁸⁹。

ハーバー学長が考える残り10%の問題は、デューイ夫人の校長職問題である。この問題についてハーバー学長は、シカゴ大学には夫婦で大学に奉職することを禁止する原則があるので、デューイ夫人の校長職への任命は一時的なものにとどまると述べた。ブレイン夫人によれば、ハーバー学長はこれで問題はすべて解決すると考えた⁹⁰。

これに対してブレイン夫人は、デューイ夫人の校長職任命が一時的なものであることをはっきり言明するようハーバー学長に求めた。しかし、学長は明言を避け、デューイ夫人が校長として教員たちと学長自身とを十分満足させることができなければ、任命は遠からず終了することになると自分は理解していると述べるにとどまった。さらに、ブレイン夫人が、先のような附属小学校教員の地位の保全に関する学長の提案にデューイが本当に賛成するだろうかというハーバー学長に念を押すと、学長は大丈夫だろうと答えた⁹¹。

ハーバー学長による打開策の提案を受けて、ブレイン夫人は同日(1903年5月5日)シカゴ学院理事會を招集し、そこにライス、ベイパー両女史の出席も求めた。この理事會の議事録によれば、ライス、ベイパー両女史は、特にデューイ夫人の校長職任命が一時的なものにとどまるという学長の提案について以下のような考えを示した。

彼女らは、デューイ夫人がデューイ氏の助けを借りて附属小学校を理論的に立派な学校にしていく能力をもっていると認めながらも、それは教育学部の考え方とはまったく異なるものになるだろうし、教育学部のこれまでの努力の成果を無視するものになるだろうと思っている。この点でデューイ夫人を附属小学校に入れることは、たとえ1年でも、大きな危険であるが、しかしハーバー学長の特別な配慮なくしては(今や彼女らはそれについて多少の疑いをもってはいるが)教育学部は教育学科からうまく独立してやっていけないだろうと彼女らは感じている。彼女らは、デューイ以外に教育学部を引っ張っていける外部の人間をだれも知らない今のような状況のもとでは、統合計画を拒絶することはできないし、さりとて統合計画に賛成することもできない⁹²。

ここにはライス、ベイパー両女史、そしておそらくは教育学部教員団全体が置かれている困難な立場が示されている。一方で彼らには、もしデューイ夫人が校長になれば附属小学校はデューイ夫妻の学校となってしまう、教育学部自体もデューイとヤング夫人が直接影響力をもつ旧教育学科の体制に飲み込まれてしまうという危惧があり、他方でデューイ以外に教育学部を引っ張っていける指導者を他に知らないという事情があり、デューイの教育学部長辞任という事態はなんとしても避

89 Anita McCormick Blaine to To whom I may concern, May 5, 1903, "Report of a Telephone Conversation from President Harper, Tuesday, May 5, 03," Blaine Papers, Wisconsin State Historical Society, p. 1.

90 Ibid., p. 1.

91 Ibid., pp. 1-2.

92 "Minutes of a Meeting of the Trustees of the Chicago Institute, at Kinsley's Restaurant, Tuesday, May 5, 03 at 1 P.M." Anita McCormick Blaine Papers, Wisconsin State Historical Society, p. 2-3.

けたいという気持ちがある。

結局、ハーパー学長の「特別な配慮」なしには今後も教育学部教員団の立場を維持していくことはできないという判断により、シカゴ学院理事会としては学長の提案を受け入れることを承認した。議事録には次のように記されている。

状況のさまざまな側面が検討され、最後に、シカゴ学院理事会はハーパー学長の妥協案に同意することにした。ただしそれは、終身の地位をもたない教育学部の教員に大学から3年契約が与えられ、彼らの地位が保全されるという学長の保障を前提とし、また、大学はデューイ夫人の任命を一時的なものとして承認し、もし彼女が校長としてすべての関係者を満足させることができなければ、彼女の校長職就任は短期に終わるという学長の個人的な保障を前提とする⁹³。

この理事会の決定を、ブレイン夫人は同日付（1903年5月5日付）でハーパー学長宛に手紙で伝えた。その中でブレイン夫人は次のように書いている。

貴殿の提案に同意するにあたって、私たちは貴殿の判断と大学の思惑に反して、デューイ夫人の校長職への任命は暫定的なものだと理解する。また、私たちは、もしデューイ夫人が校長の仕事すべての関係者の満足のいくように遂行することができなければ（今の状況下ではほとんど不可能だと思われるか）彼女の校長職は短期に終わらうという貴殿の個人的な保障にもとづいて、貴殿の提案に同意する⁹⁴。

こう書いた上で、ブレイン夫人は「これまでのいきさつから、理解に行き違いが生じる恐れを禁じえない」と述べて、デューイが状況を正確に理解し、将来誤解が生じないようにするために、この際、妥協案の同意内容を明確にしておくべきだと書いている。しかし、ハーパー学長はデューイ夫人の校長職任命が一時的なものであることをはっきりさせなかった。そのためブレイン夫人の心配は的中し、1年後、デューイがシカゴ大学を去るといふ悲劇的結果を招くことになるのである。

ともかくも1903年5月5日に合意された妥協案によって、教育学部の附属小学校と旧教育学科の実験学校は統合されることになった。附属小学校の教員は一部条件付ながら、全員が現在の地位を保全された。校長にはデューイ夫人が任命されたが、その任命は一時的なものにとどまることが、少なくともハーパー学長と教育学部教員団の間では了解されていた。

ジャックマンによる告発

ブレイン夫人のシカゴ学院理事会がハーパー学長による妥協案の受入を決定する前日の1903年5

月4日付で、教育学部主幹（Dean）のジャックマンはハーパー学長宛に16頁におよぶ長文の手紙を書き送っている。それは、デューイが前年5月に教育学部長に就任して以来、デューイと教育学部教員団との間に生じた一連の軋轢について、かなり詳細に事情を説明したものである。言うまでもなく、それはクック郡師範学校時代以来パーカーの右腕として教員団のリーダー的な立場にあったジャックマンによる事情説明であり、その内容は教育学部長であるデューイを教員団の側から厳しく告発したものとなっている。しかも、どこの教員組織にも多かれ少なかれありがちで、部外者から見れば些細なこととしか思えないような行き違いについて個人的な感情を込めて書いている。おそらくは、デューイと教育学部教員団との間の決裂がなんとか回避される見通しがついたこの時点で、ジャックマンは教育学部教員団側の言い分を細大漏らさずハーパー学長に説明しておこうと考えたのであろう。それだけに、ジャックマンのこの告発状とも言える文書をとおして、教育学部長就任以来、デューイが管理職者として教育学部とその教員団に対しどのようなスタンスを取ってきたがかなり具体的にわかる。

ジャックマンによるデューイの評価を一言で言えば、学者としてのデューイには最大限の敬意を表すが、パーカーに代わる自分たちの指導者としてはデューイにまったく失望したというものである。ジャックマンによれば、デューイをパーカーの後継者として教育学部長に推したのは他ならぬ教育学部教員団であったにもかかわらず、デューイは最初から教育学部に対して「冷遇」としか表現できないような態度で臨んできた。その結果、教員団の当初の期待は失望に変わり、教育学部の「士気」（morale）にも悪影響を与えたとジャックマンは述べている。そして、デューイのいわば罪状とも言うべき一連の出来事をハーパー学長に説明している⁹⁵。



W. S. ジャックマン

93 Ibid., pp. 3-4.

94 Anita McCormick Blaine to William Rainey Harper, May 5, 1903, Blaine Papers, Wisconsin State Historical Society, pp. 1-2.

95 Wilbur S. Jackman to William Rainey Harper, May 4, 1903, President's Papers, 1889-1925, 18/20, ICU, pp. 1-2.

(1) 父母会への欠席

ジャックマンは、前年の秋に開催された附属小学校の定例の父母会 (Parents' Meeting) に学部長のデューイが無断欠席したことを、きわめて重大な問題としてハーパー学長に訴えている。ジャックマンによれば、彼は事前にデューイにプログラムを見せ、父母会の組織について説明をおこない、デューイからは特に異論はなく、学部長のデューイの名前で開催通知を出し、教員たちは入念な準備をおこなった。この定例の父母会は、パーカー存命中以来、この学校の教育方針や教育実践の成果などについて父母や学校後援者たちに幅広く理解を求め、学校・家庭・地域の連携を図るための場として重視されてきた。それだけに教員たちは、パーカーに代わり新学部長に就任したデューイが、この父母会を一方的に欠席するとはだれも想像していなかったとジャックマンは述べている。「実際、私たちは皆、父母会は彼 [デューイ] が当校に浸透させたいと望んでいる思想を私たちが把握する最も直接的なよい機会になるだろうと思っていた。」その後もジャックマンは父母会の開催についてデューイに相談をし、デューイの許可を得て父母会開催通知を出し続けたが、「いつも学部長は (公に) 説明なしに欠席だった⁹⁶。」

実は、前年の秋の父母会の開催について、ジャックマンは1902年11月7日付でデューイにプログラムと案内状のスケッチを送り、デューイの意見を求めている⁹⁷。デューイは、ジャックマンには返事を出さず、附属小学校長であるベイパー女史に1902年11月10日付で手紙を書き、先にジャックマンからデューイに送られてきた父母会のプログラムを同封して、「議題について君は同意するのかわかりたい。もし私の記憶が正しければ、君の意見は夏から少し変わったことになる」と記している⁹⁸。デューイのこの手紙によれば、父母会の問題について夏にデューイとベイパー女史の間で書簡のやりとりをし、ベイパー女史が11月開催の今年度最初の父母会で取り上げるべき議題について自分の意見をデューイに伝えていたらしい。ジャックマンから送付されたプログラムにある議題がおそらくそれとは異なっていたので、デューイは不審に思い、ベイパー女史に問いただしたのである。ベイパー女史は1902年11月10日付でデューイに返事の手紙を書き、夏に示した彼女の計画は既に一部母親会議で実行されており、そのことはデューイにも話したはずだと述べている⁹⁹。しかし、デューイはどうやら父母会のプログラムが自分の頭越しに決められ、プログラムの内容が当初の自分の考えとは異なるものになったことに不満をもち、父母会を無断欠席したようである。

デューイが父母会を無視したことで、デューイは附属小学校の父母や後援者たちと接触する機会をもたなかったばかりでなく、教員たちにデューイへの信頼感を失わせ、教育実践に取り組む彼らの士気をくじくことになったとジャックマンは訴えている。通常、父母会では授業参観がおこなわれ、講演や研究討議がおこなわれることになっていた。あるとき教員の一人がデューイに顔を見せるだけでもいいからと頼んでも、彼は「君たちのやっていることに同意できない」と言って出席を

断わった。ジャックマンが、父母会に出席して実際に自分の目で見てみれば附属小学校が取り組んでいる仕事の価値がわかるはずだと訴えても、頑としてデューイは出席を拒んだ。ジャックマンは「この“したくない”精神は挑発的だった」と述べている¹⁰⁰。

以上のようなジャックマンの説明がそのとおりだとすれば、デューイはパーカー理論にもとづく附属小学校の実践に対して教育学部長就任当初から消極的ないし否定的な態度を取っていたことになる。しかも自分の考えを附属小学校の教員や父母、後援者たちに説明する機会さえ自ら拒んでいたとすれば、ジャックマンがデューイの父母会ボイコットを学部長としてきわめて重大な背信行為だとハーパー学長に訴えたのも、その限りでは当然であると言わざるをえない。デューイが教育学部長就任当初から附属小学校の解体を考えていたのかどうかは定かではないが、少なくともジャックマンをはじめとする教育学部の少なからぬ教員たちはそう受けとめるようになったものと思われる。信頼関係はこの時から失われていたのである。

デューイは、1903年2月21日付のジャックマン宛の手紙で、ジャックマンが自分に無断で教育学部長名を使って父母会の案内状を出したことを、重大な背信行為だと激しく抗議した¹⁰¹。これに対して、ジャックマンは同日付でデューイに手紙を書き、父母会の開催はこれまでも説明してきたとおり教育学部の公式行事であり、その案内状を学部長名で出すのは当たり前のことであって、そのことはデューイ自身も承知しているものと思っていた釈明した。そして、「些細な違反に対して脅しをかけてくるようなやり方は残念です。これからも間違いは起こるでしょうが、それらは修正のきく間違いであって、罰せられるべき違反ではないでしょう」と書いている¹⁰²。ジャックマンにしてみれば、主幹としてやるべき仕事をごく普通にやっただけなのに、デューイから猛然と抗議を受け、精神的にかなり動揺したようである。彼はこの時のことをハーパー学長に「私は、これは単に気むずかしい人の言い方であり、一時的な感情によって学部の運営が妨げられてはならないと考え、私は品位ある返答に務めました。同時に、私はこうしたナンセンスな言いかかりに対して我慢にも限度があると彼 [デューイ] に注意を促しました」と書いている¹⁰³。ジャックマンとデューイとの間の感情的なもつれが相当なものになっていたことがうかがわれる。

(2) 教員会議への欠席

教育学部では教育上並びに管理上のあらゆる問題を、少なくとも週1回開かれる教員会議 (faculty meeting) で審議するファカルティ・コントロールが原則となっていた。しかし、学部長のデューイは肝心の教員会議を頻りに欠席した。ジャックマンによれば、教育学部 (教員養成部) と附属小学校で日々生じる教育実践上の諸問題について、デューイはほとんど関心を示さず、「だれも

100 Ibid., pp. 3-4.

101 John Dewey to Wilbur S. Jackman, February 21, 1903, JDP 3/9, ICarbS.

102 Wilbur S. Jackman to John Dewey, February 21, 1903, JDP 3/9, ICarbS.

103 Wilbur S. Jackman to William Rainey Harper, May 4, 1903, President's Papers, 1889-1925, 18/20, ICU, p. 3.

96 Ibid., pp. 2-3.

97 Wilbur S. Jackman to John Dewey, November 7, 1902,

98 John Dewey to Zonia Baber, November 10, 1902,

99 Zonia Baber to John Dewey, November 10, 1902,

がまさに彼 [デューイ] の得意分野だと期待したにもかかわらず、彼はなんらのイニシアチヴも取らなかった。この一年間開かれた教員会議のほとんどは、だれか一人の教員の問題提起で開かれ、学部長の専門的な意見や方針を知りたいと思っても、多くの場合、彼が欠席するのでなんらの結論も得られなかった。¹⁰⁴ ジャックマンはこのように、デューイがパーカーの後任者として、教員団から期待された役割をまったく果たさなかったことを告発している。

さらに、ジャックマンは教育学部の管理運営上の問題についても、デューイには「先入観のようなもの」があるのではないかと教員団は疑っていると述べている。「学部長は口では民主主義とファカルティ・コントロールを支持すると言っているが、教員団は彼らが自由に意見を表明するために作られた現在の諸規定では不十分だと感じている。¹⁰⁵ ジャックマンはそう述べて、ハーパー学長に次のように訴えている。教育学部の各委員会の議長は学部長の助言と同意にもとづいて学長が任命することになっているが、長年パーカーを支えてきた教員団の古参のメンバーは重要な委員会の議長からはずされたうえ、委員会が議長の方針に沿わない方針を打ち出そうとする場合には、デューイは時間を割いて委員会に出席し、委員会が当初とは違う方針を採択した場合には、自らの学部長辞任を持ち出して委員会に圧力をかけた。「この一年に何度も『私の辞任』が言われたので、この言葉が教員たちの間では一つの悪い冗談に使われるようになり、私の判断では、学部長は教員たちに対してかなり威厳を損なうことになった。¹⁰⁶ ジャックマンはそう書いている。

(3) 恣意的な学部運営

ジャックマンによれば、教育学部の教員団がデューイに最も望んでいるのは「専門的な影響力」であり「教育上の諸観念」であって、それ以上のものではない。彼らがデューイを教育学部長に選んだ理由も、彼は自分の学問研究に集中して、教員団のやることにいちいち干渉はしないだろうということだった。彼らは、ファカルティ・コントロールに信頼を置きすぎて、デューイに裏切られることになったとジャックマンは述べている。そして、教員団の中の影響力あるメンバー（多分この中にはジャックマン自身も含まれていると思われる）は、彼らがほとんど無視され、デューイが「他の進言者たち」を選んで相談していることを知ったとき、彼らは筆舌に尽くしがたいほどの大きな怒りを感じたと、ジャックマンはハーパー学長に訴えている¹⁰⁷。ここでジャックマンが言っている「他の進言者たち」とは、具体的にはベイパー女史とライス女史のことである。ジャックマンはこうも述べている。「彼は教育学部に赴任してまだ日の浅い他の教師たちとばかり相談をして、彼らの不合理的な考えに盲従しているのです、教員団全体の信頼を醸成するのに必要な確固とした自己信頼を示していない¹⁰⁸。」つまり、デューイは学部長として教員団全体に対し自ら直接リーダーシップを

104 Ibid., p.4.

105 Ibid., p. 5.

106 Ibid., p. 5.

107 Ibid., p. 9.

108 Ibid., p. 6.

とろうとせず、ジャックマンをはじめとする古参の教員を避けて、比較的話がしやすい新参の教員（ライス、ベイパー両女史のことを指していると思われる）にばかり相談をして事を進めているというのである。おそらくはデューイの内向的な性格が災いしたのであろうが、それにしてもパーカーのカリスマ的な指導力に比べたときのデューイのどことなく内向きの対応は、学部長としての信頼を教員団の間で著しく損なったようである。

ジャックマンは、教育学部が「徒党による場外政治」から自由であることが絶対に必要だと述べている。そして、教員団の全体会議で自由な議論が保障されるならば、学部長がたとえ全体投票の結果に反する決定を下したとしても、いまデューイがやっているような「親密な集団」による「専制支配」よりもまだだと述べている¹⁰⁹。ジャックマンは、デューイが教育学科のヤング夫人や実験学校のデューイ夫人、それに教育学部の比較的新参の教員であるライス女史とベイパー女史との間で「親密な集団」を作り、自分をはじめとするクック郡師範学校以来の古参教員を度外視して学部運営をおこなおうとしていることにより率直な不満を表明している。

(4) ジャックマンに対する不誠実な対応

教育学部主幹であるジャックマンは、学部長のデューイが頻繁に教員会議を欠席するので、学部の管理運営上の事務責任者として、デューイに週1回二人で昼食をとりながら会議をもつことを提案し、デューイもこれに同意した¹¹⁰。しかし、ジャックマンによれば、実態は彼がデューイにいくつか質問をする程度で、デューイの方からジャックマンに何か相談をもちかけたりすることはなく、結局「彼 [デューイ] は私 [ジャックマン] に何も説明する意志がないことを知った」と述べている¹¹¹。

(5) 夏期講座

ジャックマンは、1902-1903年度の夏期講座 (summer school) の授業開設について、しかるべき委員会に諮るようデューイに進言した。デューイは、委員会に諮る前に授業開設の意思を数名の教師に打診することを提案したが、ジャックマンによれば、デューイはジャックマンが進言する以前に既にいく人かの教員に内々にそうしていたらしい。そして、ジャックマンがハーパー学長から夏期講座の計画作成を急ぐよう督促の手紙を受け取り、デューイに授業開設の最終決定をどうしたらよいか尋ねたとき、デューイは自分と学長が理事会に出席して最終決定をおこなうと答えた。つまり、デューイはジャックマンの頭越しに、自分で個々の教員に授業開設の意思を打診し、自分で夏期講座の授業計画を作成して学長に提出したのである。ジャックマンは「こうしたことがあって

109 Ibid., pp. 12.

110 Wilbur S. Jackman to John Dewey, October 24, 1902, ; John Dewey to Wilbur S. Jackman, October 24, 1903,

111 Wilbur S. Jackman to William Rainey Harper, May 4, 1903, President's Papers, 1889-1925, 18/20, ICU, pp. 5-6.

も、私は彼 [デューイ] がはっきりとリーダーシップを示して、方針を率直に示してくれたなら、さして気にもしなかったであろう」と悔しさをにじませている¹¹²。

(6) 両小学校の合併問題

教育学科の実験学校と教育学部の附属小学校の合併については、もともとジャックマンが1902年秋からの統合をデューイに進言した経緯がある¹¹³。しかし、このときデューイは両小学校の統合には否定的な立場をとった。そして、1903年4月になって両小学校の統合をデューイの方から提案することになったのだが、ここでもデューイはジャックマンをはじめとする古参の教員たちになんら相談することなしに、ライス、ベイパー両女史に話をしたのである。しかも彼女らにさえ、統合計画の大事な部分である校長職問題は示さないまま、彼女らの同意を得ようとしたのである。「教員団の別のメンバーを代弁者に立てることで、彼 [デューイ] は教員団との協力的な関係を破壊することになったのです。」ジャックマンはハーパー学長に事態の経緯をそのように説明している。そして、「彼の専門的な立場と個人的な立場からの理由をはっきり示すことによって、統合計画を詳細に私たち教員に説明してくれたならば、深刻な反対もなくすんだでしょうし、今のようなほとんど解きたいほどのもつれも避けられたでしょう。統合計画は、出来損ないの一部分しか示されないものとなり、良かれ悪しかれトラブルを引き起こし、根深い不信感を生じさせるような状態のままになっています」と述べ、この問題によって生じた教育学部の深刻な内部対立の原因と責任はもっぱらデューイの不誠実な事の進め方にあったと、ハーパー学長に訴えている¹¹⁴。

その上で、両小学校の合併後の校長にデューイ夫人を任命することについて、校長職を「家族的な事柄」にするのは、教員団の間にいたずらに混乱を招き、教育学部の発展にとって有害だとして反対している¹¹⁵。

(7) 学生への無関心

ジャックマンは、教育学部と教育学部生に対するデューイの無関心について、学生たちの間でよく言われていないとハーパー学長に訴えている¹¹⁶。その上で、次のようなトラブルがあったことを書いている。教育学部の2人の学生が、大学の教育学科 (Department of Education) で開講されている授業と附属小学校の実習の開講時間が重複していたため、教育学科の授業の受講を辞退したいとジャックマンのところに申し出てきた。彼は受講辞退が認められるかどうか検討すると回答し、教員団のメンバー一人一人の意見を聞いて判断することにした。ところが、問題は既に受講辞退を

認めないことで学部長のデューイの承認が得られていた。そこで、ジャックマンはデューイの意に反して「反乱」を起こしていると見なされ、デューイから尋問を受けるという屈辱を受けることになった。どうやらデューイは、ジャックマンが教育学科の授業科目を軽視して、一方的に教育学部の実習の受講の方を優先させようとしたのではないかと疑ったようである。「尋問は私にはまったく予期せぬことだったので、尋問を受けながら、私が教員団のメンバーともども、ここでは言葉にできないほどの卑劣な行為をやったと非難されていることがようやくわかった。もし私がそのとき、この査問に至った事情を知っていたならば、このような侮辱に1分たりともおとなしく従ったりはしなかったでしょう。¹¹⁷」こうジャックマンは記して、自分に対するデューイの敵愾心が異常なものであったことをハーパー学長に訴えている。

(8) 教員の解雇

最後に、ジャックマンは、デューイが附属小学校の教員3名の解雇を提案していることについて反対の意思をハーパー学長に表明している。彼は、この3名の教員に対するデューイの批判は正しいし、辞めさせたいというデューイの気持ちも理解できるとしている¹¹⁸。ジャックマンはただ一方的に教員団の利益を代弁しているわけではないことがわかる。彼が解雇に反対するのは、これによってパーカーの指導のもとに築かれてきた強力な教員団が瓦解し、パーカーが推進してきた「新教育」の牙城としての教育学部が機能不全に陥ってしまうと考えたからである。そこには、まさにパーカーの右腕として、また当時、理科教育の分野で第一級の改革者として実績をあげてきたジャックマンならではの強い思いが込められていた。彼は「教育界はパーカー大佐の教員団が秋の葉のように散り散りになるのを待っている¹¹⁹」という話を紹介して、クック郡師範学校以来、外部からの批判や曲解や攻撃にさらされながらも、パーカーの強力なリーダーシップのもとで教員団が一致団結して取り組んできた「新教育」の実践と教員養成の仕事は、5年前にはブレイン夫人による100万ドルの寄付を得るほどの価値があったけれども、いまや内部のいさかいで混乱し、外部からの寄付を得るどころか、見る影もないと嘆じている¹²⁰。もちろん、そうなった最大の原因と責任はデューイがパーカーの教員団とその実践に当初からまったく「冷淡」であり、教育改革の指導者として期待されたリーダーシップを発揮するどころか、教育学部の運営に「徒党政治」をもち込み、教員団の間に相互不信を蔓延させたことにあるとジャックマンは見ている。「学部長は、彼の心からの協力と共感がなければ、当教育学部は成功しないということ、また教員たちの協力がなければやっていけないということを悟るべきです¹²¹。」ジャックマンはそう記している。

112 Ibid.,

113 Wilbur S. Jackman to John Dewey, June 10 1902,

114 Wilbur S. Jackman to William Rainey Harper, May 4, 1903, President's Papers, 1889-1925, 18/20, ICU, p. 7.

115 Ibid., pp. 12-13.

116 Ibid., p. 8.

117 Ibid., p. 9.

118 Ibid., p. 14.

119 Ibid., p. 13.

120 Ibid., p. 15.

121 Ibid., p. 13.

2. 教育学部の運営をめぐる諸問題

教育学部附属小学校と旧教育学科の実験学校との統合をめぐる展開されたデューイと教育学部教員団との対立は、ブレイン夫人の仲介により、ハーパー学長の妥協案を受け入れる形で一応の解決が図られ、決定的な破局は回避された。しかし、その後も両者の関係はけっして良好ではなかった。というよりも、両者の関係はむしろよそよそしいものになったと言った方が正確だろう。以下では、1903年5月以降に生じた教育学部の運営をめぐる諸問題をとおして、その点を見てみることにしたい。

教育学部主幹の任務縮小

教育学部主幹のジャックマンが上司に当たるデューイに対して強い不信感をもっていたことは、先に見た彼のハーパー学長宛1903年5月4日付の手紙で明らかである。デューイとジャックマンの間では、教育学部の改革方針をめぐるばかりでなく、学部運営上の事務処理に関するどちらかといえば日常的な些細な問題においても、事あるごとに対立や行き違いが生じていた。ジャックマンは、クック郡師範学校以来パーカーと行動をともにしてきた教育学部の古参教員たちのいわばリーダー的な存在であり、同時に教育学部主幹として、教育学部の運営上のあらゆる事務手続きを一手に引き受けていた。立場上、彼は学部長のデューイに対して正面から対立するような行動を起こすことはなく、表面上はデューイの指示に従う態度をとりながら、しかし教育学部主幹として、また教員団のリーダー的存在として、彼の目から見て不当な干渉と思われることについては、ファカルティ・コントロールの原則を楯に、教育学部と教員団の利益を守る立場を貫いていた。それは、教育学部教員団がパーカーとともにこれまで築きあげてきた伝統と、教育界における彼らの名声を守ろうとするジャックマンなりの使命感によるものであったろう。

しかし、両小学校の統合をめぐるピークに達したデューイと教員団との対立がハーパー学長の妥協案によって収束することになったことを境に、ジャックマンは教育学部主幹としての職務に消極的になりはじめている。彼がハーパー学長宛に書いたデューイ告発状とも言うべき先の手紙は、同時に、デューイに対する彼の決別状という意味あいもあったのかもしれない。

1903年5月15日付のデューイ宛の手紙で、ジャックマンは備品や設備の購入に関する帳簿の仕事を辞退したいと申し出ている。具体的には、大学事務局の方と二重に帳簿が作成されている点を指摘して、不必要な帳簿付けを省略したいと申し出ている。そして、「大学側が、教育学部に負担をかけることなしに、運営事務のすべてを引き受けることは、シカゴ学院を併合する際、合意されていたことです」と述べている¹²²。シカゴ学院併合後2年近くたってからのこの申し出には、これまで旧シカゴ学院（現教育学部）の自律性を何とか維持したいと努力してきたジャックマンが、デューイ主導の学部改革により、教育学部が旧シカゴ学院の教員団の手を離れて、大学の一組織に位置づけ

122 Wilbur S. Jackman to John Dewey, May 15, 1903, John Dewey Paper 3/11, ICarbS. pp. 1-2.

られていくことに苛立ちと諦めを感じはじめたことが見て取れる。

1903年6月11日付のデューイ宛の手紙で、ジャックマンは「アーネット氏に帳簿の仕事をすべて手渡した」と記している。アーネット氏 (Arnett) とは、大学の会計官である¹²³。

同じ手紙で、ジャックマンは「私のオフィスの仕事の多くは、附属小学校から分離され、帳簿の仕事からも解放されることになっている」と記している。帳簿の仕事については上で見たとおりだが、どうやらジャックマンは6月の年度終了とともに、附属小学校の事務からも「解放」されることになったようである¹²⁴。

諸委員会の設置

その一方で、ジャックマンは1903年5月28日付のデューイ宛の手紙で、従来特に規定のなかった諸委員会の設置を提案している。彼が設置を求めた委員会は以下の6つである¹²⁵。

- ①朝会及び全体集会に関する委員会
- ②教員会議に関する委員会
- ③旅行行事の委員会
- ④父母会に関する委員会
- ⑤教育プログラムに関する委員会
- ⑥校舎内の秩序と外来参観者等に関する委員会

教育学部には教員養成部、附属小学校、附属ハイスクールの全教員 (General Faculty) をメンバーとする全体委員会 (General Committee) がある。そして、教員養成部、附属小学校、附属ハイスクールのそれぞれにも、それぞれのFacultyによる全体委員会 (General Committee) があり、そのもとに各種の委員会が組織されている¹²⁶。ここでジャックマンが提案しているのは、教育学部のGeneral Facultyによる全体委員会のもとに組織される各種委員会である。

ジャックマンは、諸委員会設置の提案理由として「私たちはこれまでその場しのぎのやり方をしてきたために、さまざまな誤解を生じたり誤りを犯したりしてきた。そのため、教員たちに混乱を与え、彼らの仕事の大きな妨げとなってきた」と述べている¹²⁷。1903年10月からから教育学部はブレイン・ホールに移転して、ここに教員養成部と附属小学校、旧教育学科の実験学校、それに旧サウスサイド・アカデミーとシカゴ手工学校が一つの建物に入るようになった。規模の大きくなった学部組織を円滑に運営していくために、ジャックマンはこれらの委員会の設置を求めたのである。そして、既設の教育実習委員会と社会問題委員会と合わせて、教員養成部と初等部と中等部の各教

123 Wilbur S. Jackman to John Dewey, June 11, 1902, JDP 3/12, ICarbS (no. 01731).

124 Ibid.

125 Wilbur S. Jackman to John Dewey, May 28, 1903, JDP 3/11, ICarbs, pp. 1-3.

126 *The University Record*, The University of Chicago, Confidential Number, March 1903 (Chicago: The University of Chicago Press), p. 3.

127 Ibid., p. 3.

員団からそれぞれの委員会に均等に委員を出すことを提案し、具体的に委員のリストまで作成している¹²⁸。

こうしたジャックマンの提案に対して、デューイは同年5月30日付の手紙でほぼ同意を与えている。特に上記の③旅行行事の委員会と⑥校舎内の秩序と外来参観者等に関する委員会については「とりわけ望ましい」と書いている。ただし、④父母会に関する委員会については、父母会の運営は父母たち自身の手委ねたほうがうまくいくだろうと述べ、委員会の設置に否定的な意見を述べている¹²⁹。

ところが、同年6月3日になって、デューイはジャックマン宛の手紙で、ジャックマンが提案した先の新委員会の設置についてはまだ手を打っていないと述べている。そして、④父母会に関する委員会と⑤教育プログラムに関する委員会を除く4つの委員会は、正規の委員会とするよりも、教育学部教員会議に属する内部の委員会とした方がいいように思うと書いている。④父母会に関する委員会については、上述のようにデューイは設置そのものが必要ないと考えていたから、結局、⑤教育プログラムに関する委員会だけを正規の委員会として新たに設置するというのがデューイの結論であった。これに加えて、デューイは全科コースAに入学する学生の分類と等級付けに関する委員会と、附属中等学校に関する委員会を、学部管理上の追加の小委員会として設置したいとジャックマンに提案している¹³⁰。

デューイは、1903年6月11日付のジャックマン宛の手紙で「次年度の教育学部教員団の組織体制のもとでは、教育学部の各部門のそれぞれの任務の目的をまとめあげ、互いの間の調整をおこなう特別な人物が必要になるということを感じているだろう」と書いている¹³¹。1903年10月の新学期からブレイン・ホールに教員養成部と附属小学校と附属ハイスクールが入り、ここに旧シカゴ学院と旧シカゴ大学教育学科(実験学校を含む)、それに旧サウスサイド・アカデミーと旧シカゴ手工学校の各教員団が一つの教員団を構成することになるために、組織運営を円滑に図るための各部門の間の調整役が必要とされたわけである。ただし、この調整役にだれがなったのかは不明である。ともかくも、これによって教育学部の組織運営において、旧シカゴ学院の教員団が占める比重は相対的に弱まることとなり、教育学部はブレイン夫人の資金によって設立されたパーカーの初等教員養成学校という性格を脱して、名実ともにシカゴ大学の教育プロフェッショナル・スクールとなっていくのである。

ブレイン・ホールの入居後の1903年10月22日付の手紙で、デューイは教育学部の諸委員会の構成についてハーパー学長に次のように提案している¹³²。

128 Ibid., pp. 5-6.

129 John Dewey to Wilbur S. Jackman, May 30, 1903, JDP 3/11, ICarbS, p. 1.

130 John Dewey to Wilbur S. Jackman, June 3, 1903, JDP 3/12, ICarbS (01720).

131 John Dewey to Wilbur S. Jackman, June 11, 1903, JDP 3/12, ICarbS (01725).

132 John Dewey to William Rainey Harper, October 22, 1903, JDP 3/15, ICarbS.

1. 出版 (Publication)

*Elementary School Teacher*と*School Review*の2つのジャーナルの編集に関わるだけとなるか、教育学部の案内状やその他すべての印刷物に関わることになるのかによって委員の構成は変わってくる。前者なら、ジャックマンとロックに附属ハイスクールのクロー (Crowe) とフレミング (Fleming) を加えるだけでよい。後者ならさらに拡大して、ライスとオーウェンとヴァン・ホーゼン (Van Hoesen) を加える。

2. 図書館、体育館、博物館、実験室 (Library, Gymnasium, Museum and Laboratories)

メイヤーズ (議長：建物管理者)

リンデ (Lynde)、クロー (Kroh)、ワレン (Warren)、レイクロフト (Raycroft)

3. 特別活動 (Social Affairs)

ペイパー (議長)

教員養成部から ホリスター (Hollister)、ハーマー (Harmer)

附属ハイスクールから ロバートソン (Robertson)、アトウッド (Atwood)

附属小学校から リード (Reed)、ギレット (Gilet)

4. 観察・実習 (Observation and Practice)

ヤング (議長)

教員養成部から ライス、メイヤーズ

附属ハイスクールから オーウェン、ルン (Lunn)

附属小学校から トムゼン (Thomsen)

ここにあげられている諸委員会はいずれも、1903年2月の段階で設置が認められている委員会である¹³³。先のジャックマンの提案にあった諸委員会は、1903年2月の段階でこれら4つの委員会以外に教育学部の全体委員会のもとに随時設置してよいとされていたものであるが、それらについてはすべて設置を見送ったようである。

ハーパー学長と協議した後、翌10月23日付でデューイは委員会の構成を確認する手紙をハーパー学長に送っている¹³⁴。出版委員会は、2つのジャーナルを編集するジャックマンとロックにライスとMiss Devfattとペイン (Payne) を加えることになった。おそらくジャーナル以外の印刷物も扱うことになったのであろう。図書館、体育館、博物館、実験室委員会にはベルフィールドが議長として加わり、それ以外は変更なし。特別活動委員会は、附属ハイスクールからロバートソンではなくアングス (Angus) が入ることになった以外変更なし。観察・実習委員会は、教員養成部からライスではなくフレミングが入り、附属ハイスクールからルンではなくベルフィールドが入ることになり、附属小学校からはトムゼンに加えてデューイ夫人が入ることになった。そして、学部長のデュ

133 *The University Record*, The University of Chicago, Confidential Number, March 1903 (Chicago: The University of Chicago Press), p. 3.

134 John Dewey to William Rainey Harper, October 22, 1903, JDP 3/15, ICarbS.

ーイと主管のジャックマンは職権上、すべての委員会のメンバーになると記されている。

なお、教員養成部の全体委員会には、中等教員養成課程に関連して、大学の各専門学科から中等教員養成課程の各専科に対応する代表者が1名ずつ加わるようになっていて¹³⁵、その人選をデューイは1903年10月30日付でハーパー学長に報告している¹³⁶。また、1903年11月20日付でデューイはハーパー学長に「身体文化と運動競技」(Physical Culture and Athletics)の常設委員会を教育学部の全体委員会に追加設置することを求め¹³⁷、了承されている¹³⁸。

*The Elementary School Teacher*の編集者問題

デューイは、1903年6月22日付のハーパー学長からの手紙で、ヤング夫人が教育学部の機関雑誌である*The Elementary School Teacher*の編集者の仕事を辞めると言っていることを知らされた¹³⁹。

もともとこの雑誌は、*Course of Study*という名称でシカゴ学院が発行していた月刊誌であったが、1901年7月にシカゴ学院がシカゴ大学に編入されて教育学部になって以降、名称を*The Elementary School Teacher and The Course of Study*に変更し、さらにデューイが教育学部長になった1902年7月以降は、誌名から*Course of Study*の呼称を削除して*The Elementary School Teacher*という名称にしていた¹⁴⁰。

最初の*Course of Study*は、パーカーの発案で、シカゴ学院で取り組まれている教育実践を小学校の教員と父母向けに広く紹介する月刊誌として発行された。毎月発行される各号には、シカゴ学院の附属小学校で取り組まれている授業実践の報告や、パーカーをはじめとするシカゴ学院の教授陣による論説が掲載されていた。

*The Elementary School Teacher and The Course of Study*も基本的な性格は同じであった。『大学報』1902年5月号に掲載されている説明記事によれば、この雑誌の目的は「新教育運動の輪に加わりたいと望む教師その他の人々にシカゴ大学教育学部の成果を広めること」にあり、内容は主としてシカゴ大学教育学部(旧シカゴ学院)でおこなわれている新教育の実践を扱い、その中でも特に相関カリキュラムの実践に重点を置くとなっている。そして、寄稿者は教育学部(旧シカゴ学

135 *The University Record*, The University of Chicago, Confidential Number, March 1903 (Chicago: The University of Chicago Press), p. 3.

136 John Dewey to William Rainey Harper, October 30, 1903, Presidents' Papers, 1889-1925, 30/25, ICU.

137 John Dewey to William Rainey Harper, November 19, 1903, Presidents' Papers, 1889-1925, 30/25, ICU (00880).

138 William Rainey Harper to John Dewey, November 24, 1903, Harper Papers 7/3, ICU (00882).

139 William Rainey Harper to John Dewey, June 23, 1903, Presidents' Papers, 1889-1925, 30/25, ICU. ただし、この手紙でハーパーは*Elementary School Teacher*を誤って*Elementary School Review*と記している。

140 *Course of Study: a monthly publication for teachers and parents devoted to the work of the Chicago Institute, Academic and Pedagogic*, vol. 1, no. 1 (July 1900) - vol. 1, no. 10 (June 1901); *The Elementary School Teacher and The Course of Study*, vol. 2, no. 1 (July 1901) - vol. 3, no. 1 (July 1902); *Elementary School Teacher*, vol. 3, no. 2 (Oct. 1902) - vol. 14, no. 10 (June 1914). その後この雑誌は*Elementary School Journal*という名称に変わり、現在もシカゴ大学から発行されている。

院)の教員と提携校のフランシス・W. パーカー・スクールの教員とし、各学年および各教科にわたる実践報告を中心に編集されることになっていた¹⁴¹。まさに*Course of Study*の後継誌である。

この雑誌について、デューイは教育学部長就任早々の時期に、フランク・マニー宛の手紙で次のように書いている。

さて、貴君に助力願わなければならない問題が一つある。*Elementary School Teacher*誌は知っているだろう。これは、パーカー大佐が始めた半個人的事業(a quasi personal venture)で、大学の公的な雑誌ではない。私は、事情が許せば公的な雑誌にしたいと思っている。一学校がそれ自身の活動のみにもとづいた出版をいつまでも続けることができるとはとても思えない。少なくとも、*Elementary School Record*に関して私はそう感じていた。他方、ありきたりな学校誌と競い合ってもほとんど意味はないだろう。一群の先進的な小学校の理論と実践を代表するような小学校の研究誌といったものがやっけていけるかどうか、貴君はどう思う。先進的な小学校教育に取り組んでいる人々は、はたしてどの程度寄稿してくれるだろうか。一般読者は、はたしてそのようなほとんど同人誌的な性格の雑誌にお金を払って購読してくれるだろうか¹⁴²。

パーカーの後任として教育学部長になったデューイは、*Elementary School Teacher*を「パーカー大佐が始めた半個人的事業」と断じ、それを「大学の公的な雑誌」に切り替えたいと考えていたことがわかる。デューイは、自分自身、実験学校の実践にもとづいた研究報告を*The Elementary School Record*¹⁴³というタイトルで1900年2月から12月にかけて9分冊で出版した経験があり、一学校の研究誌のままでは早晩出版が行き詰まると考えていたようである。それで彼は、*Elementary School Teacher*をシカゴ大学が発行する公的な研究出版物にしたいと考えたのである。大学が発行する小学校教育の研究誌というものは、それまで前例がないので、デューイはそうした研究誌の発行がはたして現実によくいくものかどうか、学校現場の事情に精通しているマニーに意見を求めたのである¹⁴⁴。

雑誌の性格を大幅に変更したいとするデューイの意向は、ジャックマンによって支持されていた。ジャックマンは、1902年6月10日付のデューイ宛の意見書の中で、「雑誌の性格は貴兄が既に提起された方針に沿って修正することに賛成です」と述べている。そして、編集主任を任命することと、教員養成部の各科(departments)の長からなる編集協力者を任命することを求めている¹⁴⁵。

1902年7月5日付の書簡で、ハーパー学長はデューイの助言に従って次のように決定したことを関

141 *University Record*, The University of Chicago, vol. 7, no. 1, May 1902 (Chicago: The University of Chicago Press), p. 12; *Annual Register, 1901-1902*.

142 John Dewey to Frank A. Manny, June 3, 1902, Manny Papers, MiU-H.

143 *The Elementary School Record*, Nos. 1-9, Feb-Dec. 1900, John Dewey, Editor; Laura L. Runyon, Managing Editor (Chicago: The University of Chicago Press, 1900)

144 フランク・マニーは、ハイスクールの校長や師範学校の指導教員などを歴任し、この時期、ニューヨークにあるEthical Culture Schoolで総監督(superintendent)を務めていた。

145 Wilbur S. Jackman to John Dewey, June 10, 1902, JDP 3/4, ICarbS, p. 13.

係者に知らせている。

*School Review*と*Elementary School Teacher*の編集・発行は一体化させる。*School Review*の編集方針は現在そのままとする。*Elementary School Teacher*の編集方針は、現在*School Review*が中等教育全般をカバーしているのと同様に、広く初等教育全般を扱うように変更する。*School Review*の編集実務 (managing editor) はジョージ・H. ロックとし、*Elementary School Teacher*の編集実務はエラ・フラッグ・ヤング夫人とする¹⁴⁶。

ここに記されている*School Review*という雑誌は、シカゴ大学が創立当初の1893年から発行している中等教育関係者向けの専門雑誌で、1900年以降、編集の責任を教育学科主任教授のデューイが引き受けることになり、編集実務を教育学専任講師 (Instructor in Pedagogy) のジョージ・ハーバード・ロックが担当していた¹⁴⁷。デューイは、パーカーから引き継いだ*The Elementary School Teacher and The Course of Study*を、一学校の教育実践を紹介する研究報告誌から初等教育全般を扱う専門雑誌に切り替えるため、*School Review*と同様の性格の専門雑誌にしようとしたのである。そして、*School Review*の編集実務は引き続きジョージ・ロックの担当とし、*Elementary School Teacher*の編集実務は新たに教育学准教授のヤング夫人の担当とした¹⁴⁸。

そのヤング夫人が約1年経過した1903年6月になって*Elementary School Teacher*の編集の仕事を辞めたいと申し出た。それがいかなる事情によるものであったのかは不明である。しかし、時期から見て、両小学校の統合とデューイ夫人の校長就任に何らかの関係があったことは推察できる。

1903年7月14日付のデューイ宛の手紙で、ジャックマンは、差し迫っている9月号の準備のために早急に編集実務担当者を決めることが重要だと述べ、実務担当者が決まるまでの間は9月号の準備に自分も協力すると述べている。そして、9月号では次年度 (1903 - 1904年度) の概要ないしはシラバスを掲載する計画になっていたが、「二つの小学校が完全に統合されたので、デューイ夫人の助力なしには、この計画を実行することはできないでしょう」と書いている¹⁴⁹。どうやら二つの小学校の統合により、教育学部の教員スタッフの間に混乱や摩擦が生じていて、次年度の概要を掲載する予定の9月号の編集が頓挫してしまったことが、ヤング夫人の編集実務からの辞任の原因であった

146 William Rainey Harper to To whom it may concern, Presidents' Papers, 1889-1925, 30/25, ICU.

147 *The School Review*, vols. 1-87, Jan. 1893-Aug. 1979. この雑誌は*American Journal of Education*という雑誌に引き継がれ、現在もシカゴ大学から発行されている。

148 ヤング夫人が編集実務を担当したのは、*Elementary School Teacher*, vol. 3, no. 2, Oct. 1902, からである。つまり、雑誌名が*Elementary School Teacher*に変わった時点からである。この号には、ヤング夫人による編集記 (editorial) が掲載されていて、その中で彼女は、雑誌名を*Elementary School Teacher*にし、雑誌名から*Course of Study*を削除したのは、この雑誌が取り扱う内容を拡大して、単にシカゴ大学教育学部の教育理論と実践を紹介するだけでなく、学外の幅広い専門家からも投稿を募り、いわば初等教育の情報センター (clearing-house) としての役割をこの雑誌が果たすためだと説明している。*Elementary School Teacher*, vol. 3, no. 2, Oct. 1902, p. 139. 言うまでもなく、これは教育学部長であるデューイの編集方針にもとづいた説明である。

149 Wilbur S. Jackman to John Dewey, July 14, 1903, JDP 3/13, ICarbS.

ことが推察できる。この手紙でジャックマンは、附属小学校の教員たちが作成した次年度の計画に対して、統合後新たに附属小学校長になったデューイ夫人が、何か別の計画をもっているのかわか、デューイに尋ねている。そして、もしデューイ夫人が彼女の計画を教えてくれるならば、それに協力してもよいと書いている。さらに、ジャックマンは教員養成部の教授陣についても、彼らは附属小学校の教師と共同で、実習校と関連づけて授業概要を掲載すべきか、それとも単独でそれぞれの授業概要を掲載すればよいのかと問っている¹⁵⁰。統合後の附属小学校にはデューイ夫人が校長をしていた実験学校の教師たちも入ってきていたから、ジャックマンたち教員養成部の教授陣もデューイ夫人の計画を知らないままでは、不用意に次年度の概要を準備できないと考えていたのであろう。ジャックマンは「この問題についてライス嬢とベイバー嬢に話をしたが、彼女らは新組織のもとで次年度の計画がどうなるのか聞いていないので、どうしてよいかわからないみたいです」と、両小学校統合後の教育学部内の混乱をデューイに訴えている¹⁵¹。ちなみに、ライス嬢とベイバー嬢は教員養成部の教授スタッフである。

要するに、ジャックマンはこの手紙で、行き詰まっている9月号の編集準備を進めるためには、まずデューイ夫人が校長として次年度の計画を教員たちにきちんと説明したうえで、次年度の概要を9月号に掲載することについて、デューイ夫人自らが教員たちに協力を求めるようにすべきだとデューイに訴えているのである。そして、これには彼自身も側面から協力してもよいと言っているのである。

これに対して、当のデューイ夫人は滞在先のニューヨーク州ハリケーンから1903年8月1日付でデューイ宛に書き送った手紙の中で、次のように述べている。

雑誌の仕事のことはとても驚いています。言葉もないほどです。あなたは彼らに任せるつもりだったと理解していたので、それについてはまったく考えないことにしていました。しかし、あなたが手を出すというなら、私はあなたが言うとおりのことを何でもします。いずれにせよ9月号は大部分あなたの肩にかかってくるでしょうが、その後は、もしあなたの考えが変わらなければ、雑誌から手を引くことができるでしょう。私は雑誌の仕事なんてまっぴらなので、これは明らかに性質の悪い気分転換になるでしょう。恐らくね。とにかく決めてください。そして、その結果を知らせてください。その後で私はヤング夫人に論文を依頼し、仕事に取りかかることにします¹⁵²。

どうやらデューイは9月号の編集実務をデューイ夫人に依頼したようである。夫人は夫の窮状を救うためならば、仕方なく引き受けてもよいと答えている。そして、1903年8月4日付と思われるデューイ宛の手紙で、夫人は自分が雑誌の編集実務を引き受けることについて、ヤング夫人がどう言っているのか尋ねている¹⁵³。これはまったくの推測だが、どうやらヤング夫人と新しく附属小学校長

150 Ibid.

151 Ibid.

152 Alice Chipman Dewey to John Dewey, August 1, 1903, JDP 3/13, ICarbS, pp. 1-2.

になったデューイ夫人との間に *Elementary School Teacher* 9月号の編集をめぐる意見の食い違いが生じたらしく、それでヤング夫人が編集実務の仕事を手紙で辞めると申し出たのではないだろうか。

ついでながら、*Elementary School Teacher* の1903年9月号を見てみると、先にジャックマンの手紙にあったような、教育学部の次年度の授業概要ないしシラバスを掲載するという当初の編集計画は、彼が心配していたとおり教員たちからの投稿の協力が思うように得られず取りやめになり、実際には旧教育学部の実験学校の教師たちによる実践報告を5本掲載している¹⁵⁴。

その後、デューイは編集実務の仕事を手紙でジャックマンに依頼したようである。結局デューイ夫人は編集実務の仕事を引き受けなかったわけである。デューイは1903年9月3日付でジャックマン宛に *Elementary School Teacher* の編集実務を依頼する手紙を書き、それに対してジャックマンは1903年9月9日付で返事の手紙を書き、その中で「デューイ夫人が編集の仕事を引き受けられないと言っていることは残念です」と述べている¹⁵⁵。そして、デューイの依頼を熟考したけれども、やはり編集実務の仕事を引き受けることができないと断っている。「躊躇の唯一の理由」として、ジャックマンは編集実務の大変さをあげている。そして、雑誌の編集方針について「言うまでもなく、編集者は当校の精神にできるかぎり密着して、雑誌が教員たちに作用して彼らの仕事にいくらかでも反映するように心掛けるべきです」と述べている¹⁵⁶。また、「私は当校と結びついた徹底的に生きた定期刊行物をもつことに執着しています」とも述べている¹⁵⁷。つまり、ジャックマンは *Elementary School Teacher* を、かつての *Course of Study* のように、自分たちが取り組んでいる実践や研究を公開する教育学部の機関誌として位置づけるべきだと考えていたのである。おそらくそれは、ジャックマン一人の考えではなく、教育学部の教員スタッフの多くがそう考えていたのであろう。しかし、明らかにこれは *Elementary School Teacher* を一教員養成学校の機関誌から、大学が発行する初等教育の専門雑誌に切り替えたいとするデューイの編集方針に反する考えである。ジャックマンが編集実務の仕事を引き受けられない本当の理由は、そうしたデューイの編集方針に彼自身ついていけないということであつたらう。

ジャックマンは、自分が考える *Elementary School Teacher* の編集方針を次のように提起し、デューイに検討を求めている。

第1に、投稿論文。1本か2本。初等教育について論じたもの。できれば外部の人。

153 Alice Chipman Dewey to John Dewey, August 4?, 1903, JDP 3/13, ICarbS, p. 6.

154 *Elementary School Teacher*, vol. 4, no. 1, Sep. 1903 (Chicago: The University of Chicago Press, 1903), pp. 1-64.

155 Wilbur S. Jackman to John Dewey, September 9, 1903, JDP 3/13, ICarbS, p. 1. なお、1903年9月3日付でジャックマンがデューイから受け取った手紙は不明である。

156 Ibid., p. 1.

157 Ibid., p. 2.

第2に、当校に充てられる部分。①当校の教員の論文。②教案または単元の展開。教材、方法等を提示する。担当者のコメントを付ける。③当校全体の活動についての報告。だれか一人担当者を決める。④学生が準備した教案や授業計画等の公刊。⑤教育学部生が実際に取り組んでいる内容を、説明つきで実例を提示する。

第3に、編集記、書評、さまざまな教育記事¹⁵⁸。

上記の第1と第3の部分はおそらくデューイの意を汲んでのものと思われるが、ジャックマンが第2の部分を雑誌の中心部分と考えていることは明らかであろう。しかし、雑誌編集の実務については、その仕事量の多さを考えると「ひるんでしまう」と述べて、引き受けることを辞退している。その代わり、差し迫っている11月号の準備は、編集実務担当者がどうなるかに関わらず「私が着手したほうがよいと思う」と述べて、デューイへの助力を申し出ている¹⁵⁹。

さらにジャックマンは、1903年9月24日付のデューイ宛の手紙でも、再度11月号の編集実務は自分がやるが、編集実務の責任者については今後の検討だと述べ、「ジャーナルをよいものにするどのような計画にも協力はおみませんが、私が編集責任者を引き受けることはよくないこと (unwise) だと思います」と述べて、デューイの依頼を謝絶している。ここでジャックマンが“unwise”という言葉を使っているのは、おそらくは彼が編集責任者になれば、またデューイやデューイ夫人との間で *Elementary School Teacher* の編集方針をめぐる新たな対立が生じることを予想し、懸念しているからであろう。

ちなみに、シカゴ大学の『年次記録：1902年7月 - 1903年7月』（1903年刊）に掲載された記事によれば、*The Elementary School Teacher* は教授法と教育内容の諸問題について、①附属小学校の教員、②教員養成部の教員、③実験学校（デューイ・スクール）の教員、④教育学部外の小学校教員、⑤小学校の校長、教育長、特別教員、⑥師範学校および大学の教員で特定の教科や領域の教育内容を研究している人のそれぞれの観点から取り上げるとしている。そして、「小学校に関係するすべての教育関係者の研究と結論はこの雑誌に掲載される」と記されている¹⁶⁰。先行誌の *The Elementary School Teacher and Course of Study* が投稿対象を旧シカゴ学院の教員（つまり、上記の①と②）による実践報告に限っていたのに比べ、投稿対象の範囲が飛躍的に拡大され、一教員養成機関の実践報告誌から小学校教育全般を扱う専門研究誌へと雑誌の性格を大きく変えたことがわかる。

さて、編集実務を引き受けられないというジャックマンの先の手紙は、デューイの滞在先のニューヨーク州ハリケーンには届かず、10月になってシカゴにいるデューイのところに届いたらしい。

158 Ibid., pp. 1-2.

159 Ibid., p. 2.

160 *The Annual Register, July 1902-July 1903*, The University of Chicago (Chicago: The University of Chicago Press, 1903), p. 141. なお、ここにある「実験学校（デューイ・スクール）の教員」という項目は、翌年の『年次記録』では削除されている。*The Annual Register, July 1903-July 1904*, The University of Chicago (Chicago: The University of Chicago Press, 1904), p. 142.

1903年10月8日付のジャックマン宛の手紙で、デューイは編集者を引き受けられないというジャックマンの考えが変わっていないのであれば、11月号の準備がどの程度進んでいるのか教えてほしいと述べ、ジャックマンの手元にある11月号向けの原稿をすぐに届けてほしいと求めている¹⁶¹。

教育実習のスキーム

デューイは、1903年6月3日付のジャックマン宛の手紙で「現在教育実習に関わっている人たちが非公式に意見を求めている」と書いている¹⁶²。これは、次年度つまり1903 - 1904年度から教育学部の教育体制が大きく変わり、従来までのジュニア・カレッジ相当の初等教員養成機関から、新たに中等教員養成をおこなうシニア・カレッジ相当のプロフェッショナル・スクールとなることにともない、教育実習の体制（スキーム）も大きく変更する必要があったからである。この手紙で、デューイは、まずは教育実習に関係する各教員から非公式に意見を聴取して、それから基本的なスキームを決めることにしたいと書いている。

デューイの意見聴取に対して、ジャックマンは1903年6月9日付で教育実習に関する長文の意見書をデューイ宛に書き送っている¹⁶³。そして、「I. 実習の方法一般」「II. 実習の準備」「III. 実習生の再等級付け」の3点にわたり一連の検討課題を簡条書きに列挙している。彼はいかにも実務家らしく、新年度からスタートする新しい教育学部の体制に向けた検討課題を考えられる限り事細かにあげている。その中から主だったものを取り出してみると、「I. 実習の方法一般」については、特に実習校での観察実習の位置づけを明確にする必要をあげている。「II. 実習の準備」については、実習生に1教室全体を1時間とか1日とかといった比較的長時間まかせるようにすることや、一人の実習生が特定の1教科を一定期間教えるようにすること、また優秀な学生を1ヶ月ないし1クォーター(3ヶ月) 助教師として採用することなどを検討すべきとしている。「III. 実習生の再等級付け」については、現職経験者と、ハイスクール卒業者あるいは教職未経験者の扱いを違えるべきことや、新年度からの改訂コースではシニア・カレッジ相当の専門課程を提供することになっていることから、このコースでは入学後ただちに実習や観察を実施して子どもたちと接触させることが望ましいこと、さらにArts and Technology コースの学生にもある程度の全科実習を求めべきこと、中等教員養成コースのための実習のあり方について検討する必要があることなどを提起している。

この実習生の再等級付けについては、デューイも「学生一人一人を注意深く分類し、適切にクラス指定をおこなう計画が策定されなければ、秋からの新学期は大混乱となるだろう」と指摘していた¹⁶⁴。新学期から、教育学部では従来のジュニア・カレッジ相当の初等教員養成コースに加えて、新たにシニア・カレッジ相当の初等教員養成コースと中等教員養成コース、それに芸術・技術関係

の専科コースが開設され、これにハイスクール卒業生から師範学校卒業生、現職教員、各種専門学校卒業生、シカゴ大学の在学中で教職を希望する学生など、多種多様な学生を受け入れることになっているので、入学者を学歴や教職歴などによって分類し、クラス指定や履修計画の策定などを適切におこなうようにすることが、この時期緊急の課題になっていたのである。

師範学校の格付けとスカラーシップの授与

シカゴ大学教育学部は、デューイが学部長に就任して1年後の1903-1904年度から、それまでのジュニア・カレッジ相当の2年制の初等教員養成学校から、新たに初等教員養成と中等教員養成を合わせおこなうシニア・カレッジ相当のプロフェッショナル・スクールへと脱皮し、卒業生には学士号(Bachelor's Degree) を授与することとなった。さらに将来的には、教育学部に大学院課程を開設して教育専門職博士号(Ed.D) を授与することも構想されていた¹⁶⁵。このような教員養成のプロフェッショナル・スクールとしてシカゴ大学教育学部を発展させていくうえで、ハーパー学長とデューイ教育学部長が考えていた方策の一つが、各地の師範学校と提携関係を結び、師範学校卒業生を積極的に入学させて、彼らに高度な専門職教育をおこなうことであった¹⁶⁶。そして、そのために師範学校長の推薦を受けた者を対象にスカラーシップ(奨学金) の制度を整え、彼らに一定期間学校現場を離れて勉学に専念できる機会を保障することであった。

デューイは、各地の師範学校長宛に書いた手紙の中で、「われわれは、この教育学部をpostgraduate school にしていきたいと考えている」と書いている。つまり、シカゴ大学教育学部を師範学校の上に接続するプロフェッショナル・スクールに位置づけたいと考えているわけである。そして、「師範学校の最も上級の課程を卒業した学生にシカゴ大学での2年間の履修に相当するクレジットを与えて、2年間の履修で学士号を取得できるようにする」と書いている¹⁶⁷。つまり、通常の大学4年課程のうち、前半の2年間(ジュニア・カレッジ段階)の履修は師範学校等での既修得単位を認定することにより免除し、後半の2年間(シニア・カレッジ段階)の履修のみで学士号を取得できるようにするというのである。

1903年5月23日付のジャックマン宛の手紙で、デューイは師範学校の格付け(grading)について早急に報告書を作成するようジャックマンに指示している。これは、各地の師範学校の教育課程を調査し、師範学校卒業生の入学にあたり、最大2年間の履修に相当するクレジットのうちどれくらいのクレジットを与えることにするかを、それぞれの出身校の格付けに応じて決めるための基準をつくっておくことを指示したものである¹⁶⁸。師範学校卒業生へのスカラーシップ授与は既に前年度

165 参照。

166 William Rainey Harper, "The President's Report," *The President Report, July 1892-July 1902*, The University of Chicago, 1903, p. lxxxvi-lxxxvii, 参照。

167 John Dewey to R. H. Halsey, August 4, 1903, College of Education Record 3/2, ICU; John Dewey to L. H. Jones, August 4, 1903, College of Education Record 3/3, ICU. 類似の手紙は各地の師範学校長に送られたらしい。

161 John Dewey to Wilbur S. Jackman, October 8, 1903, JDP 3/14, ICarbS (no. 01768).

162 John Dewey to Wilbur S. Jackman, June 3, 1903, JDP 3/12, ICarbS.

163 Wilbur S. Jackman to John Dewey, June 9, 1903, JDP 3/12, ICarbS.

164 John Dewey to Wilbur S. Jackman, May 30, 1903, JDP 3/11, ICarbS, p. 2

(1902-1903年度) から実施されていたが¹⁶⁹、これをさらに拡充して、教育学部の専門課程 (シニア・カレッジ相当) を師範学校卒業生向けの postgraduate 課程として整備する計画は1903年1月頃にデューイとジャックマンの間で話し合われていたようである。そして、認定校リスト (accredited list) を作成するためにジャックマンが春学期 (1903年4月~6月) に各地の師範学校を調査訪問することになっていた¹⁷⁰。その調査結果にもとづく報告書の作成をデューイはジャックマンに求めたのである。

1903-1904年度のスカラシップについては、1903年5月の初めにデューイがジャックマンの提案を了承する形で次のように取り決められた。(1) スカラシップ数は25とする。(2) スカラシップはGeneral Course Bの履修要件を満たしている者に限られる。(3) ただし、Arts & Technology の専科を履修する者は例外とする。(4) 登録学生数が150名まではスカラシップの費用は教育学部の負担とはならない¹⁷¹。最後の点については、デューイが学長に予算要求している¹⁷²。その結果、最終的に1903-1904年度の教育学部のスカラシップの数は20、1件当たり120ドル、合計で2,400ドルが大学当局から支出されることとなり、登録学生数が140名を越えれば追加もありうるということになった¹⁷³。

スカラシップ授与の対象をGeneral Course B (つまりシニア・カレッジ相当の全科コース) の履修要件を満たしている者に限るとした理由は、General Course A (つまり従来のジュニア・カレッジ相当の全科コース) の履修者に比べて成績が優秀だということである¹⁷⁴。同じ師範学校卒業生でも、前者には2年のクレジットが与えられて、いわば大学の3年次に入学が認められることになるのに対して、後者には1年のクレジットが与えられて、いわば大学の2年次に入学が認められるということである。したがって、スカラシップ授与対象者となるのは、先にデューイが説明していた「師範学校の最も上級の課程を卒業した者」ということになる。なお、ジャックマンは1903年6月11日付のデューイ宛の手紙で、スカラシップに応募した教育学部卒業生はいまだGeneral Course

168 John Dewey to Wilbur S. Jackman, May 23, 1903, JDP 3/11, ICarbS.

169 George A. McFarland to Wilbur S. Jackman, November 19, 1902, College of Education Records, ICU. 手紙の差出人のマクファーランドはノースダコタ州立バレー・シティ師範学校 (State Normal School, Valley City, North Dakota) の校長である。この手紙でマクファーランド校長は、秋口にジャックマンから師範学校卒業生にスカラシップを与える旨の手紙をもらい、一人卒業生が授与されたが、来年も同様の募集があるかと問い合わせている。

170 John Dewey to William Rainey Harper, January 27, 1903, President's Papers 1889-1925, 30/25, ICU.

171 Wilbur S. Jackman to John Dewey, May 7, 1903, JDP 3/11, ICarbS, p. 2. 以下も参照。Wilbur S. Jackman to John Dewey, May 5, 1903, JDP 3/11, ICarbS; John Dewey to Wilbur S. Jackman, May 7, JDP 3/11, ICarbs.

172 John Dewey to Wilbur S. Jackman, May 8, 1903, JDP 3/11, ICarbs; John Dewey to William Rainey Harper, May 29, 1903, JDP 3/11, ICarbs.

173 John Dewey to Wilbur S. Jackman, June 11, 1903, JDP 3/12, ICarbs (no. 01727).

174 Wilbur S. Jackman to John Dewey, May 5, 1903, JDP 3/11, ICarbS; John Dewey to Wilbur S. Jackman, May 7, JDP 3/11, ICarbs.

Bの入学要件を満たしていないので、スカラシップ応募者リストに載せることができないが、彼らのうち成績優秀者についてはなんとか配慮することができないだろうかと書いている¹⁷⁵。これに対して、デューイは「貴兄が次年度にスカラシップに推薦したい在學生がまだ他にいるなら、すぐに知らせてくれ」と応えている¹⁷⁶。

スカラシップを受ける学生には「一定のサービス」に従事することが求められた。この「学生サービス」は、教育学部の教員養成部と附属小学校と附属ハイスクールにおいて教員の補助や事務作業をおこなうもので、それぞれの部署にどれくらいの数の学生サービスを配置するかをめぐって調整がおこなわれていたようである¹⁷⁷。

ジャックマンは、1903年6月末の年度終了時に、提携先の各地の師範学校長宛に、スカラシップに該当する成績優秀な卒業生の推薦を求める手紙を出している。しかし、応募者がスカラシップの予定数に満たなかったらしく、デューイは休暇中のジャックマンに代わって、1903年8月4日付でウイスコンシン州オシュコシュ (Oshkosh) の州立師範学校長であるハルゼー (R. H. Halsey) とミシガン州立師範カレッジ (Michigan State Normal College) 校長であるジョーンズ (L. H. Jones) に宛て、再度の推薦を求める手紙を出している¹⁷⁸。

前者のハルゼー校長からは、ウイスコンシン州ネイルズビル (Neillsville) という小さな町で小学校長をしているジュリー・サーヴァティ (Julie Servaty) という女性をスカラシップに推薦してきた。彼女は、シカゴ大学で2年間学業を続けるだけの資金を用意できるかどうか不安を感じているが、スカラシップが取れるならば多分シカゴに行くだろうとハルゼー校長は書いている¹⁷⁹。数日後、ハルゼー校長は、彼女がシカゴ大学教育学部の次年度 (1903-1904年度) のスカラシップに応募することになったことをデューイに伝え¹⁸⁰、それに対してデューイは感謝の返事をハルゼー校長宛に書いている¹⁸¹。

ミシガン州立カレッジのジョーンズ校長からは、「若い人たちがシカゴ、コロンビア、ハーバードなどの一流大学で学ぶ機会に恵まれるならば、彼らを他の所へ送ることなど考えもしません」という返事が来ている。そして、ジョーンズ校長は、スカラシップに応募できそうな人物が見つければすぐに連絡すると書いている¹⁸²。これに対する返事の手紙で、デューイは、ジョーンズ校長がミシガン州立師範カレッジに上級コースを設置して学士号 (A.B.) 取得に道を開こうとしていること

175 Wilbur S. Jackman to John Dewey, June 11, 1903, JDP 3/11, ICarbs, p. 1.

176 John Dewey to Wilbur S. Jackman, June 11, 1903.

177 Wilbur S. Jackman to John Dewey, June 11, 1903, JDP 3/12, ICarbs, p. 1; John Dewey to Wilbur S. Jackman, June 11, 1903, JDP 3/12, ICarbs.

178 John Dewey to R. H. Halsey, August 4, 1903, College of Education Record 3/2, ICU; John Dewey to L. H. Jones, August 4, 1903, College of Education Record 3/3.

179 R. H. Halsey to John Dewey, August 17, 1903, College of Education Records 3/2, ICU (no. 01309).

180 R. H. Halsey to John Dewey, August 20, 1903, College of Education Records 3/2, ICU (no. 01308).

181 John Dewey to R. H. Halsey, August 24, 1903, College of Education Records 3/2, ICU (no. 01307).

182 L. H. Jones to John Dewey, August 8, 1903, College of Education Records 3/3, ICU (no. 01349).

に多大な関心をもっている」と書いている。そして、ミシガン州立師範カレッジで教育実習の批評教員 (critic teacher) をしているスティーガル (Steagall) という女性からスカラシップについて問合せが来ているが、彼女はスカラシップに推薦できる人物かどうかどうか尋ねている¹⁸³。これに対してジョーンズ校長は、スティーガル女史はスカラシップに値する確かな人物だとデューイに返答している。そして、彼女は教育実習の指導教員 (training teacher) であり、学士号取得を早急に希望しており、州立カレッジとしては彼女の1年間の派遣を決めた」と書いている¹⁸⁴。スティーガル女史の推薦は、ミシガン州立師範カレッジのダイモン・ロバーツ (Dimon H. Roberts) から来ており、彼女はこの3年間師範カレッジで小学校5年生の批評教員をしているとロバーツは書いている¹⁸⁵。スティーガル女史はイリノイ州立師範大学 (Illinois State Normal University) の卒業生であつたらしく、彼女はシカゴ大学のスカラシップに応募するため、イリノイ州立師範大学のデヴィッド・フェルムリー (David Felmley) 学長に推薦依頼の手紙を出している。そして、1896年卒業の自分は推薦の対象になるかどうか、また今年の推薦が無理なら来年は可能だろうかと打診している¹⁸⁶。これに応じてフェルムリー学長は、彼女をスカラシップに推薦する手紙をデューイ宛に書いている。そして、同じ手紙でフェルムリー学長は、既にイリノイ州立師範大学からスカラシップに推薦した別の批評教員がアイダホ州にすばらしい転出先が見つかったので、シカゴには行けなくなったと書いている¹⁸⁷。スティーガル女史はその代わりにフェルムリー学長から推薦を受けたわけである。

183 John Dewey to L. H. Jones, August 10, 1903, College of Education Records 3/3, ICU (no. 01350). デューイがジョーンズ校長に、ミシガン州立師範カレッジの上級コースに多大な関心をもっている」と書いているのは、1899年にミシガン州立師範学校がミシガン州立師範カレッジと名称を変更し、全米最初の4年制の教員養成課程をもつ師範学校になり、従来の中等レベルの師範学校から教員養成大学への脱皮を図っていたことが背景にある。ミシガン州立師範学校は、1853年に開学した中西部最初の州立師範学校であり、当初は小学校教育を終了した程度の13-14歳の男女を入学させ、2年ないし3年の課程で教員免許 (teaching certificate) とハイスクール修了認定証 (high school diploma) を授与していた。ミシガン州立師範カレッジは、1956年からイースタンミシガン大学 (Eastern Michigan University) と呼ばれるようになり、現在に至っている。"A Brief History of EMU," <http://www.emich.edu/walkingtour/hist.htm> 参照。

184 L. H. Jones to John Dewey, August 12, 1903, College of Education Records 3/3, ICU (no. 01353).

185 Dimon H. Roberts to John Dewey, August 17, 1903, College of Education Records 3/3, ICU (no. 01356).

186 Marry M. Steagall to David Felmley, August 7, 1903, College of Education Records 3/3, ICU (no. 01352). イリノイ州立師範大学はユニヴァーシティを名乗ってはいたが、学士号を出すようになったのは1908年からであり、それはフェルムリー学長による長年の努力の成果であつた。

187 David Felmley to John Dewey, August 11, 1903, College of Education Records 3/3, ICU (no. 01351).



ミシガン州立師範カレッジのジョーンズ校長

このスティーガル女史の例からもうかがわれるように、地方の師範学校長にとって、師範学校卒の現職教員のうちで特に優秀な者を4年制大学に派遣して学士号を取得させることは、師範学校自体の発展のためにも積極的に推進すべき方策であつたようである。特に、スティーガル女史が卒業したイリノイ州立師範大学と、彼女がこのとき批評教員を務めていたミシガン州立師範カレッジは、ともに中等レベルの師範学校から学士号取得が可能な4年制の教員養成大学へと脱皮を図ろうとしていた。その意味で、シカゴ大学と各地の師範学校との間に接続関係を築こうとするハーバー学長とデューイ教育学部長の構想は、そうした師範学校側の要求をも十分見すえたものであつたのであり、今後予想される大学レベルの教員養成への対応をいち早く進めることによって、シカゴ大学教育学部を教員養成分野におけるアメリカ中西部の拠点たらしめようとするものであつた。

同じく1903年8月4日付でデューイは、師範学校卒業後3年の教職歴をもつ卒業生をスカラシップに推薦できるかどうかジャックマンに問い合わせてきたノースダコタ州バレー・シティの州立師範学校長マクファーランド (George A. McFarland) 宛に、その卒業生にぜひとも応募書類を提出するよう促してほしいと依頼の手紙を書いている¹⁸⁸。マクファーランド校長がジャックマンのところに問い合わせの手紙を出したのは9ヶ月以上前の1902年11月19日であつたから¹⁸⁹、新年度の開始 (1903年10月) が近づいたこの時期にデューイがスカラシップ応募者獲得にいかにも真剣に取り組んでいたかがうかがわれる。マクファーランド校長が推薦してきたマクロード (McLeod) という女性に、デューイは1903年8月10日付で教育学部の便覧 (Bulletin) と応募書類を送り、スカラシップを授与するためにGeneral Course Bの要件を満たしているかどうか審査するので急いで応募書類に記入して送り返すようにと同封の手紙に記している¹⁹⁰。

188 John Dewey to George A. McFarland, August 4, 1903, College of Education Records 3/3, ICU.

189 George A. McFarland to Wilbur S. Jackman, November 19, 1902, College of Education Records 3/3, ICU.

190 John Dewey to Myrtie I McLeod, College of Education Records 3/3, ICU.

同じく8月4日付でデューイは、スカラシップについてジャックマンに問い合わせてきたウイスコンシン州スティーブンス・ポイント (Stevens Point) の州立師範学校長プレイ (Theron B. Pray) に宛てて、休暇中のジャックマンに代わって返事の手紙を出し、プレイ校長から問合せのあった二人の卒業生について「特にアール嬢 (Miss Earle) は2年で学士号を取得できる新設の上級コース [General Course Bのこと] の要件をもっています」と書いている¹⁹¹。

同じく8月4日付で、デューイはユタ州の現職教員ヒックマン (J. E. Hickman) 宛に、スカラシップの授与を知らせる手紙を出している。その中で、スカラシップは1年間3クォーター分の授業料120ドルを免除するものだと記している¹⁹²。

同じく8月4日付で、デューイはアイオワ州セダー・フォールズ (Cedar Falls) の現職教員リス・モイヤー (Louis B. Moyer) 宛に、アイオワ州立ティーチャーズ・カレッジのシーレイ校長 (Homer H. Seerley) から推薦状が届いていることを知らせ、General Course Bの要件を満たしていれば、1年間3クォーター分の授業料120ドルを免除するスカラシップを授与すると書いている¹⁹³。これに対して、モイヤーは次年度のスカラシップの授与に感謝する返事をデューイ宛に書いている¹⁹⁴。

同じく8月4日付で、デューイはニューメキシコ州立師範カレッジ校長のエドガー・ヒュウェット (Edgar L. Hewett) に手紙を出し、以前に彼からジャックマンのところにスカラシップの推薦があったユーニス・タンメ (Eunice Tamme) という女性について、彼女に応募書類を提出するようヒュウェット校長から催促してほしいと依頼している¹⁹⁵。タンメ女史は8月24日付でデューイ宛に手紙を出し、スカラシップへの推薦を次年度 (1904-1905年度) まで繰り延べしてもらえないかと問い合わせている。理由は、シカゴで2年間勉学生活をするための資金の不足である¹⁹⁶。これに対して、デューイはジャックマンの事務助手のアンナ・レ・フィーバ (Anna Le Fevre) を通じて、スカラシップの1年繰り延べはできないと回答している。レ・フィーバはアンナ女史に、名前を覚えておくので来年の春もう一度手紙で連絡をよこすようにと書いている¹⁹⁷。

アイオワ州のエセルダ・モリソン (Ethelda Morrison) という女性教師は、1903年8月7日付でデューイ宛にスカラシップの応募書類と成績記録、それに勤務校の校長による免職通知を送って

191 John Dewey to Theron B. Pray, August 4, College of Education Records 3/2, ICU (no. 01296).

192 John Dewey to J. E. Hickman, August 4, 1903, College of Education Records 3/2, ICU (no. 01318).

193 John Dewey to Louis B. Moyer, August 4, 1903, モイヤーは、1903年7月22日付でジャックマン宛にスカラシップについての問合せの手紙を出している。Louis B. Moyer to Wilbur S. Jackman, July 22, 1903, College of Education Records 3/3, ICU (no. 01339). また、同日付でアイオワ州立師範学校長のホーマー・シーレイからジャックマン宛にモイヤーの推薦状が送られている。Homer H. Seerley to Wilbur S. Jackman, July 22, 1903, College of Education Records 3/3, ICU (no. 01340).

194 Louis B. Moyer to John Dewey, August 7, 1903, College of Education Records 3/3, ICU (no. 01341).

195 John Dewey to Edgar L. Hewett, August 4, 1903, College of Education Records 3/3, ICU (no. 01359).

196 Eunice P. Tamme to John Dewey, August 24, 1903, College of Education Records 3/3, ICU (no. 01362).

197 Anna Le Fevre to Eunice P. Tamme, September 3, 1903, College of Education Records 3/3, ICU (no. 01363).

いる。モリソン女史はハイスクールを卒業していないが、4年間カレッジに在籍し、教員免許取得に必要な科目以外の学業も修め、シカゴ大学教育学部の入学要件を満たしている。ただし、カレッジ在学中毎年冬休みに小学校で教えていて、冬休みが小学校の1学期間よりも短いため、一部授業に出られず、そのためシニア (学士課程3、4年) 段階の成績はふるわない¹⁹⁸。モリソン女史にはジャックマンが同年8月10日付で応募書類を受領したと返事を出している。そして、シカゴ大学の編入学審査主幹 (Dean in Charge of Advanced Standing) のバーンズ (Barnes) が詳細に審査して学士号取得まで何年間の履修が必要になるかを決定するが、学士号取得のためには志望している家政学 (Household Arts) の勉学のほかに、General Course Bで要求される他の諸科目の勉学も必要であると説明している¹⁹⁹。モリソン女史は、同年8月14日付のデューイ宛の手紙で、スカラシップ授与に謝意を表している²⁰⁰。これに対してデューイは同年8月17日付でモリソン女史に手紙を出し、スカラシップ授与に対しては「学生サービス」が求められることになっており、彼女には志望先の家政科で1日2時間を限度に補助員をしてもらう予定で、これは彼女自身の勉学にも直接役立つだろうと書いている²⁰¹。ところが、モリソン女史は8月19日付でデューイ宛に、今秋はイリノイ州ピオリア (Peoria) にあるブラッドレー総合技術学院 (Bradley Polytechnic Institute) で勉学したいので、シカゴ大学にはその後に入学することにしたいが、それでもスカラシップを利用できるかと問い合わせてきた²⁰²。ちなみに、ブラッドレー総合技術学院は、工業技術教育と家庭科教育、それに古典語中心の大学進学準備教育の3コースを併置する私立学校で、ハイスクール4年相当のアカデミーの上に2年制のカレッジをもっていた。おそらくモリソン女史は、自らのキャリアアップを図るため、家庭科教育で定評のあるブラッドレー総合技術学院にも進学希望を出していて、同時にシカゴ大学からスカラシップ授与が認められたので、上記のような問い合わせをしてきたのであろう。これに対してデューイは8月20日付でモリソン女子に返事を出し、スカラシップを延長して利用することはできないので、スカラシップを利用するのであれば10月1日開始の秋学期 (Autumn Quarter) に入学しなければならないと回答している²⁰³。これを受けてモリソン女史は8月24日付でデューイに手紙を出し、10月1日にシカゴに行くことにすると返事している²⁰⁴。

ウイスコンシン州のフローラ・アール (Flora Earle) という女性教師が1903年8月16日付でデューイ宛にスカラシップの応募書類と、スティーブンス・ポイント師範学校 (Stevens Point Normal School) およびウイスコンシン大学 (University of Wisconsin) での彼女の成績証明書を

198 Ethelda Morrison to John Dewey, August 7, 1903, College of Education Records 3/3, ICU (no. 01331).

199 Wilbur S. Jackman to Ethelda Morrison, August 10, 1903, College of Education Records 3/3, ICU (no. 01332).

200 Ethelda Morrison to John Dewey, August 14, 1903, College of Education Records 3/3, ICU (no. 01333).

201 John Dewey to Ethelda Morrison, August 17, 1903, College of Education Records 3/3, ICU (no. 01334).

202 Ethelda Morrison to John Dewey, August 19, 1903, College of Education Records 3/3, ICU (no. 01335).

203 John Dewey to Ethelda Morrison, August 20, 1903, College of Education Records 3/3, ICU (no. 01336).

204 Ethelda Morrison to John Dewey, August 24, 1903, College of Education Records 3/3, ICU (no. 01337).

送ってきた²⁰⁵。デューイは8月20日付でスカラーシップを授与するとの返事の手紙を送り、編入学審査主幹の審査を受けた後に、彼女の既修得科目がシカゴ大学教育学部での履修科目のクレジットにどれくらい相当するか、つまり2年間で学士号が取得できるかどうかを知らせると書いている²⁰⁶。しかし、9月6日付でアール女史は、健康上の理由で今秋シカゴ大学にいけなくなったと書いてきた。そして、スカラーシップを次年度に繰り延べることはできないかと問い合わせている²⁰⁷。さらに、彼女は新学期開始後の10月11日付でデューイ宛に手紙を書き、次の春に再度スカラーシップに応募して、来年秋にシカゴ大学に入学したいと書いている²⁰⁸。

3. ブレイン・ホールの完成と新教育学部の出発

ブレイン・ホールへの移転

デューイは、1903年10月4日付のブレイン夫人宛の手紙で、ブレイン・ホールの完成とそこへの入居を次のように報告している。

私たちはついに新校舎「ブレイン・ホール」に入りました。しかし、作業員はまだいます。すぐにも来ていただき、学部と建物をご覧いただきたい。もちろん、すべてが整ったあかつきに、もう一度訪問していただきたいのですが。

附属小学校は300人、附属ハイスクールは手工学校と合わせて450人です。後者の建物「手工棟」の建設は順調に進んでいます。ぜひとも早いうちに訪問していただけないでしょうか。建物と生徒たちをご覧になれば、きっと満足していただけます²⁰⁹。

手工棟はいまだ工事中であったが、完成したブレイン・ホールには旧シカゴ手工学校の教員と生

205 Flora Earle to John Dewey, August 16, 1903, College of Education Records 3/3, ICU (no. 01299). スティーブンス・ポイント師範学校は、現在ウイスクンシン大学スティーブンス・ポイント校となっている。

206 John Dewey to Flora Earle, August 20, 1903, College of Education Records 3/3, ICU (no. 01300).

207 Flora Earle to John Dewey, September 6, 1903, College of Education Records 3/2, ICU (no. 01302). 当然のことながら、スカラーシップの繰り延べはできない。

208 Flora Earle to John Dewey, October 11, 1903, College of Education Record 3/2, ICU (no. 01304).

209 John Dewey to Anita McCormick Blaine, October 4, 1903, Blaine Papers, WHI. なお、グスタフソンによれば、附属ハイスクールの1903-1904年度の生徒数は552名となっている。内訳は、1年生171名、2年生149名、3年生118名、4年生111名、過年度生3名である。また、これらのうちシカゴ手工学校出身者が123名、サウスサイド・アカデミー出身者が125名、実験学校出身者が41名となっている。残りは中西部の各地から集まった。David Gustafson, "The Origin and Establishment of the University High School of the University of Chicago," unpublished M.A. dissertation, The University of Chicago, 1927, pp. 99-100. デューイがブレイン夫人宛の手紙で「附属ハイスクールは手工学校と合わせて450人です」と記している数字はおそらくは公式の入学定員で、グスタフソンが記している生徒数は1903-1904年度終了時点での実際の在籍者数だと思われる。

徒も入居した²¹⁰。

こうして、1903年10月の新学期開始とともに、旧シカゴ学院の教員養成部 (College of Education) と附属小学校 (University Elementary School)、デューイの実験学校 (Laboratory School)、それに附属ハイスクール (University High School) を構成する旧サウスサイド・アカデミーと旧シカゴ手工学校のこれらすべてが一つの建物に入ることになった。2年前のシカゴ学院の編入に際してハーバー学長が抱いていた構想、すなわち初等・中等一貫校を併設する教員養成の専門学部 (Professional School) の構想は、ここに名実ともに実現することになった。



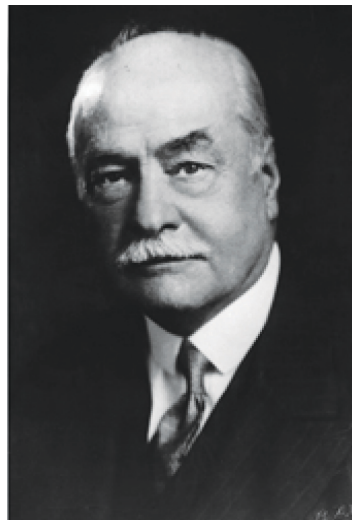
ブレイン・ホール (1904年) 中庭から撮影

210 手工棟は1904年1月に完成する。シカゴのダウンタウンにあった旧シカゴ手工学校の建物から工作機械などの設備が、1903年の夏季休暇中にシカゴ大学に運ばれた。1903年の新学期開始から、旧シカゴ手工学校のアカデミック科目の授業はブレイン・ホールでおこなわれるようになったが、実習科目の授業は手工棟が完成する1904年1月までおこなわれなかったようである。The President's Report, The University of Chicago, July 1902-July 1904, The University of Chicago Press, 1905, p. 142; Gustafson, op. cit., p. 100. なお、アイダ・ディペンシアによれば、1903年10月から1904年1月まで、手工学校の実習の授業はブレイン・ホールでおこなわれたとしている。Ida B. DePencier, The History of The Laboratory Schools: The University of Chicago, 1896-1965, Quadrangle Books, 1967, p. 51. しかし、ブレイン・ホールで実習の授業がおこなわれたとしても、工作機械を使った本格的な実習がおこなわれたとは考えられない。

ブレイン・ホール落成式

1904年1月に手工棟が完成した後、1903-1904年度の終了が近づいた1904年5月14日にブレイン・ホールの落成式が盛大に催された。この落成式には、コロンビア大学のバトラー学長 (Nicholas Murray Butler) が基調講演者として招かれた。

バトラーが基調講演者を引き受けるにあたっては、ちょっとしたいきさつがある。講演依頼は最初、教育学部歴史文学教育助教授のライス嬢を通じておこなわれたようである。しかし、ライス嬢の依頼に対してバトラーは断りの返事をしてきた。そこで、デューイが再度依頼の手紙を書いた。1904年1月6日付のバトラー宛の手紙でデューイは、「貴兄の教育への関心と、過去における貴兄とパーカー大佐との関係からいって、講演にふさわしい人物は全米でも貴兄をおいてほかにいません。もちろん、通常のセレモニーとは異なり、パーカー大佐の教育上の業績を大学として記念するものになります。貴兄が引き受けてくれなければ、ほかにだれに頼めばよいかわかりません」と書いている²¹¹。これに対して、バトラーからは多忙のために引き受けられないという返事が来た²¹²。そのため、今度はハーパー学長が依頼の手紙を出すことになった。依頼の手紙の中でハーパー学長は「あらゆる方面から検討しましたが、私たちが半分も満足させる人物を見つけることができません。貴兄こそフランシス・パーカーを記念するこの特別な場にふさわしい人物です」と書いている。そして、「ブレイン夫人も貴兄以外の人物を望んでいません」と付け加えている²¹³。さすがのバトラーもハーパー学長からの依頼は断りきれず、受諾の返事をしている²¹⁴。



ニコラス・バトラー

上で引用したデューイとハーパー学長の依頼の手紙にもあるように、ブレイン・ホールの落成式

211 John Dewey to Nicholas Murray Butler, January 6, 1904, Butler Papers, NNC.

212 Nicholas Murray Butler to John Dewey, January 8, 1904, Butler Papers, NNC.

213 William Rainey Harper to Nicholas Murray Butler, January 25, 1904, Butler Papers, NNC.

214 Nicholas Murray Butler to William Rainey Harper, January 28, 1904, Butler Papers, NNC.

は同時にフランシス・パーカーの功績を記念するセレモニーとしても位置づけられていたようである。バトラーがパーカーとどのような関係にあったか、詳細は不明であるが、おそらくバトラーは全米を代表する有力なパーカー支援者の一人であったのであろう。クック郡師範学校時代以来パーカーのもとで教師を務めてきたライス嬢が最初に講演依頼の手紙を出していることからそれはいかがわれる。デューイは落成式の式典で基調講演者のバトラーを紹介する短い演説をおこなっているが、その中でバトラーとシカゴ大学教育学部の深い関係は、パーカーの指導のもとにあったクック郡師範学校が外部の干渉や妨害に抗して勝利を取めた時期にまでさかのぼると述べている²¹⁵。

しかし、バトラーをブレイン・ホールの落成式の基調講演者に招くことには、もう一つ大きな理由があった。それは、シカゴ大学教育学部がブレイン・ホールの完成をもって名実ともに教員養成のプロフェッショナル・スクール (いわゆるEd School) としてスタートしたことを内外に示すことであった。落成式には、シカゴの学校関係者が多数参加することになっており、ハーパー学長は落成式を「ここ数年で最大の教育関係者の集まりにしたい」と意気込んでいた²¹⁶。そのために、教員養成のプロフェッショナル・スクールの先駆けであるコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジの事実上の創設者であるバトラーにぜひとも基調講演をおこなってもらった必要があったのである。

ニコラス・バトラーは1885年にコロンビア・カレッジ (当時) の哲学科のスタッフとなり、1901年から1945年まで45年間にわたってコロンビア大学の学長を務めた。もともと彼は教育問題に深い関心をもっていて、1887年にティーチャーズ・カレッジの前身であるニューヨーク教員養成学校 (New York School of Training of Teachers) の初代校長に就任し1891年まで校長を務めた。1892年にニューヨーク教員養成学校は、二代目校長のウォルター・ハーヴィー (Walter L. Harvey) のもとで校名をティーチャーズ・カレッジに変更し、カレッジ卒業者や師範学校卒業者、教職経験者など、大学2年程度以上の教育を受けている者を対象とする大学レベルの教員養成をおこなう学校へと発展した。1898年には、三代目校長のジェームズ・ラッセル (James Earl Russell) のもとで、ティーチャーズ・カレッジはコロンビア大学の傘下に入り、ロー・スクールやメディカル・スクールに匹敵する総合大学の中のプロフェッショナル・スクールとして再出発した。

デューイとハーパー学長がシカゴ大学教育学部の目標にしていたのは、まさにこのコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジであった。先のバトラーを紹介する演説の中で、デューイはコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジの創設と発展に尽くしたバトラーの功績をたたえたうえで、シカゴ大学教育学部はユニバーシティにおける教員養成の専門学部としてはコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジに次ぎ全米で二番目のものであり、まさにコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジを「模範」(prototype) として発足したと述べている²¹⁷。

215 John Dewey, "Introduction of the Orator," The University Record, The University of Chicago, vol. 9, no. 1, May 1904 (Chicago: The University of Chicago Press), p. 12; Middle Works of John Dewey, vol. 3 (Carbondale, IL: Southern Illinois University Press, 1977), p. 325.

216 William Rainey Harper to Nicholas Murray Butler, January 25, 1904, Butler Papers, NNC.

217 Dewey, op. cit., pp. 12-13; Middle Works, vol. 3, pp. 325-26.

ブレイン・ホールの施設・設備費

ブレイン・ホールへの移転後、デューイは教育学部の施設・設備費についてハーパー学長との間で一連の交渉をおこなっている。

1903年10月5日付のハーパー学長宛の手紙でデューイは、今年度(1903-1904年度)の教育学部の施設・設備費に4,000ドル、手工学校の施設・設備費に2,000ドルを要求している。手工学校の施設・設備費の方は、おそらくは旧シカゴ手工学校の編入にともなう契約により、別扱いになっていたであろう。ここでデューイが教育学部の施設・設備費として要求している4,000ドルは、手工棟を除くブレイン・ホールの施設・設備費に充てられるものである。つまり、教員養成部(College of Education)と附属小学校と附属ハイスクールの施設・設備費である。彼は「本当に必要なことを全部やるためには10,000ドルの追加が必要ですが、この4,000ドルでとにかく今年度はしのげるでしょう」と、4,000ドルは必要最小限の要求額であることを強調している。そして、シカゴ学院理事会との契約で教育学部の施設・設備費には50,000ドルの資金が用意されており、そのうち既に42,226.06ドルは発注済なので、今年度の予算4,000ドルとあわせても、あと3,000~4,000ドルは残るはずだと付け加えている²¹⁸。

これに対してハーパー学長は1903年10月9日付でデューイに返事の手紙を出し、シカゴ学院理事会との契約にある50,000ドルのうち、既に3,000ドルは教育学部の1年目と2年目の設備に使い、残り47,000ドルも恒久設備に使ったと述べ、デューイの主張を訂正している。そして、今年度の教育学部の施設・設備費は1,000ドルだが、「貴見が必要とする4,000ドルのため3,000ドル追加し、できるだけ早いうちにその資金を確保できるようにします」と述べている²¹⁹。つまり、ハーパー学長は、シカゴ学院との契約による50,000ドルは既に使い切っているので、今年度の教育学部の施設・設備費は1,000ドルしかないが、3,000ドルは学長自身が何とか工面してデューイの要求額に応えるようにしたいと述べているのである。

これを受けてデューイは1903年10月10日付で教育学部主幹のジャックマンに手紙を書き、学長が言っている3,000ドルの支出、つまりシカゴ学院理事会との契約による50,000ドルの施設・設備の基金から教育学部の1年目と2年目に使われたとされる3,000ドルの支出について、その詳細を知らせるように求めている²²⁰。

続いて1903年10月14日付のハーパー学長宛の手紙でデューイは、施設・設備費6,000ドルのうち5,000ドルの支出は進めてよいと先に学長から指示を受けたことを確認したうえで、(a)教育学部、(b)手工学校、(c)科学設備・装置の3項目にしたがって支出するよう手配したと報告している。また、ブレイン・ホールの地下室を体育館として使うため、改築費が理事会の特別な計らいで施設・設備

費の基金から支出されることが認められたと報告している²²¹。

1ヵ月後の1903年11月11日付のハーパー学長宛の手紙でデューイは、施設・設備費69,000ドルに対して発注済62,897.65ドル、残高6,102.65ドルと報告している²²²。これに関連して彼は前々日の11月9日付でジャックマンに施設・設備費のことで問い合わせの手紙を出している²²³。

1903年11月14日付ハーパー学長宛の手紙でデューイは補正予算について問い合わせしている²²⁴。そして、学長から次の理事会で検討するという返事をもらった後²²⁵、11月18日付のハーパー学長宛の手紙で「教育学部の設備費の問題はどうなりますか」と尋ねている。そして、自分の手元の記録では、1901-1903年度までに購入した耐久設備1,354.74ドル、今年度9月30日までの発注4,2226.06ドル、合計43,580.80ドル、そして現在発注しているもの約4,000ドルであり、学長が「ずっと以前に使えそうだとした2,700ドル」は、旧シカゴ学院理事会との契約にある50,000ドルの施設・設備費の基金でまかなえるだろうから、今すぐにそれを使っていいかと問い合わせている。ここでデューイが今年度9月30日までの発注4,2226.06ドルと記している数字は、先に彼が10月5日付ハーパー学長宛の手紙で記した数字と同じであり、1901-1903年度までに購入した耐久設備1,354.74ドルと記している数字は、10月5日付のハーパー学長からの返事の手紙にあった教育学部の1年目と2年目の設備に3,000ドル使ったという数字とは異なっている。おそらく、デューイは10月10日付でジャックマンに問い合わせ確認した数字を示しているであろう。そのうえで新たに2,700ドルの追加支出を求めている。具体的には、ブレイン・ホールの塔の屋根についてジャックマンから要求が出ているので、それに充てたいということらしい²²⁶。

ブレイン・ホールの部屋配置

完成したブレイン・ホールは地上4階、地下1階で、シカゴ大学の建物としてはそれまでで最大のものとなった。建設費は32万5千ドルで、旧シカゴ学院からシカゴ大学に譲渡されたブレイン夫人の寄付金100万ドルの一部を使って建設された。

建物は石造りで、東西にウイングの部分をもっている。手工棟はブレイン・ホールより北側奥に建てられ、将来的には建物全体で中庭(スキヤモン・コートと呼ばれた)を広く取り囲むようになる。ブレイン・ホールの建物正面の東西幅は350フィート(約1,067メートル)、東西のウイング部分の南北幅は162フィート(約494メートル)、地上4階、地下1階でエレベーターもついていた。

221 John Dewey to William Rainey Harper, October 14, 1903,

222 John Dewey to William Rainey Harper, November 11, 1903,

223 John Dewey to Wilbur S. Jackman, November 9, 1903,

224 John Dewey to William Rainey Harper, November 14, 1903,

225 William Rainey Harper to John Dewey, November 17, 1903,

226 John Dewey to William Rainey Harper, November 18, 1903,

218 John Dewey to William Rainey Harper, October 5, 1903,

219 William Rainey Harper to John Dewey, October 9, 1904,

220 John Dewey to Wilbur S. Jackman, October 10, 1903,



ブレイン・ホール (正面から)

正面中央のホールから西側は主として教員養成部 (College of Education) に割り当てられ、東側の1階と2階に附属小学校が入った²²⁷。デューイの実験学校も、旧シカゴ学院の附属小学校とともにここに移転したわけである。

図1、図2、図3、図4は、『大学報』1902年5月号に掲載されたブレイン・ホールのそれぞれ1階、2階、3階、4階部分の計画図である²²⁸。『大学報』1902年5月号に掲載されているブレイン・ホールの説明によれば、当初、附属小学校は建物東側の1階から3階までを使用することになっていて、1階に幼稚園と第1学年、第2学年、2階に第3学年と第4学年と第5学年、3階に第6学年と第7学年と第8学年が入ることになっていた (ただし、計画図にある部屋の配置では1階に幼稚園と第1学年から第3学年までが入り、2階に第4学年から第6学年が入り、3階に第7学年と第8学年が入ることになっている)。それぞれの教室にはグループ活動 (group-work) をおこなうための小部屋が付いている。また、生徒たちが手労働 (hand-work) をおこなう部屋を通常の教室のなるべく近くに配置するため、東ウイング1階北端の幼稚園と南端の第3学年の教室との間に粘土造形室を置き、その真上の2階に手工室 (manual training room) を、幼稚園の真上の2階に遊戯室を配置している。また、東ウイングの地階に鑄造・窯業室 (casting and kiln room) を設け、東ウイングの3階には初等用と上級用 (ハイスクールと教員養成部が使う) の2つのキッチンが設けられ、4階東ウイングには染色室、織物作業室、金工室が設けられることになっていた²²⁹。

ところが、実際には附属小学校は建物東側の1階と2階に入るようになった。ブレイン・ホール完成間近の頃に記された1902-1903年度『年次報告』に掲載されているブレイン・ホールの説明によ

227 *Annual Register, 1902-1903*, The University of Chicago (Chicago: The University of Chicago Press, 1903), p. 131.

228 *University Record*, The University of Chicago, vol. 7, no. 1, May 1902 (Chicago: The University of Chicago Press, 1902) pp. 2, 4, 6, 8. ちなみに、『大学報』のこの号は教育学部特集号となっている。

229 *Ibid.*, pp. 1, 3.

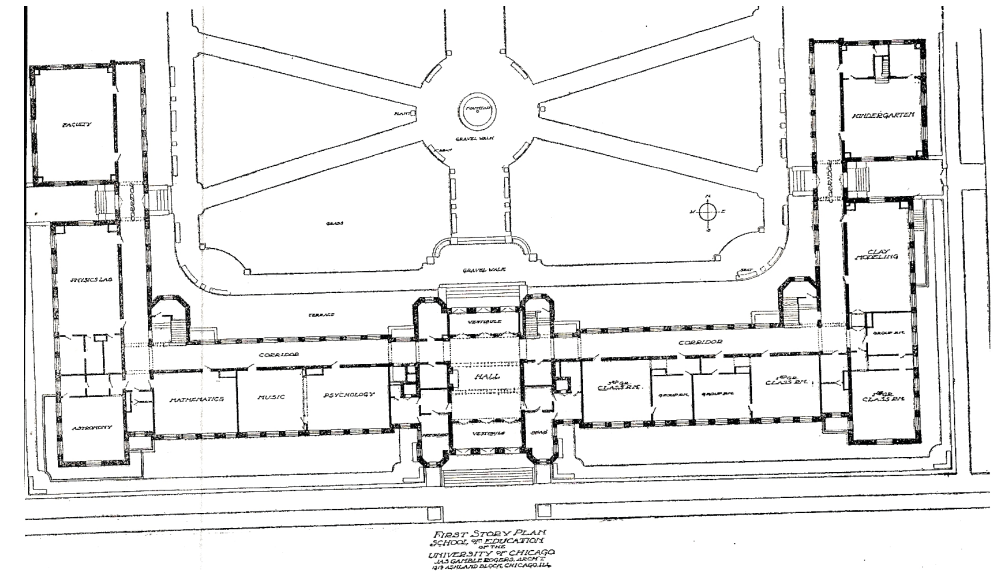


図1 ブレイン・ホール1階・計画図

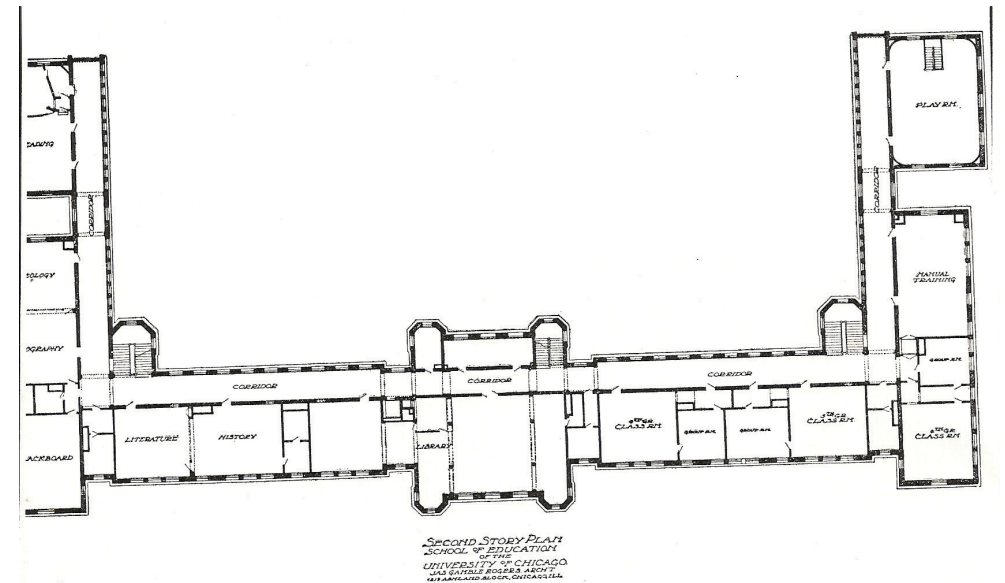


図2 ブレイン・ホール2階・計画図

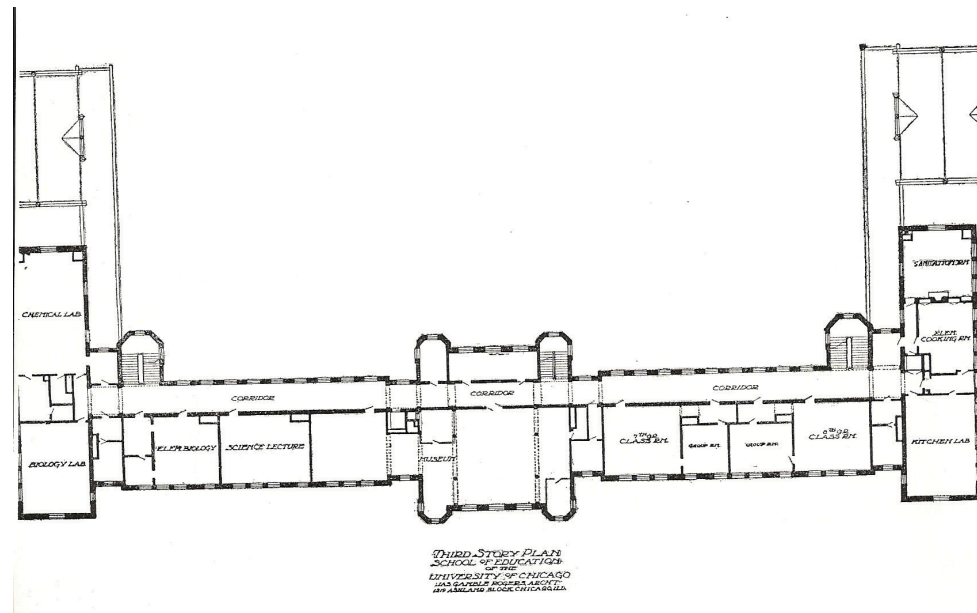


図3 ブレイン・ホール3階・計画図

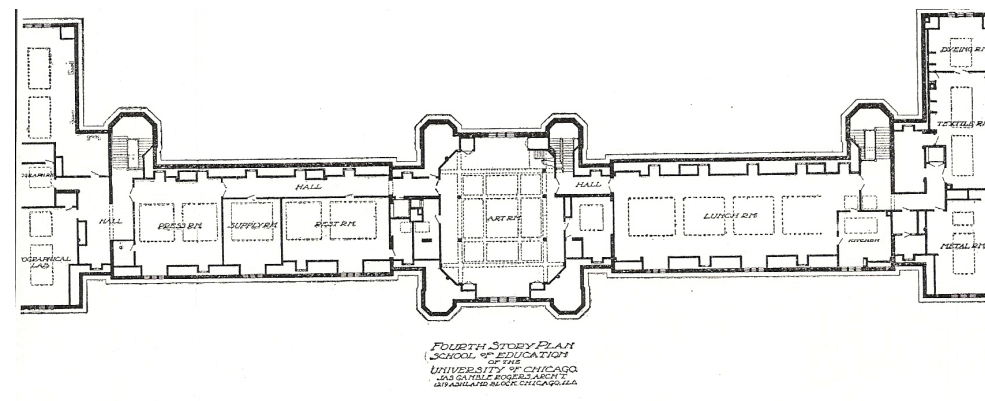


図4 ブレイン・ホール4階・計画図

れば、1階には幼稚園と第1学年から第4学年が入り、当初予定されていた粘土造形室はなくなっている。2階には第5学年から第8学年が入り、東ウイングの幼稚園の真上の遊戯室はそのまま配されているが、当初予定されていた手工室はなくなっている。そして、3階には当初の小学校の教室（第7学年と第8学年）に代えて心理学の部屋が3つ配された。東ウイング地階の鑄造・窯業室と東ウイング3階の2つのキッチン、それに東ウイング4階の染色室、織物作業室、金工室はそのままである²³⁰。要するに、附属小学校から粘土造形室と手工室がなくなり、代わりに3つの心理学室が作られたということである。おそらく、附属小学校の粘土造形室と手工室は手工棟にできるその種の部屋との重複を避けることにし、その代わりに教員養成部の心理学を充実させることにしたのであろう。



料理の授業 (1905年)



鍛冶の作業 (1904年)

230 *Annual Register, 1902-1903*, The University of Chicago (Chicago: The University of Chicago Press, 1903), p. 131.

教員養成部の部屋配置については、『大学報』1902年5月号の説明とブレイン・ホール完成間近の頃に記された1902-1903年度『年次記録』の説明に大きな変化はない²³¹。建物西側1階には数学と天文学の講義室が入り、西ウイング1階には大きな物理実験室が配されている。物理実験室は初等部の生徒と教員養成部の学生の両方が利用することになっている。なお、『大学報』1902年5月号の説明では西ウイング1階北端の部屋は教員会議室になっているが、1902-1903年度『年次記録』の説明にはその記載はない。

2階中央、すなわち1階ホールの真上に図書室が置かれ、そこから西側に歴史学、文学、地理学、地学の各部屋が続き、西ウイングの北端は会話・音読・演劇の部屋になっている。

3階中央は博物室で、その西側に初等用と上級用の2つの生物室があり、西ウイング3階に化学室があり、そこには重量測定室と写真室も付設されている。

4階中央は芸術室で、天井から採光できるようになっている。それに続く4階西側は木工²³²、製本、印刷などの作業に使う部屋となり、それに続いて西ウイング4階に音楽室がある。ただし、『大学報』1902年5月号の説明によれば当初ここは地理実験室となっていて²³³、音楽室は図1を見ると西側1階に取られている。建物西側の部屋配置についてはこの点だけが変更されたようである。



羊毛の染色 (1905年)

231 *University Record*, vol. 7, no. 1, May 1902, pp. 1, 3; *Annual Register*, 1902-1903, p. 131.

232 *University Record*, vol. 7, no. 1, May 1902, p. 3 では「金工」となっているが、*Annual Register*, 1902-1903, p. 131 では「木工」に修正されている。

233 *University Record*, vol. 7, no. 1, May 1902, p. 3.



学習室 (1906年)

部屋利用についてのジャックマンの提案

1903年10月6日付のデューイ宛の手紙で、教育学部主幹のジャックマンは建物の出入口について、東口を附属小学校が使い、西口を附属ハイスクールが使い、中央口は教員養成部が使うというように割り振って、1階中央ロビーの混雑を避けるようにすべきだと提言している²³⁴。これにはデューイも賛成し、附属ハイスクール主幹のオーウェンおよび手工学校主幹のベルフィールドとただちに協議すると同日に返事をしている²³⁵。そして、10月8日付で協議の結果をジャックマンに知らせ、両主幹とも附属ハイスクール生が西口を使うことに同意し、附属ハイスクールの会報編集室 (Bulletin Board) をジャックマンが提案したように西口近くに配置し、附属ハイスクール生のロッカーも建物の西側に移すことにしたと伝えている。そして、こうすれば附属ハイスクール生は自然に西口を使うようになるだろうから「附属ハイスクール生に中央口の使用を禁止する命令を出して恨みを買う危険を冒さなくてすむだろう」と説明している²³⁶。

このデューイの言葉に示されているように、もともとジャックマンの提案は、附属ハイスクール生が引き起こす「騒音や無秩序、勝手な集会」²³⁷への対応策という意味があったらしい。先の10月6日付のジャックマン宛の返事でデューイは「附属小学校については問題なさそうだ」と記している

234 Wilbur S. Jackman to John Dewey, October 6, 1903, JDP 3/14, ICarbS (01764).

235 John Dewey to Wilbur S. Jackman, October 6, 1903, JDP 3/14, ICarbS (01765).

236 John Dewey to Wilbur S. Jackman, October 8, 1903, JDP 3/14, ICarbS (01766).

237 Ibid.

ことから²³⁸、どうやらブレイン・ホール入居直後、主として附属ハイスクール生に向けた建物内での規律の確保が課題になっていたようである。

ジャックマンは10月8日付のデューイ宛の手紙で、附属ハイスクール生がジャックマンのオフィスにある公衆電話の使用を口実にオフィスにたむろし、「さながら私のオフィスはハイスクール生の集会場のようになりつつある。公衆電話の使用は、基本的には当校の事務職員と教員に限定すべきである。そのような措置が取られなければ、公衆電話はフットボールその他のいくぶん礼儀の疑われる雑談のやりとりに使われることになってしまうだろう」と訴えている²³⁹。これに対して、デューイは「貴兄の提案はすばらしい」と答え、附属ハイスクールのオーウェンとベルフィールドの二人の主幹に、生徒用の公衆電話を1台用意するよう求めると述べている²⁴⁰。

ジャックマンは10月8日付のもう一つ別のデューイ宛の手紙で、ジャックマンが303号室でおこなっている科学の授業を309号室の大生物学実験室でおこなうことにし、303号室でハイスクールの授業おこなうようにして、デューイのオフィスのすぐ西隣の部屋(105号室)を書店(book store)としてミラー(Newman Miller)に貸し与え、交換条件としてミラーに学内便(Faculty Exchange)の世話をさせるようにしたらどうかと提案している。その理由として、ジャックマンは、ミラーが105号室を書店として使うには大きすぎると言っているので、この際「時々刻々必要性が高まっている学内便と案内係(Bureau of Information)と郵便」の諸機能をそこに置くようにしたら「当校の運営はもっと円滑になると思う」と述べている²⁴¹。実は、「案内係」と「学内便」と「郵便」の機能はジャックマンが主管として使っている部屋に置かれていて、そのため主管室が教職員の休憩室兼談話室のようになって、主管室本来の業務に支障が出ていると彼はデューイに不満を述べている²⁴²。

この提案に対してデューイは、ジャックマンの科学の授業を309号室に移すことに感謝しながらも、105号室の利用形態はしばらく保留したいとし、現在備品室として使っている103号室に一時的に案内係と学内便を置くことにしたいと答えている²⁴³。デューイが105号室の利用形態を保留にしたのは、105号室は書店として使用するよりも教室として使用するほうが必要度が高いというメイヤーズ(Ira Benton Meyers)の指摘によるものと思われる²⁴⁴。

238 John Dewey to Wilbur S. Jackman, October 6, 1903, JDP 3/14, ICarbS (01765).

239 Wilbur S. Jackman to John Dewey, October 8, 1903, JDP 3/14, ICarbS (01769).

240 John Dewey to Wilbur S. Jackman, October 8, 1903, JDP 3/14, ICarbS (01766).

241 Wilbur S. Jackman to John Dewey, October 8, 1903, JDP 3/14, ICarbS (01770).

242 Wilbur S. Jackman to John Dewey, October 14, 1903,

243 John Dewey to Wilbur S. Jackman, October 10, 1903, JDP 3/14, ICarbS (01778); John Dewey to Wilbur S. Jackman, October 8, 1903, JDP 3/14, ICarbS (01776).

244 Meyers to John Dewey, October 8(?), 1903, JDP 3/14, ICarbS. ミラーはシカゴ大学出版局の局長(Director)、メイヤーズは教育学部の博物室主事(Curator)兼理科教育指導員(Instructor of Teaching of Natural Science)である。

グラウンドの整備

デューイの実験学校はブレイン・ホール完成後、旧シカゴ学院の附属小学校と統合され、校長にはデューイ夫人(Alice Chipman Dewey)が就任した。デューイ夫人は1903年10月9日付で、実験学校の父母会の有力メンバーで、実験学校を当初からして支援してきたクレーン夫人(Cornelia S. Crane)に手紙を書き、新しい附属小学校のためにグラウンド整備を進める計画を以下のように説明している²⁴⁵。

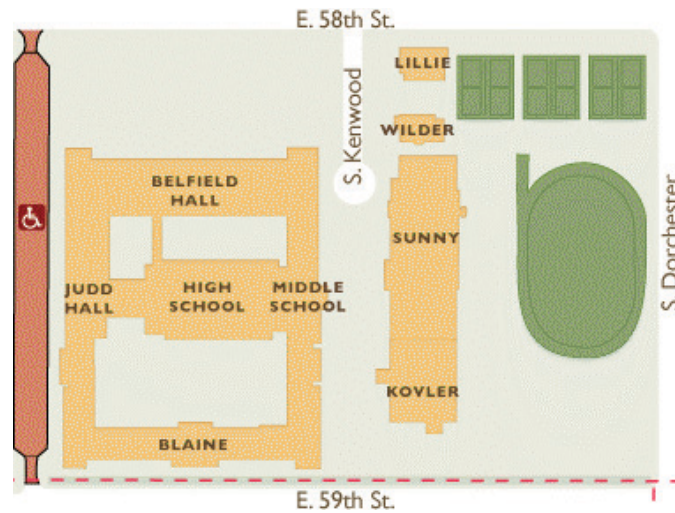
ブレイン・ホールの東側のマディソン街(Madison Avenue: 現 Kenwood Avenue)とモンロー街(Monroe Avenue: 現 Dorchester Avenue)の間にあるワン・ブロックの土地を、ハイスクールの女子と附属小学校が共同で使うようにし、リリー宅²⁴⁶の裏手をハイスクールの女子用とする。そこはテニスコート、ホッケーコート、球技場に適しており、体育の屋外授業を十分におこなえる。そして、モンロー街からマディソン街までのブロックと、ブレイン・ホールの角の東側は、附属小学校用に確保する。ブロックの東部分は少年用の野球場兼フットボール場に、余裕があれば女子用の野球場と附属小学校用のテニスコートとホッケーコートを作る。スキヤモン夫人の古いガーデン²⁴⁷を利用できれば、グラウンドにガーデン用地を作る必要はない。ブレイン・ホールに最も近い部分は最年少児童がさまざまな屋外の仕事(out-of-doors occupations)をやる場所に、そこに「日本の小学校にあるようなミニチュアの庭園」を造り、小さな水流、橋、おもちゃの建物などを配するようにすれば「これまでに私たちが[実験学校で]やってきたことを越える価値をもつことになるだろう。」さらに、ここに「原始的な形をしたシェルター」を造ったり、簡単な家屋を作ったりすれば、従来屋内でしかやれなかったミニチュアの家作りや町作りの活動を大規模に屋外でやることができる。

これまで実験学校は一般の住宅を借りて校舎にできていたので、デューイ夫人としてはこの際、広いグラウンドを利用して、屋外での体育・スポーツ活動や園芸活動、年少児童による屋外の仕事(オキュペーション)を思う存分できるようにしたいと考えていたことがわかる。

245 Alice Chipman Dewey to Cornelia S. Crane, October 9, 1903, JDP 3/14, ICarbS. コーネリア・クレーンは

246 リリー宅とは、シカゴ大学動物学教授のフランク・リリー(Frank Rattray Lillie)とその妻フランシス・リリー(Frances Crane Lillie)の住まいである。リリー夫人は実験学校の父母会の有力メンバーの一人である。

247 ブレイン・ホールが建っている土地は、銀行家でシカゴ大学の理事も務めていたジョン・ヤング・スキヤモン(John Young Scammon)が所有していた土地で、スキヤモン氏の死後、未亡人がこの土地をスキヤモン・コートと呼ぶことを条件に、シカゴ大学に寄贈した土地であった。



現在のシカゴ大学実験学校 (Laboratory Schools) の配置図



砂山を掘る幼稚園児たち (1904年)

1903年10月24日付のハーバー学長宛の手紙で、デューイは「スキャモン・ハウスが貸し出されるときには、グラウンドの東半分つまりモンロー街側は教育学部のために残す」ことを要望している²⁴⁸。おそらく、デューイ夫人のグラウンド計画に沿った要望であろう。ちなみに、スキャモン・ハウスとは先のデューイ夫人の手紙にあったリリー宅のことだと思われる。

248 John Dewey to William Rainey Harper, October 24, 1903, Presidents' Papers, 1889-1925, 30/25, ICU.



現在のリリー・ハウス (Kenwood Avenue から見る)

1903年10月30日付のハーバー学長宛の手紙で、デューイはグラウンドの利用計画について、教育学部の教員会議が選任する委員会に付託することになったと報告している。そして、この問題ではリリー夫人やクレーン夫人など、旧実験学校の父母たちが大きな関心を寄せていると述べ、特にクレーン夫人は附属小学校の屋外活動を支援するために100ドルの寄付を申し出ており、他にも同様の支援者はいるはずだと述べている²⁴⁹。

ハーバー学長は1903年11月3日付でデューイに返事を出し、グラウンドの整備計画を早期に決めることと、なるべく大学の出費が少なくすむことを求めている²⁵⁰。

これに対してデューイは、11月4日付で「大学に多大な出費をかけないでグラウンド問題を処理することができると思っている」と答えている。つまり、父母からの寄付金でいくらかまかなえるということであろう。そして、今最も重要なことは資金の工面ができるかどうかよりも、「一定の教育方針が実行できるかどうか」にあると述べている²⁵¹。つまり、デューイも夫人と同様、グラウンド整備の問題は教育学部が取り組む初等中等教育の基本原理に関わる問題だと理解しているのである。

1903年12月8日付のハーバー学長宛の手紙で、デューイはグラウンド利用計画に関する前述の委員会の方針について概要のレポートを送っている。そして、過去にロックフェラー氏からグラウンド整備に特別資金が提供されているが、次年度にもそうした特別資金が提供されるときには、教育学部のグラウンドについても考慮したいと申し入れている²⁵²。

ハーバー学長は、1903年12月15日付でデューイに返事を出し、12月8日付でデューイが学長に送ったグラウンド利用計画に関するレポートについて、できるだけ早期に大学本部の建物・グラウ

249 John Dewey to William Rainey Harper, October 30, 1903, JDP 3/15, ICarbS.

250 William Rainey Harper to John Dewey, November 3, 1903,

251 John Dewey to William Rainey Harper, November 4, 1903,

252 John Dewey to William Rainey Harper, December 8, 1903,

ンド委員会で検討することにしたいと答えている²⁵³。

4. 教員養成課程の諸問題

ブレイン・ホールへの移転を契機に、教育学部は1903-1904年度から、それまでのジュニア・カレッジ相当の初等教員養成機関からシニア・カレッジ相当の初等・中等教員養成機関へと体制を大きく変えることになった²⁵⁴。それに関連して、教員養成課程の実施をめぐるいくつかの問題が生じ、デューイとジャックマンの間で協議がおこなわれている。

実技科目 (arts) の履修について

1903年10月6日付のデューイ宛の手紙でジャックマンは、全科コースA (General Course A) の必修になっている実技科目(Arts)の受講登録を受けつけた際、全科コースB (General Course B) と芸術・技術コース (Courses of Arts and Technology) の学生から全科コースAと共通に実技科目を受講したいという希望が出されているが、どう対応したらよいかと相談している²⁵⁵。

ここにある全科コースAは前年度までのジュニア・カレッジ相当の初等教員養成コースであり、1903-1904年をもって廃止されることになっている。全科コースBは1903-1904年度から新設されたシニア・カレッジ相当の初等教員養成コースであり、芸術・技術コースは芸術および技術関係の専科の教員養成コースである。全科コースAでは実技科目をnon-creditで、つまり単位とは無関係に必修で受講することになっていて、他方、新たに発足した全科コースBでは実技科目を3単位 (3 Majors) 履修することになっている²⁵⁶。ジャックマンは、この全科コースBと芸術・技術コースにおける実技科目の履修を全科コースAのnon-creditの実技科目の履修と一緒にしてよいのかと尋ねているのである。

これに対して、デューイは10月6日付のジャックマン宛の手紙で、全科コースBと芸術・技術コースにおける実技科目は、全科コースAのようにnon-creditの追加科目 (extras) とはしないで、正規の単位科目 (Majors) とすることになったはずで、これにより同じ初等教員養成課程である全科コースAと全科コースBとの違いをなくす一歩になると自分は考えていると答えている。そのうえで、ジャックマンの問合せの趣旨がよくわからないので、もう少し詳しく話してくれるよう求めて

253 William Rainey Harper to John Dewey, December 15, 1903,

254 拙稿「シカゴ大学時代のジョン・デューイの書簡について(5)——シカゴ大学教育学部の組織改革をめぐって：1902～1903年——」『鹿児島大学教育学部研究紀要—教育科学編—』第58巻, 2007年3月, pp. 64-66, 参照.

255 Wilbur S. Jackman to John Dewey, October 6, 1903, JDP 3/14, ICarbS (01764) p. 2.

256 具体的には、全科コースAでは正規の18 Majorsの履修に加えて、「デッサン、絵画、塑像、手工、体育、音楽が週6時間以上」課されることになっている。全科コースBでは、ジュニア・カレッジ相当の18 Majorsの中で「芸術1 Major」が、シニア・カレッジ相当の18 Majorsの中で「芸術2 Majors」が要求されている。*The Annual Register, July 1902-July 1903*, The University of Chicago (Chicago: The University of Chicago Press, 1903), pp. 136, 137.

いる²⁵⁷。どうやら、デューイはジャックマンの問合せの趣旨が理解できなかったようである。

その後ジャックマンは、10月8日付のデューイ宛の手紙の中で、「コースBの学生に実技科目のいずれについても受講を認めるという貴兄の見解は了解しました」と述べている²⁵⁸。どうやら二人の間で、全科コースBと芸術・技術コースの学生の3単位分の実技科目の履修については、全科コースAのnon-creditの実技科目を自由に履修させることで話し合いがついたようである。

ところが、毎学期学生に配布する授業案内 (quarterly announcement) では、実技科目は卒業単位外のnon-creditの科目ではなく、majorsつまり卒業単位としてカウントする科目として記されていた。そのためジャックマンは実技科目の授業担当教員たちに訂正を求め、non-credit科目としても扱われることになったらしい²⁵⁹。授業案内の記載の誤りについて、デューイはジャックマンに問いただしている。そして、実技科目の授業担当教員が全科コースAの学生たちのためにnon-creditの授業を開設するのは彼らの義務であり、そのように彼らを監督・指導するのは主管の務めではないかとジャックマンの責任を指摘している²⁶⁰。ジャックマンにしてみれば、またいつものように些細なことで仕事上の落ち度を指摘されたという気持ちであったろう。

その後デューイは1903年11月20日付のジャックマン宛の手紙で、冬学期 (Winter Quarter) のプログラムではnon-creditの実技科目とcreditの実技科目とを明確に区別するようになっているかどうか確認している。そして、冬学期からはnon-creditの実技科目を履修してもcreditは取得できなくなることを確認している²⁶¹。

ピアノの授業の開設

デューイは1903年の春学期 (spring quarter) に、音楽の教員養成を整備するため、ハーパー学長にピアノの個人レッスンの授業を開設することを申し入れた。この時点では、教育学部にはジュニア・カレッジに相当する2年制の初等教員養成課程のうえに設置された特科コース (Special Courses) があり、このコースで音楽を専攻する者のためにピアノの授業が必要だと申し入れたわけである。そのときはピアノの講師を雇う費用がないことと、専用の部屋がないという理由でピアノの授業は開設できなかった²⁶²。

しかし、ブレイン・ホールに音楽室が完成し、1903-1904年度から特科コースが廃止されて、新たにシニア・カレッジ段階に相当する芸術・技術コースが開設され、その中に音楽の専科コースが設けられたため、再びピアノの授業の開設が課題となった。デューイは、教育学部で声楽と作曲を

257 John Dewey to Wilbur S. Jackman, October 6, JDP 3/14, ICarbS (01765) p. 2.

258 Wilbur S. Jackman to John Dewey, October 8, 1903, JDP 3/14, ICarbS (01769), p. 2.

259 Wilbur S. Jackman to John Dewey, October 14, JDP 3/14, ICarbS, p. 2.

260 John Dewey to Wilbur S. Jackman, October 12, 1903, JDP 3/14, ICarbS (01782); John Dewey to Wilbur S. Jackman, October 15, 1903, JDP 3/15, ICarbS, p. 2.

261 John Dewey to Wilbur S. Jackman, November 20, 1903, JDP 4/1, ICarbS

262 John Dewey to William Rainey Harper, October 14, 1903, JDP 3/14, ICarbS (01785).

担当していたエレノア・スミス (Eleanor Smith) の推薦で、ガートルード・スミス (Gertrude Smith) をピアノの個人レッスンの講師に雇いたいとハーパー学長に申し入れた²⁶³。そして、講師を雇い入れる費用については、受講する学生一人当たり1学期 (1 quarter) 10ドルが支払われることで同意された。上記のエレノア・スミスによれば、これはほとんど個人レッスンの時間に見合わない額だけれども、ガートルード・スミスはピアノの授業の立ち上げのためにこの額を受け入れてくれたということである²⁶⁴。

中等教員養成ドイツ語教員コース

1903-1904年度からはシニア・カレッジ相当の中等教員養成コースも発足した。このコースは正式には「中等学校教員および師範学校教員志望者向けコース」(Courses Preparatory to Teaching in Secondary and Normal School) と称しており、ハイスクールやアカデミーなどの中等学校教員とともに師範学校教員の養成もおこなうことになっている。

デューイは1903年10月11日付のハーパー学長宛の手紙で、大学のドイツ語学科がドイツ語教員養成の科目をドイツ語学科に開設するだけでなく、教育学部のほうでも科目開設をすることを求めていると述べ、教育学部としてはそれに取り組むことを伝えている。そして、ドイツ語学科の負担軽減と、少なくとも講師一人を節約することに役立つだろうと述べている²⁶⁵。従来、シカゴ大学では中等教員養成のための科目は各専門学科 (Departments) で開設され、教育実習とそれに関連した教職科目をデューイの教育学科が担当していた。しかし、1903-1904年度以降、教育学部に中等教員コースが開設されたため、おそらくは、各専門学科で開設されていた中等教員養成向けの科目の一部を教育学部が担当することになったものと思われる。同じ手紙でデューイは、「中等教員養成の諸コースは宣伝期間が短かったにもかかわらず、以前の初等教員の諸コースのいくつかよりも需要が大きい」と報告している。ここで彼が「以前の初等教員の諸コースのいくつか」と言っているのは、おそらくは初等教員養成の特科コースの中のいくつかの専科コースのことであろう²⁶⁶。

1903年10月19日付のジャックマン宛の手紙で、デューイは次の冬学期と春学期に開設する新科目に関連して、特にドイツ語の諸科目を多数のカレッジ学生が取りに来ることをドイツ語学科のほうから知らせたことと伝えている。そして、教育学部で開設するドイツ語関係の科目とカレッジの方のドイツ語の科目とが重ならないよう時間割の調整をする必要があるとジャックマンに指示している²⁶⁷。

263 Ibid.

264 Eleanor Smith to John Dewey, October 11, 1903, JDP 3/14, ICarbS.

265 John Dewey to William Rainey Harper, October 9, 1903, Presidents' Papers, 1889-1925, 30/25, ICU, p. 1.

266 Ibid.

267 John Dewey to Wilbur S. Jackman, October 19, 1903, JDO 3/15 (01799).

『授業案内』の記載をめぐるデューイとジャックマンの確執

教育学部の学生に配布する秋学期 (Autumn Quarter) の『授業案内』(Announcement) には、細かな記載上の誤りが多数あったらしい。ブレイン・ホールへの入居とともに教育学部の組織体制が変わり、教員養成課程の履修方法も前年度から大きく変わったため、幾多の混乱が生じたようである。『授業案内』の編集にあたって事務的なミスが生じたのはある面でやむをえないことではあったが、デューイは細かな記載の誤りについて編集責任者のジャックマンを徹底的に糾す態度に出ている。教育学部の運営をめぐるデューイとジャックマンの確執が依然としてぬきさしならないものであったことがうかがわれる。

デューイは、野外実習 (excursion work) の時間割について理科教育講師のアイラ・メイヤーズから異議が申し出されたことを受けて、1903年10月12日付のジャックマン宛の手紙で、各授業の時間割を決める際、担当教員から意見をきちんと聞いておこなっているのか等々を問いただしている。そして、先述の技芸諸科目の記載の誤りをはじめとして、「秋学期の『授業案内』の改訂版に多数の誤りを見つけた」と指摘し、今後印刷物の草稿の点検を学部長の自分に依頼する際には、少なくとも24時間の検討時間をもてるように、時間の余裕をもって提出するようにと要望している²⁶⁸。時間の余裕がなくて草稿を十分点検できなかったのはジャックマンのせいだと言っているのである。

これに対して、ジャックマンはデューイ宛に10月14日付で返事の手紙を出し、次のように説明している。(1)今年度の授業時間割については昨年度のプログラム委員会が準備したが、とくにライス嬢 (Miss Rice) が中心になって各教員の希望を聞き、できる限り希望に沿う形で全体を調整した。来学期の授業時間割作成においては、受講登録直前まで最終の変更をおこなえるようにしたい。(2)記載に多数の誤りが生じたことについて、各教員から原稿が送られてくるのが遅れたため、ジャックマン自身がチェックできず、オフィスの職員が誤りを見逃したためである。ただし、上述の10月12日付の手紙でデューイが科目番号19の授業担当者であるヤング夫人の名前が欠落していると指摘した点について、ジャックマンはヤング夫人自身が提出した原稿にもともと名前が欠落していたことを指摘しながら、それでもこちらの不注意だったと弁明している。(3)先述のように技芸諸科目が non-creditではなく majorsと記載されたことについて、ジャックマンは既に担当教員たちに訂正を求め、同意を得ていると答えている²⁶⁹。

以上のジャックマンの説明に対して、デューイは10月15日付で細かな点の指摘をさらに追加している。(1)野外実習の時間が授業担当者のアイラ・メイヤーズの了解なしに変更された。(2)時間割の変更を受講登録直前まで可能にするのは好ましくない。受講登録前の5~10日間に期間を定め、それ以後は時間割変更ができないようにすべきだ。(3)ヤング夫人の件は了解した。しかし、ジャックマンがデューイのオフィスに校正ゲラをもってきたとき、ヤング夫人の名前が欠落していることについては指摘したはずだ。(4)技芸諸科目が non-creditではなく majorsと記載されたことはジャック

268 John Dewey to Wilbur S. Jackman, October 12, 1903, JDP 3/14, ICarbS (01782)

269 Wilbur S. Jackman to John Dewey, October 14, 1903, JDP 3/14, ICarbS, pp. 1-3.

マンの監督・指導の責任だ。そして、技芸諸科目が週2時間の授業だとすれば、それは1メジャー (a Major) どころか半メジャー (half Major) にすらなりえず、ゼロとすべきだ²⁷⁰。

これに対して、ジャックマンは10月16日付でデューイに反論の手紙を出している。(1)野外実習の時間割に関しては、事前にアイラ・メイヤーズと協議して決めたことであり、彼がそれに不満があるのなら彼は委員会なりジャックマンのところに申し出るべきであり、学部長のデューイに訴え、それをデューイ自身が受け入れるというのは納得できない。(2)ヤング夫人の名前の欠落についてデューイから直接口頭で指摘を受けたという記憶はまったくない。(3)技芸諸科目の「2時間」というのは毎日2時間ということで、これは大学の“a Major”に相当する。デューイの理解は間違っている²⁷¹。

『授業案内』をめぐるデューイとジャックマンの手紙のやりとりはここまでだが、一連のやりとりを見るかぎり、デューイはジャックマンに対してやや攻撃的であるのに対して、ジャックマンは最初はできるだけ冷静に対応しようと努めている。しかし、最後には彼もデューイに対して少し感情的になっている。上記の10月16日付のジャックマンの手紙では、『授業案内』の誤記についてのデューイの指摘に対して、デューイの指摘自体の中にいくつか科目番号の誤記があることを丁寧に指摘している。そうしたミスはだれにでもあることだと言わんばかりである。些細な誤記についてデューイがジャックマンの責任を追及するような言い方をしてくることにに対して、ジャックマンはおそらく相当閉口したことであろう。

『教育学部履修案内』の記載をめぐるデューイとジャックマンの確執

デューイは、1903年10月16日付のジャックマン宛の手紙で、『教育学部便覧』(College of Education Course Book)に多くの不備があることを指摘し、冊子自体の価値を損ねていると述べている²⁷²。この手紙のコピーは1903年5月21日に任命された『便覧』の編集委員会のメンバーとハーバー学長にも送られている²⁷³。不備の指摘は全部で13点にわたっている。その多くは技術的な改善を求めるものであるが、いくつかは学生の履修方法や入学要件に関する基本的な理解に関わるものであり、デューイとしては見逃すことができない問題点であった。それらは以下のようなものである。

(1)全科コースBのカリキュラムを「シニア・カレッジ・カリキュラム」と説明することは公式に認められていない。全科コースAのカリキュラムを「ジュニア・カレッジ・カリキュラム」と説明することも同様だ。全科コースBの履修にあたって、18 Majorsの“college credits”を修得済みであることと記されているが、この場合“college credits”の用語は不適切である。なぜなら、師範学

270 John Dewey to Wilbur S. Jackman, October 15, 1903, JDP 3/15, ICarbS, pp. 1-3.

271 Wilbur S. Jackman to John Dewey, October 16, 1903, JDP 3/15, ICarbS, pp. 1-4.

272 John Dewey to Wilbur S. Jackman, October 16, 1903, JDP 3/15, ICarbS, pp. 1-3.

273 John Dewey to William Rainey Harper, October 16, 1903, Presidents' Papers, 1889-1925, 30/25.

校卒で全科コースBに入学してくる学生は、ジュニア・カレッジで“college credits”をあらためて取得する必要があると誤解してしまうからである。

(2)芸術・技術コースの入学要件の説明が教育学部教授会が定めた公式見解 (official statement) と一致していない。この公式見解では入学要件は授業担当者からなる委員会で定めることになっていて、委員会は入学要件を大学の『入学案内』(Bulletin of Information)に明記しているのは事実だが、それはもとの教育学部教授会の公式見解に反する内容になっている。

(3)さらに、芸術・技術コースの入学要件の説明に関して、『便覧』では「4年制課程 (Four Years' course) は大学の入学要件を満たさなければならない」という説明になっているが、『入学案内』では全科コースの入学要件と実質同等のものを提出することとなっている。両者の間には決定的な違いがあり、後者の規定では入学できる者でも前者の規定では入学できなくなってしまう²⁷⁴。

さらに、デューイは10月21日付のジャックマン宛の手紙で、『便覧』では全科コースAの学生たちが履修する技芸諸科目と教育実習の記録の扱いについて何も説明がないと指摘している。そして、そもそも『便覧』を発行することになったのは、こうした説明が必要になったからではなかったかと、ジャックマンを問いただしている²⁷⁵。

これに対して同日 (10月21日) ジャックマンは、デューイの上の指摘は「重大な誤り」なので別刷りでプリントを用意すると返事している。そして、10月16日付でデューイが指摘した諸点について、批判は甘んじて受けるが、仕事で不在になるので後日じっくり検討することにしたいと述べている²⁷⁶。

ジャックマンは、『便覧』に関するデューイの指摘に対して10月26日付で詳細な検討結果を書き送っている。そして、デューイから指摘された点の一部は了解したが、それ以外の点はよく理解できないとして、次のように書いている。

(1)『便覧』は学生の便宜に供するために既存の印刷物から必要な箇所を抜粋して編集したものであり、デューイが指摘するように既存の履修規定を書き直そうとするものではない。夏の初めに編集委員会がもたれ、編集方針を確認し、具体的な作業は自分がおこなうことになった。編集委員の中で『便覧』の性格を一番よくわかっていたのはオーウェンであり、夏季休暇中シカゴにいた編集委員は彼一人であったため、印刷直前に相談できたのはオーウェン一人であった²⁷⁷。

(2)全科コースAと全科コースBのカリキュラムに対してそれぞれ「ジュニア・カレッジ」「シニア・カレッジ」という用語を使ったことについて、これは学生たちに履修条件を説明する際の煩雑さを避けるためである。全科コースAはジュニア・カレッジ相当の2年制の初等教員養成課程、全科コースBはシニア・カレッジ相当の初等教員養成課程であるので、ハイスクール卒で入学してくる者、師範学校卒で入学してくる者、ジュニア・カレッジから編入してくる者のそれぞれに対して、

274 John Dewey to Wilbur S. Jackman, October 16, 1903, JDP 3/15, ICarbS, pp. 1-2.

275 John Dewey to Wilbur S. Jackman, October 21, 1903, JDP 3/15, ICarbS (01803).

276 Wilbur S. Jackman to John Dewey, October, 1903, JDP 3/15.

277 Wilbur S. Jackman to John Dewey, October 26, 1903, JDP 3/15, ICarbS (00898), p. 1.

特に全科コースBを志望する場合に一括して「ジュニア・カレッジの18 Majors が必要」と説明するのがわかりやすいと判断したのである。全科コースAと全科コースBのカリキュラムに対してそれぞれ「ジュニア・カレッジ」「シニア・カレッジ」という用語を使うことには明確な根拠がある。大学の公式出版物である*Confidential Record of March*と*Bulletin of Information*で中等教員養成カリキュラムは「シニア・カレッジ・カリキュラム」と明記されている。全科コースBは中等教員養成コースと同格のはずであるから、全科コースBのカリキュラムがシニア・カレッジ・カリキュラムに属することは明らかだ。また、全科コースBと中等教員養成コースの修了者には学士号(Bachelor's degree)が授与されるが、これはシニア・カレッジと同格であることを意味している。全科コースA修了者には准学士号(Associate's degree)が授与されるが、これは全科コースAがジュニア・カレッジと同格であることを意味している。したがって、全科コースAと全科コースBのカリキュラムに対してそれぞれ「ジュニア・カレッジ」「シニア・カレッジ」という用語を使うことには何の問題もないはずだ²⁷⁸。

(3)全科コースBの入学要件として18 Majorsの“college credits”という用語を使うことについて、師範学校卒の入学者がその18 Majorsをジュニア・カレッジで取得する必要があると誤解することは考えられない。この点は明確に説明されている²⁷⁹。

(4)芸術・技術コースの入学要件については、授業担当者からなる委員会が個々の志願者について入学要件を満たしているかどうかの審査をおこなうと理解していたが、大学の公式出版物である*Confidential Record of March*と*Bulletin of Information*には入学要件が明確に示されていて、資格審査の委員会については何の記述もない。したがって委員会が入学資格審査をおこなうとは考えられない²⁸⁰。

この最後の点、すなわち芸術・技術コースの入学資格審査の問題について、ジャックマンは1903年11月5日付のデューイ宛の手紙で、芸術・技術コースへの入学許可とスカラシップを求めるマリー・キッセル(Mary Lois Kissell)²⁸¹からの手紙を同封し、入学資格審査が委員会でおこなわれるというなら、これがその場合に当たるだろうと書いている。そして、資格審査についての委員会の記録は自分のところには来ていないので、いったいだれが審査をするのかとデューイに尋ねている²⁸²。つまり、資格審査の委員会といっても実体はないのではないかとジャックマンは言いたいのであろう。

デューイは11月16日付のジャックマン宛の手紙で次のように返事をしている。(1)キッセルのスカラシップについては、ジャックマンとの話し合いで彼女に半分のスカラシップを与えるとい

278 Ibid., pp. 2-4.

279 Ibid., pp. 4-5.

280 Ibid., pp. 5-6.

281 Mary Lois Kissellはシカゴ美術館(Art Institute of Chicago)の助教師(Assistant Teacher)の肩書きをもち、籠細工と金属加工のインストラクターをしていた。

282 Wilbur S. Jackman to John Dewey, November 5, 1903, JDP 4/1, ICarbS.

うことで既に解決したものと思っている。(2)彼女の入学資格審査については、芸術・技術コースの入学要件を厳密に学術的な形で規定することはできないので、一般的な入学要件を示して、最終的な入学許可は授業担当者からなる委員会で決定すべきだというのが、教育学部教授会の公式見解だったと理解している。そして、キッセルが希望している芸術・技術コースの織物(Textile)専科を担当するハーマー(Harmer)は、彼女が入学要件を満たしていることを認めている²⁸³。同日付の別のジャックマン宛の手紙でも、デューイは家庭科のノートン(Norton)とハーマーがキッセルの入学許可を出してくれれば、この問題は解決すると述べている²⁸⁴。

要するに、デューイの理解では、芸術・技術コースの入学資格審査にあたっては、志願者の技術的な力量(technical attainments)の評価が入るので、他のコースのように入学要件を学術的に規定できず、どうしてもそれぞれの専科の授業担当者による専門的な判断が必要であり、したがって芸術・技術コースの入学資格審査は最終的に授業担当者からなる委員会でおこなうことになっていた。ところが、ジャックマンが編集実務をおこなった『便覧』では、入学要件は『入学案内』に記載されている入学要件、すなわち全科コースの入学要件と実質同等のものを要求することになっていた。そして、どうやらジャックマンは、入学資格審査はこの要件にもとづいて事務的に処理する、つまり受付窓口である主管のオフィスで^{ディーン}資格審査をおこなうと理解していたようである。

ジャックマンから10月26日付で長文の返答を受けて、おそらくデューイは『便覧』の編集委員でジャックマンが印刷直前に相談できたただ一人の委員と言っていたオーウェンに、事実を確認したものである。オーウェンは1903年11月16日付でデューイに手紙を書き、ジャックマンの返答について今は何とも言えないとしながら、もし『便覧』が使用前に改訂されるというなら自分の考えを示したいと、次のように述べている。『便覧』は既存の印刷物からの抜粋を集めたものでよいと言ったのは確かに自分であり、9月になって休暇から戻ったときジャックマンのオフィスに呼ばれてほんの数分、2~3の箇所について相談を受けたのも事実である。しかし、『便覧』を全体としても部分としても検討する時間と機会は自分には与えられなかった。『便覧』編集のための委員会は開かれておらず、自分は委員でもないので責任を問われても困る²⁸⁵。

このオーウェンからの返事を受けて、デューイは1903年11月18日付でジャックマンに再度『便覧』の記載の不備のことで長文の手紙を書き送っている。(1)ジャックマンは『便覧』編集の委員会の議長であり、^{ディーン}主管として編集の実務をおこなったのではないことは明白だ。しかも、委員会は休暇中で開かれておらず、相談を受けたオーウェンは委員でないで自分に責任はないと言っている。(2)「ジュニア・カレッジ」「シニア・カレッジ」の用語の使用は、教育学部が大学内で正式にジュニア・カレッジとシニア・カレッジに位置づけられていればまったく問題ないことだ。現実はそのようになっていないから、『便覧』の記述ではきちんと正確にしておかなければならない。(3)全科コース

283 John Dewey to Wilbur S. Jackman, November 16, 1903, JDP 4/1, ICarbS (10144).

284 John Dewey to Wilbur S. Jackman, November 16, 1903, JDP 4/1, ICarbS (10146).

285 William Bishop Owen to John Dewey, November 16, 1903, Presidents' Papers, 1889-1925, 18/20, ICU.

BはいわばPost Graduate Normal School、つまり師範学校卒業生向けのコースなのだから、入学要件に“college credits”という用語を使用するのはやはり不用意だ。(4) 芸術・技術コースの入学要件について、ジャックマンは質問に答えていない。さらに、委員会が入学資格審査をおこなうとは考えられないとの説明は通らない。なぜなら、*Confidential Record of March* では、入学要件は教育学部の芸術・技術コースの委員会で決定されるから、芸術・技術コースを希望する者はすみやかに教育学部の当局に問い合わせるようにと記されているからだ²⁸⁶。

さらにデューイは同じ長文の手紙で、全科コースAの学生たちが履修する技芸諸科目と教育実習の記録について『便覧』に何も説明がないことに触れ、特に全科コースAの技芸諸科目はnon-creditの“extra”科目であるがゆえにこのことを『便覧』で公式に扱っておく必要があると指摘している。そして、そもそも『便覧』を発行することになった発端は、そうした公式の説明がないために昨年度春学期の教授会で混乱が生じたためであり、それを忘れるとはジャックマンの重大な手落ちだと手厳しく追求している²⁸⁷。これは先に10月21日付ジャックマン宛の手紙でデューイが取り上げていたことであるが、デューイは再度この問題を取り上げたわけである。そして、同じ11月18日付のハーパー学長宛の手紙でもこのことを取り上げ、『便覧』の発行が必要になったいきさつを次のように説明している。春学期の卒業判定の際、一部の学生たちの卒業が教育実習の不備を理由に否決されたが、その学生たちは卒業単位(Majors of credit)は満たしていた。ところが、学生たちの教育実習の不備を示す公式記録はどこにもなく、学生たちに教育実習の不備を通知した記録もないことがわかった。以後そうした混乱をなくすために『便覧』を発行して教育実習の記録について公式の説明をすることになった²⁸⁸。

11月14日付のデューイの長文の手紙に対して、ジャックマンは再度11月24日付で反論の手紙を書いている。(1) オーウェンが委員会は一度も開かれなかったとして責任を放棄するのは納得できない。委員会は任命直後に開かれ、『便覧』は学生に関係する諸規定を抜粋して編集すればよいので、ディーン主管でもやれる仕事だとオーウェンは述べた。しかし、『便覧』の基本的性格は委員会で話し合われた²⁸⁹。つまり、ジャックマンの主張によれば、彼が編集の実務をおこなったのは委員会が主管に仕事を任せただけで、『便覧』の不備について自分ひとりに責任を押し付けられるのは心外だということであろう。(2) 教育実習の記録については既に対応策を講じている²⁹⁰。

ジャックマンはこれ以外にもデューイの指摘に対して事細かに反論しているが、ほとんどは実務担当者としての実情を訴えるものとなっている。ジャックマンにしてみれば『便覧』のことで実務

286 John Dewey to Wilbur S. Jackman, November 18, 1903, JDP 4/1, ICarbS, pp. 1-3. *Confidential Record of March* は *The University Record* (『大学報』) の Confidential Number, March 1903 (部内版、1903年3月) のことである。 *The University Record*, The University of Chicago, Confidential Number, March 1903 (Chicago: The University of Chicago), p. 3.

287 Ibid., pp. 3-4.

288 John Dewey to William Rainey Harper, November 18, 1903, Presidents' Papers, 1889-1925, 18/20, ICU.

289 Wilbur S. Jackman to John Dewey, November 24, 1903, JDP 4/1, ICarbS, pp. 1-2.

290 Ibid., p. 3.

の実情を知らないデューイが一方的に難点を攻めてきているというふう感じていたことが文面からうかがい知れる。しかし、彼はデューイが特に強く指摘した点、すなわち①全科コースAと全科コースBのカリキュラムに対してそれぞれ「ジュニア・カレッジ」「シニア・カレッジ」という用語を使うこと、②全科コースBに師範学校卒で入学してくる者に対して“college credits”を求めること、③芸術・技術コースの入学要件と入学資格審査の説明に矛盾があることについては、ほとんどまともに返答をしていない。これらの指摘は、シカゴ大学教育学部が名実ともに初等・中等教員養成のプロフェッショナル・スクールとして出発するにあたり、細部に至るまで原則を貫きたいというデューイの思いから発した指摘であったように思われるが、ジャックマンはどちらかというと実務的な対応に終始していて、その分、デューイの苛立ちを招いていたように見える。

また、全科コースAの学生たちの履修する技芸諸科目と教育実習の記録の扱いについては、これがもともと『便覧』を発行する発端になったことであるがゆえに、ジャックマンが『便覧』でこの説明を落としたことをデューイは、ジャックマンの仕事ぶりの杜撰さを象徴するものとして手厳しく追求した。1903年12月11日付のジャックマン宛の手紙で、デューイは三度この問題を取り上げ、全科コースAの学生にとって教育実習はnon-creditの必修になっているがゆえに、『便覧』できちんとした公式の説明をする必要があると述べ、ジャックマンが言葉どおり善後策を講じたかどうか尋ねている²⁹¹。これに対して、ジャックマンは12月14日付のデューイ宛の手紙で、教育実習が必修であることは個々に学生に説明したと返事している²⁹²。ここでもジャックマンは実務的に善処するにとどまったようである。

5. ブレイン・ホール移転後の学部運営をめぐる諸問題

デューイは1903年11月3日付でハーパー学長宛に手紙を書き、学部長の自分が主管ジャックマンの仕事と影響力を奪い取ろうとしているのではないかという指摘に対して返答している。その中で、デューイはジャックマン自身が「学部の管理面は今や完成され、既に私[ジャックマン]のオフィスはだいぶ救われている。今学期の開始以来主管のオフィスに集中していた諸機能が正しく分担されるようになるとともに、主管のオフィスの本来の職務の多くが必然的に無視されるようになった」と書いてきたことを紹介し、「もし私[デューイ]が教育学部の仕事の大半を私のオフィスに集中させようとしていると貴兄[ハーパー学長]が信じる根拠があるというのであれば、すぐにでもご指摘いただきたい。私としては事態の改善を図るなり、あるいは実際の状況をお知らせするなりしたいと思います」と書いている。ジャックマンは、一方でデューイに対しては教育学部の管理組織が完成して主管の業務がだいぶ整理されたことにより主管の本来の職務までが無視されるようになっていると訴えながら、他方でハーパー学長に対してはデューイが主管の仕事奪って自分の手元に

291 John Dewey to Wilbur S. Jackman, December 11, 1903, JDP 4/2, ICarbS (01076).

292 Wilbur S. Jackman to John Dewey, December 14, 1903, JDP 4/2, ICarbS.

管理面の仕事を集中させようとしていると訴えている。デューイはそうしたジャックマンの訴えの矛盾をハーパー学長に知らせているのである。今回のこのジャックマンの訴えは、デューイに対する感情的な想いから発したという側面が強い。それにしても、学部運営をめぐる両者の間の反目は、些細なことをきっかけにいつでも再燃する状態にあったことは確かである。

Elementary School Teacher 誌の編集者問題

Elementary School Teacher 誌の編集者問題は、ジャックマンが編集者を引き受けられないとすることで頓挫していた。デューイは1903年10月22日付のジャックマン宛の手紙で、ジャックマンが編集者の仕事を引き受けてくれると聞いて嬉しいと表明している。そして、自分の手元にある原稿やゲラを説明書きと一緒にジャックマンのところへ送っている²⁹³。ジャックマンはElementary School Teacher誌の編集責任者として教育学部の出版委員会の委員になっている²⁹⁴。

ところが、10月26日付のデューイ宛の手紙で、ジャックマンは編集者の仕事を再度辞退する申し出をおこなっている。その理由として、彼は昨年度の新しい編集方針に今でも納得できないということをおこなっている。つまり、Elementary School Teacher 誌を旧シカゴ学院の附属小学校の授業実践報告書という位置づけから、初等教育全般の専門雑誌に切り替えるというデューイの編集方針についていけないということである。そして、これはデューイやヤング夫人に対する個人的感情から発したのではないとわざわざ付言している。そのうえで、善後策を次のように提案している。(1)デューイが編集者を引き受ける。(2)“Edited by the Director and Faculty of the College of Education and Elementary School”、つまり「教育学部長と教員養成部および附属小学校教員団による編集」と明記する。(3)デューイが全体の編集方針を作成する。(4)年間スケジュールをデューイが作成する。(5)附属小学校と教員養成部のそれぞれの教員団に対して編集分担を割り当てる²⁹⁵。どうやら、ジャックマンの最大のこだわりは、Elementary School Teacher誌の新しい編集方針のもとで、パーカー以来の旧シカゴ学院系の教員団による授業実践報告の場が奪われてしまうことへの懸念であったことがうかがわれる。

翌10月27日付でデューイはジャックマンに返事の手紙を出し、ジャックマンから送り返されてきた11月号の原稿を保管するのはかまわないが、編集者は引き受けられないと述べている。そして、大学の公的な規則で「大学のジャーナルは関係するデパートメントのヘッドの決定に従う」と決められているので、先の10月26日付のジャックマンの手紙にある(1)と(3)の提案はもともと不必要な提案だと述べている。つまり、最初からElementary School Teacherの最終編集責任者は学部長のデューイであり、編集方針を決めるのも学部長のデューイであって、わざわざジャックマンから依頼される筋のものではないという趣旨である。さらに、大学のジャーナルはあくまでもデパートメ

293 John Dewey to Wilbur S. Jackman, October 22, 1903, JDP 3/15, ICarbS (01810).

294 John Dewey to William Rainey Harper, October 22, 1903, JDP 3/15, ICarbS; John Dewey to William Rainey Harper, October 23, 1903, Presidents' Papers, 1889-1925, 30/25, ICU.

295 Wilbur S. Jackman to John Dewey, October 26, 1903, JDP 3/15, ICarbS (01813).

ントのヘッドの指示のもとで、ヘッドの指示に従って編集されるものであるが、ジャックマンの(1)(2)(4)(5)の提案では、ジャックマンの指示により学部長のデューイが編集をおこない、しかも教員団の意向に従う形で編集をおこなうということになり、これは「事態を逆にするものだ」と述べている。そのうえでデューイは、先日学長の要請でヤング夫人がジャックマンに会い、その結果ジャックマンが編集の仕事を引き受けることになったのだから、学長に辞任願いを提出しないかぎり、ジャックマンは正式にElementary School Teacherの編集者なのだとして最後通牒を申し渡している²⁹⁶。つまり、Elementary School Teacherの編集をだれがおこなうかは学部長のデューイが決めるもので、編集者はジャックマンといったんは決まった以上、この問題は既に学長と学部長の間で決定済みであり、辞任願いを出さないかぎり認められないというわけである。

さらにデューイは同日付でもう1通ジャックマン宛に手紙を出し、Elementary School Teacherの編集をめぐるデューイ＝ヤング夫人とジャックマンとの間に派閥争いがあるというジャックマンの見方は根拠がないと退けている。そして、昨年度のジャーナルの編集方針が教育学部の利益にかなっていないというジャックマンの意見は、ジャーナルの編集方針に対する根本的な批判であるにもかかわらず、ジャックマンがそれを編集者(ヤング夫人)やジャーナルそのものへの批判と解されては困ると述べているのは理解しがたい矛盾だと述べている²⁹⁷。

もともとElementary School Teacherの編集者問題は、1903年6月になってヤング夫人が編集の仕事を辞めてしまい、後任の編集者にデューイ夫人を充てようとしたが、彼女も辞退し、さらにジャックマンに依頼してジャックマンも固辞したことから生じた問題である。雑誌そのものは編集者不在のまま9月号だけは何とか発行し、10月号は休刊となり、11月号の編集も原稿が集まった状態で頓挫してしまった。ジャックマンから編集の仕事はデューイ自身がやるようにと言われたことがデューイにはかなり心外だったと見える。10月27日付の2通目の手紙で、学部長の権限までもち出してジャックマンの提案に反論しているあたりに、彼のショックの大きさがうかがわれる。

ハーパー学長は、デューイとヤング夫人とジャックマンの3人と話し合いたいという伝言を1903年10月29日付で学長室のコップ(M. R. Cobb)を通じて出している²⁹⁸。話し合いの結果は不明である。しかし、11月5日付のハーパー学長宛の手紙で、デューイは「11月号は数日前に発行すべきなのに、まだゲラの校正から先に進んでいない」と言い、編集者問題をどう解決したらよいかと学長に問うている²⁹⁹。どうやら学長を含めた4者による話し合いは不調に終わったようである。

これを受けて学長はふたたびヤング夫人に編集者を依頼したようである。11月7日付でヤング夫人はハーパー学長宛に手紙を書き、12月号と1月号については編集の仕事を引き受けるけれども、ゲラ校正の状態になっている11月号については学部長と主管の二人に責任があるので、11月号には関わらないと述べている。そして、Elementary School Teacherの編集者問題をめぐる一連の経緯

296 John Dewey to Wilbur S. Jackman, October 27, 1903, JDP 3/15, ICarbS (01816).

297 John Dewey to Wilbur S. Jackman, October 27, 1903, JDP 3/15, ICarbS (01817).

298 M. R. Cobb to John Dewey, October 29, 1903, JDP 3/15, ICarbS.

299 John Dewey to William Rainey Harper, November 5, 1903, JDP 4/1, ICarbS.

を学長に次のように説明している³⁰⁰。

- ①1903年6月、ヤング夫人編集者辞任を学長に申し出る。
- ②学長は辞表を預かったまま、学部長に新しい編集者の推薦を依頼した。ヤング夫人は、これをもって事実上解任を認められたものと解した。
- ③1903年8月、ライス嬢の動議により、教育学部教員会議は満場一致で新編集者にデューイ夫人を推した。最近になって知ったことだが、デューイ夫人はこれを受け、編集実務に着手していた。
- ④学部長は、新しい編集方針が教員団全員から支持されそうもないと知って、デューイ夫人に編集者を引き受けないように助言した。デューイ夫人は編集の仕事を断った。
- ⑤ [1903年9月] 学部長は主管に編集者を引き受けるよう打診した。主管はその地位を欲していたようだったが、自分の編集方針を文書で学部長に認めるよう求め、かなわなかったので編集者を断った。
- ⑥ [1903年10月] ヤング夫人に編集の仕事が依頼された。
- ⑦年度の残りの期間の編集の仕事を計画するに当たって、ヤング夫人は教員団の好意的な協力を得たが、ジャーナルを教育学部の機関誌にするという主管の考えが教員団の基本計画であることを知って、仕事の概略を決めたところで、編集者を再び主管に依頼するよう学長に提案した。そして、学長の申し出により、ヤング夫人が主管に編集者を依頼した。
- ⑧主管は編集者を喜んで引き受けた。数日後、主管は教員団を集めて、編集計画を話し合った。しかし、彼が後始末の仕事を引き受けることにライス嬢が反対したこと、学部長から送り返されてきた11月号のゲラ校正を見て仕事の煩雑さに狼狽したことにより、ヤング夫人に編集者を引き受けると言ったのはちょっとしたはずみであり、編集者は引き受けられないと断ってきた。
- ⑨学部長はライス嬢を編集者に推薦した。
- ⑩主管は学部長宛の手紙でヤング夫人を編集者にすべきでないと述べた。
- ⑪学長はヤング夫人に、通常管理の仕事をしている人は後任が決まるまでは仕事を継続するのが筋だと書いてきた。

ヤング夫人は1903年6月以来の一連の経緯をこのように整理して説明している。そのうえで、教員団はデューイ夫人を編集者に推薦し、学部長はライス嬢を推薦し、主管はヤング夫人が編集者になるべきでないと主張し、ヤング夫人自身も編集者になるべきでないと考えているにもかかわらず、学長はヤング夫人が編集者を引き受けないことを非難していると述べ、12月号と1月号だけに限って編集の仕事を引き受けると約している。

ヤング夫人による一連の経緯の説明は、学部長のデューイに対しても、主管のジャックマンに対

300 Ella Flagg Young to William Rainey Harper, November 7, 1903, Presidents' Papers, 1889-1925, 71/2, ICU, pp. 1-5.

しても一定の距離を置く比較的客観的な説明だと見てよいであろう。それにしても、「私の人生でいまだかつてこれほど複雑に絡み合った問題に巻き込まれたことはない」³⁰¹というヤング夫人の言葉は、*Elementary School Teacher*の編集方針をめぐるデューイとジャックマンの対立にほとんど愛想をつかしているヤング夫人の心境を表わしているように思う。

両者の対立は、この時点になると、雑誌のタイトルページに記載する編集者名のことに焦点が移っていた。つまり、先の10月26日付のジャックマンの手紙にあった(2)の提案³⁰²をめぐる両者の駆け引きに対立の焦点が置かれるようになっていた。11月7日付のヤング夫人の手紙によれば、ハーパー学長は10月31日付でジャックマンのこの提案を受けることをデューイに通知したようであり、ヤング夫人自身もそれを受け入れている。そして、「ジャーナルは私 [ヤング夫人] の名前の記載なしに出版されることになるでしょう」とハーパー学長に書いている³⁰³。

11月7日付のヤング夫人の手紙を受けて、ハーパー学長は11月14日付でデューイ宛に手紙を出し、ヤング夫人が今年度の*Elementary School Teacher*の編集者を引き受けてくれたこと、そして11月号の仕事についてもやってくれることを知らせている。そして、「ヤング夫人の意見に従って、ジャーナルは教育学部教員団の編集 (edited by the Faculty of School of Education) と銘記することになった」と書いている³⁰⁴。どうやら最初のジャックマンの提案では編集者名を“Edited by the Director and Faculty of the College of Education and Elementary School”とすることになっていたのを、ヤング夫人の意見に従って編集者名から“Director”と“Elementary School”の二つをはずすことにしたようである。

11月16日付でデューイはハーパー学長宛に返事の手紙を出し、「貴兄とまったく同様、今年度の残りの期間のことが決着して救われました」と書いている。そして、「タイトルページには教育学部教員団の編集 (edited by the Faculty of School of Education) と記され、これ以外の名前は出さない」ということを了承している³⁰⁵。

こうして、*Elementary School Teacher*の編集者問題は二転三転したあげく、結局ヤング夫人が再び編集者を引き受けることで、少なくとも1903-1904年度中については決着した。

体育館の使用日程の調整

1903年10月、教育学部教員養成部の体育科教育助教授のカール・クロー (Carl Johannes Kroh) とシカゴ大学の衛生・医療相談の助教授をしているレイクロフト (Joseph Edward Raycroft) の間に体育館の使用日程をめぐる衝突が生じ、そのことでデューイとジャックマンの間にちょっとした

301 Ibid., p. 5.

302 Wilbur S. Jackman to John Dewey, October 26, 1903, JDP 3/15, ICarbS (01813).

303 Ella Flagg Young to William Rainey Harper, November 7, 1903, Presidents' Papers, 1889-1925, 71/2, ICU, p. 6.

304 William Rainey Harper to John Dewey, November 14, 1903, JDP 4/1, ICarbS.

305 John Dewey to William Rainey Harper, November 16, 1903, JDP 4/1, ICarbS.

た見解の相違が生じた。事の発端は、レイクロフトがクローに教員養成部と附属小学校と附属ハイスクールの体育館の使用日程について変更を求め、そのことでクローはレイクロフトから不当な「干渉」を受けたとジャックマンに訴えたことによる。1903年10月19日付のデューイ宛の手紙で、ジャックマンはこの問題を取り上げ、そこには「大学の他のカレッジとわれわれ教育学部との関係」をどう理解するかという問題があり、レイクロフトとクローの権限関係をはっきりさせてほしいと書いている³⁰⁶。言うまでもなく、ジャックマンは両者の関係は対等のはずで、レイクロフトが教育学部のクローに対して「指示」する立場にはないはずだと考えているのである。

デューイは10月21日付でジャックマンに返事の手紙を出し、クローと会見した結果、彼は彼がレイクロフトから「干渉」を受けたと伝えられたことに驚いていたとジャックマンに告げている。つまり、クローがレイクロフトから「干渉」を受けたというのは、ジャックマンの誇張だというわけである。そのうえで、今後は不用意に大学の他学科の方から「干渉」を受けたなどと言わないように、もっと慎重であるべきだとジャックマンをたしなめている。そして、レイクロフトには体育館の使用をめぐる附属小学校、附属ハイスクール、教員養成部の間の日程を調整するために、各学校から事情を聞いて日程を提案すること以上の権限はないし、クローもそれで納得していると述べている³⁰⁷。

これに対してジャックマンは10月28日付でデューイ宛に返事の手紙を出し、クローが納得しているのならそれでよいが、しかし教育学部の内規によれば教員養成部の体育教員であるクローは教育学部全体を通じて体育関係のすべてのことを監督する任にあることに間違いないと述べ、レイクロフトがクローのそうした権限を侵害したという問題の核心は依然未解決のままだと述べている³⁰⁸。

これに対してデューイは10月29日付でジャックマン宛の手紙で次のように反論している。ジャックマンが内規のことを言うのであるなら、教員養成部の教員であるクローは附属小学校と附属ハイスクールを直接監督する立場にはなく、附属小学校長または附属ハイスクール主管を通して間接的に監督できるにすぎない。つまり、教員養成部のクローは、ジャックマンの言うように附属小学校と附属ハイスクールを含めた教育学部全体の体育関係のすべてのことを監督するわけではないというわけである³⁰⁹。要するに、教員養成部の教員であるクローの監督権限は附属小学校や附属ハイスクールにまで及ぶものではないとデューイはジャックマンに申し渡しているのである。これは同時

306 Wilbur S. Jackman to John Dewey, October 19, 1903, JDP 3/15, ICarbS (01798).

307 John Dewey to Wilbur S. Jackman, October 21, JDP 3/15, ICarbS (01802).

308 Wilbur S. Jackman to John Dewey, October 28, 1903, JDP 3/15, ICarbS (01819). ここでジャックマンが根拠としてあげているのは、1903年3月に発行された内部向けの『大学記録』に掲載された教育学部の内規集にある「教員養成部のいずれかの部署で授業を担当するものは、各学校 [附属小学校と附属ハイスクール] の同じ部署の監督をする」という規定である。University Record, The University of Chicago, Confidential Number, March 1903 (Chicago: The University of Chicago Press), p. 3.

309 John Dewey to Wilbur S. Jackman, October 29, 1903, JDP 3/15, ICarbS. ここでデューイがジャックマンへの反論の根拠にあげているのは、先にジャックマンが根拠とした内規の続きの部分で、「教員養成部のいずれかの部署で授業を担当するものは、……監督者として各学校の主管または校長に報告しなければならない」という部分である。University Record, Confidential Number, March 1903, p. 3.

に、教員養成部の主管であるジャックマンの権限も教育学部全体に及ぶものではなく、教員養成部に関わる事項に限られるものだけということを意味していた。

夏学期への対応

この時代のシカゴ大学は年4学期のクォーター制 (quarter system) をとっていて、7月からの9月までの夏学期 (Summer Quarter) には一般の授業はおこなわれず、夏季休暇を利用した非正規学生 (non-classified students) のための授業が数多く開講されていた。教育学部の夏学期の授業はもっぱら現職教員向けの夏期講座となっていて、そのためカリキュラム上も重要な位置づけをもっていたようである。例えば、ハーバー学長は『学長報告1902年7月-1904年7月』の「教育学部」に関する報告の中で、「とりわけ夏季には学校教員たちが職務から開放されるので、教育学部の学生数はかなり多くなる。秋に彼らが現場に戻ったとき、ここで学んだ理論をおのずと実践に移すようになるので、教育学部は幅広い影響力を及ぼしている」と、教育学部の夏学期の重要性を強調している³¹⁰。

ちなみに、1903-1904年度の教育学部の登録学生数を学期ごとに見ると次の表ようになっている。他の通常の学期に比べて夏学期の受講者が圧倒的に多いことがわかる。

1903-1904年度 教育学部の学期別登録学生数³¹¹

Summer Quarter	Autumn Quarte	Winter Quarter	Spring Quarter	全体
382	118	122	133	563

また、年間の登録学期数別の学生数を見ると次の表のようになっている。1学期のみ登録した者が圧倒的に多いことがわかる。その大部分は夏学期の受講者ということになる。ハーバー学長の報告にあるように、教育学部にとって夏学期がいかに重要な位置を占めているかがわかる。

1903-1904年度 教育学部の登録学期数別学生数³¹²

1 Quarter	2 Quarters	3 Quarters	4 Quarters	基本 (3 Quarters)
455	34	69	6	251.5

デューイは1903年11月3日付のジャックマン宛の手紙で、夏学期の授業をおこなった教員たちからのレポートと、それにもとづいたジャックマン自身の報告を受けて、夏学期の諸課題を検討するための委員会の設置を提起している。また、教育学部の教員と教職経験をもつ学生とからなる非公

310 The President's Report, July 1902-July 1904, The University of Chicago (Chicago: The University of Chicago Press, 1905), pp. 14-15.

311 Ibid., p. 140.

312 Ibid., p. 140.

式の研究会 (ペダゴジカル・クラブ Pedagogical Club) を立ち上げて、教職経験豊かな学生を教育学部の教育改善に役立てることを提案している³¹³。デューイは、師範学校あるいは専門学校 (ジュニア・カレッジ相当) を卒業した教職経験者に対する大学レベルの教師教育のニーズをかなり意識していたことがわかる。ジュニア・カレッジ相当の初等教員養成機関から初等・中等教員養成をおこなうシニア・カレッジ相当のプロフェッショナル・スクールへと脱皮した教育学部の使命を、デューイはそこに見ていたのである。

約1ヵ月後、デューイはジャックマンから夏学期に関する委員会の報告を受け取っている。これを受けて1903年12月5日付のジャックマン宛の手紙でデューイは、委員会報告によって教育学部側の夏学期の取り組みについては明確にされたが、教育学部で開講する授業科目と教育学部以外の教員たちが開講するハイスクール教員向けの授業科目との連携を図るためには、交渉にまだ1ヶ月以上はかかるだろうと述べている³¹⁴。

ジャックマンは同日付の返事で、夏学期に心理学 (Department of Psychology) からの授業科目の提供がないことを指摘している。心理学は大学本体の組織であり、1903 - 1904年度にデューイが主任教授を務める哲学科から独立して、デューイが主任教授を兼務する単独の学科組織となっている。ジャックマンは、心理学が夏学期に授業科目を開講することは「カリキュラム上とても重要であり、無視されるべきではない」と訴えている³¹⁵。

これに対してデューイは1903年12月8日付の返事の手紙で、ジャックマンの先の報告は心理学関係の授業科目の開講のことも含めて「将来の計画に必要な情報をえるのに不可欠なものだ」と述べ、「ハイスクール教員向けの授業科目に関してはいまだ何も体系的な整備がなされていない」と指摘している³¹⁶。ジャックマンが指摘する心理学関係の授業科目の開講も重要だが、ハイスクール教員向けの授業科目を体系的に整備することの方が夏学期の将来計画としてははるかに本質的だとデューイは考えているわけである。

1904年1月20日付のジャックマン宛の手紙で、デューイは次年度の夏学期の予定について最終調整に着手したいと伝えている³¹⁷。

ジャックマンは1月22日付のデューイ宛の手紙で、夏学期の案内は2月1日発行予定と記している³¹⁸。

同日付の別のデューイ宛の手紙でジャックマンは、夏学期に学生は4科目 (4 Majors) まで受講できるが単位 (credit) としては3 Majorsしか認められないことが夏学期に関する委員会から勧告され、これが次回の大学評議会 (Council) で決定されれば規則として印刷されることになるだろうと述べている。また、同じ手紙でジャックマンは、1904年開催のセントルイス万国博にやってくる

313 John Dewey to Wilbur S. Jackman, November 3, 1903,

314 John Dewey to Wilbur S. Jackman, December 5, 1903, JDP 4/2, ICabS (01066).

315 Wilbur S. Jackman to John Dewey, December 5, 1903, JDP 4/2, ICabS (01068).

316 John Dewey to Wilbur S. Jackman, December 8, 1903, JDP 4/2, ICabS.

317 John Dewey to Wilbur S. Jackman, January 20, 1904, JDP 4/3, ICabS

318 Wilbur S. Jackman to John Dewey, January 22, 1904, JDP 4/3, ICabS (01078), p. 1.

著名人 (例えばドイツのライン Rein など) を何人か確保して、夏学期に授業をやってもらったかどうかと提案している³¹⁹。

さらにジャックマンは同日付のもう一つ別のデューイ宛の手紙で、附属小学校と附属ハイスクールからの夏学期に関するレポートが提出されるまでは、夏学期の案内を発行することはできないと書いている³²⁰。

これに対してデューイは1月25日付でジャックマン宛に、デューイ夫人が作成した附属小学校の夏学期に関する委員会の報告書を送るとともに、附属ハイスクールの夏学期に関する委員会の報告については主管のオーウェンと一緒に学長に会って問題点を検討したいと書いている。また、ラインのような著名な外国人を夏学期に招聘することについては既に学長に申し入れたと伝えている。さらに同じ手紙でデューイは、夏学期に教育哲学または教育実践の諸問題を扱う教育学の授業科目をいくつか開設することについてジャックマンの意見を求めている³²¹。

1月27日付の返事でジャックマンは、夏学期に教育学の授業科目を開設するというのなら、大学の他の諸学科が開設する授業科目をはっきりわかるような形で関連づける授業科目が望ましいけれども、そのような授業科目をやる人がいるだろうかと述べている。そして、暗にデューイ自身がそれを担当すべきではないかと示唆している³²²。

ハイスクール教員養成への取組み

先の1月22日付の手紙でジャックマンは、附属小学校と附属ハイスクールからの夏学期に関するレポートの提出を催促していた。附属ハイスクールの夏学期に関する委員会の報告は、1904年1月20日付で附属ハイスクール主管のオーウェンから学部長のデューイに提出された³²³。他方、デューイ夫人が取りまとめた附属小学校からの報告については1月25日付のデューイからジャックマン宛の手紙に同封されて送られたらしいが、報告書そのものは不明である³²⁴。

オーウェンの報告は、シカゴ大学におけるハイスクール教員養成の体制と、そのもとで教育学部が果たす役割について検討すべき課題を明確にしている。

オーウェンはこの報告の中で、教員養成部 (College of Education) の教員団 (faculty) はこれまでのところ初等教員養成を主とする教員団になっている一方で、ハイスクール教員向けの授業科目は大学の各学科 (Departments) が提供している現状を指摘したうえで、ハイスクール教員養成をめぐる教育学部と大学の各学科との間の権限の対立を回避するためには、大学の各学科でハイスクール教員向けの教職科目の授業を開設するようにすべきだと提言している。彼はそのメリットと

319 Wilbur S. Jackman to John Dewey, January 22, 1904, JDP4/3, ICabS (01120) p. 1.

320 Wilbur S. Jackman to John Dewey, January 22, 1904, JDP 4/3, ICabS (01121).

321 John Dewey to Wilbur S. Jackman, January 1904, JDP 4/3, ICabS (01123).

322 Wilbur S. Jackman to John Dewey, January 27, 1904, JDP 4/3, ICabS (01128).

323 William Bishop Owen to John Dewey, January 1904, Presidents' Papers, 1889-1925, 18/21, ICU.

324 John Dewey to Wilbur S. Jackman, January 25, 1904, JDP 4/3, ICabS (01123).

して、大学の各学科がそれぞれ学科のまとまりとしてハイスクール教員養成に取り組むことができることをあげている。例えば、大学のラテン語学科はジュニア・カレッジ課程、シニア・カレッジ課程、大学院課程、ハイスクール教員養成課程の全体を通じて大学のラテン語教育を担い、教育学部の教員養成部にいるラテン語教員もラテン語学科のメンバーとなり、ラテン語学科の中で教員養成に関連する仕事を担当する。そして、ハイスクール教員養成課程は、ちょうどシニア・カレッジやジュニア・カレッジの課程がそうであるように、各学科間の協力と調整によって授業開設やカリキュラムの運営をおこない、教育学部の教員養成部が全体のコーディネーターの役割を果たすようにする。つまりオーウェンの提案は、現行では一方で大学の各専門学科の教職志望学生に対してハイスクール教員向けの教職科目を教育学部が提供し、他方で教育学部にも中等教員コースがあつて、こちらは各教科（例えばラテン語）の専門教育を大学の各学科に依頼するということがおこなわれているのだが、それを改め、ハイスクール教員養成を大学の各学科の専門教育の中で専門教育に並行しておこなうようにし、専門教育とハイスクール教員養成を連結させるというものである。

オーウェンのこの報告を受けて、デューイは1月21日付でハーバー学長にハイスクール教員養成の問題についてオーウェン、デューイ、学長の三人で話し合いをもつてほしいと申し入れている³²⁵。ただし、三人の話し合いによりその後どのような措置が取られたのかは不明である。

他方、教育学部の中等教員養成コースの学生に授与される教育専門ディプロマ (professional diploma in Education) の扱いをめぐる、ジャックマンとデューイの間でちょっとしたやりとりがあつた。ジャックマンは1904年1月22日付の別のデューイ宛の手紙で、教育ディプロマは学位 (Degree) ではないとしたのに対して、デューイは1月25日付のジャックマン宛の手紙で、教育ディプロマは学位であると答えている³²⁶。ジャックマンの理解では、中等教員養成コースの学生は教育学部で教職科目 (professional courses) を最低4 Majors取得し、残り14 Majorsをすべてシニア・カレッジの専門科目で取得すれば、A.B.、S.B.、Ph.B.のうちいずれかの学士号を授与されて卒業できるので、中等教員養成コースの学生が卒業時に教育ディプロマを授与されるためには教育学部の専門科目をさらに上乗せして履修する必要があるのではないかというのである³²⁷。これはおそらく、初等教員養成の全科コースBでは、教職科目の3 Majorsと教科専門科目の15 Majorsのすべてを教育学部で履修して、卒業時にEd.B (教育学士) と教育特別ディプロマ (special diploma in Education) の両方が授与されることになっているのに対応させて、中等教員養成コースでも教育学部において教科専門科目の単位を取得するようにしないかぎり、教育ディプロマは授与できないという意味で言っているのであろう。

これに対してデューイによれば、当初教育学部の中等教員養成コースではシニア・カレッジの商業コースや経営学コースと同様にPh.B. (哲学士号) を出すつもりで、これに教育専門ディプロマを

325 John Dewey to William Rainey Harper, Presidents' Papers, 1889-1925, ICU.

326 Wilbur S. Jackman to John Dewey, January 22, 1904, JDP 4/3, ICarbS (01122); John Dewey to Wilbur S. Jackman, January 25, 1904, JDP 4/3, ICarbS (01124).

327 Wilbur S. Jackman to John Dewey, January 22, 1904, JDP 4/3, ICarbS (01122).

付けることを考えていたのだが、実際には教育学部が出せる学位はEd.B. だけだとわかり、そのためEd.B.がそのまま教育専門ディプロマになるということになったと述べている。だから、教育ディプロマは学位であるとデューイは説明している。そして、現状ではハイスクール教員に必要な教科専門の授業科目はシニア・カレッジが担っており、教育学部のスタッフは主として初等教員養成を担っていて、教育学部での授業科目の履修を過度に増やすことは難しいので、中等教員養成コースの学生にA.B.、S.B.、Ph.B.などの学位と合わせて教育ディプロマ=Ed.Bを授与するという「便宜」はやむをえないという認識を示している。ただ、将来の課題として、教育ディプロマ=Ed.Bの授与には教育学部の専門科目の履修を上乗せすることも検討しなければならないと述べている³²⁸。

328 John Dewey to Wilbur S. Jackman, January 25, 1904, JDP 4/3, ICarbS (01124).